があるとて僕も決闘狀を受て居るけれど一人行くも可笑くあいから君一緒に行うでいあいかあど言葉巧に言廻して連込むのサ難き給ふな君アノ茶谷が此倶樂部のポン引を勤めて居たのだせ（長）何だと茶谷がポン引を（筆）素より是は内内の職務さかから誰も茶谷がポン引とは知ぬけれど僕は同じポン引の猿田と云ふ者から聞た猿田と茶谷いポン引同士で商賣忌み敵と云ふ者か大層仲が悪く夫に茶谷は此頃龜子嬢と婚姻すると云ふ風說が立てから急に融通が利く樣にかり前の週間からポン引を罷め此四五日い倶樂部中で第一等の大勝負を遣り生憎と又運が好くて連戰連勝だから殆んど飛鳥を落す勢ひがある夫だから猿田と云ふ奴が猶ほ羨ましがッて昨夜も僕に喋々と茶谷を事を話したが彼奴最初は食事だけ唯で食して貰はうと云ふ卑陋千万な約束でポン引を初めたさうだ尤も夫い彼奴が一番零落した時であッたけれど其後澤山に鳥を呼ぶ者だから手柄に由て第一

等のポン引に進み再び世に出で交際も初め龜子嬢よも見染られる樣になつたと云ふ事だ長々い聞く事毎に驚きて「でい君此樣な事を三峯老人の耳に入れても差支いあるまいか（筆）ないとも殊に老人が茶谷を買被て居るのだから云て遣るが忠義と云ふ者夫に猿田に問へば猶だ詳しい事が分るかも知れぬ（長）最う少し早く此事を聞ば充分爲になつたけれど今でい老人が茶谷よ惚込で仕舞ひ殊に龜子の婚禮も直次の週間に行ふと云ふ事だから僕が云出ても却て讒訴と思はれるかも知ぬ兎に角中へ遣入て茶谷が博奕を打つ所を見屈やう自分の目で確に見たと云へば是に增す證據いないから併し君茶谷が僕の顏を見れば驚いて其儘歸るだらう（筆）夫い何とも分らぬから茶谷が愈々初めるまで君いあるべく其顏を見せぬ樣にして居るが好い（長）好し〳〵爾しやう是だけの問答い倶樂部の入口に立しまし密々と語らひし所あるが是より二人い石段を上り其玄關を踏み入るよ

茲に一人の番人あり忝しく二人に禮す筆齋ハ之に向ひ「コレ大糟此紳士ハ已の友達で今夜已の紹介より由り遊びに來たのだから員外來客帳へ附て置け若し間違があれバ已が引受ける」と云ふ大糟と呼るゝ番人ハ畏まりて長々の名を控ゆ（筆）今夜勝負ハ何の樣な有樣だ（大）ヘイ茶谷伯爵が猶だ見にませぬからビスマーク公爵が一人勝誇って居られます」筆齋は聞流して直に歌牌室に入らんとす長々は最と怪しく思ひ「ビスマーク公爵とは離の事だ（筆）ナニ此近邊の青物問屋の主人サ大きな勝負をするからビスマークと云ふ綽名を取って居るのだ（長）爾か乱暴な綽名を附るな（筆）亂暴よも何も其樣な事は少しも構はぬ今の大糟と云ふ番人にでも男爵ロスチャイルドと云ふ綽名を得て居る程だもの（長）ロスチャイルドとは世界一の銀行家じやないか何故其樣な綽名を番人に附て置く（筆）ナニ彼は少しばかりの給金を溜め夫を博奕に負た人へ時貸にして翌朝二割三割の利を

附て取立る夫で今は最う可なりの資本を持て居るからと話しながら歌牌室に入れり茲には凡そ十四五人の連中隨圓形の卓子を圍み盛んにパカヲットと云ふ勝負を爭へり猶ほ其外に立し盡見物するもあり負盡して失望しながら立歸る者勝て意氣揚々と一同を睥睨する者喜にや樣々の顏附にてなるほど畵工の身に取ては此上もなき手本あり其中に大手を廣げ熊鷹眼にて歌牌を右左に配る者是が則ち堂紙にして青物問屋の主人プリンスビスマークなるべし一同は唯勝負にのみ氣を取れ二人が入來りしよゝ氣も留めねど唯一人隅の方に腰掛て勝負にゝ氣も留ず出入の人をのみ見張れる一紳士あり此紳士筆齋の顏を見て輕く默禮するに長々ゝ小聲にて彼れゝ誰だ」と問ふに（筆）彼れが則ち茶谷の商賣敵と云ふポン引の猿田何某サ」と答へ更よ又四邊を見廻し（筆）茶谷が來ても直よゝ目よ留らぬ樣に入口へ背を向けて彼處へ腰を掛るとしやう摸樣に由れば僕が金を出して差

闘するから君も折々勝負を仕給へ左もなくば怪まれるから（長）好し心得た」と云ひつゝ二人い一同の中へ割込みて腰を卸すに此時ビスマークい最早や飽きたりと云ふ風にて一同の顔を見廻し「何うも諸君が少し宛しか掛ぬから吾輩は勝ても張合がない宵から汗を垂らして諸君の財布を浚ッたけれど未だ千法に足らぬが」と云ふ個は新に來りし長々を好き客と見て私かよ戦ひを挑むあるや（甲）爾サ毎晩君に一万法の商法をさせて遣たいけれど生憎君の腕が鈍いから（乙）今に茶谷が來るから其時に熱を吹け彼奴は新嫁の婚資を殘らずでも賭るだらう（丙）爾サ詰り唯貰ふ婚資だから」と様々よ嘲弄すビスマークは猶ほ不慢の色よて「茶谷が來れば兎と角も左もなければ最う歸らう夫とも諸君で大きく張るか」と挑む聲の猶ほ終らぬうち何者なるか長々の背後より千法の銀行券を十枚揃へ「サア取れるなら一思ひに取ッて呉れ一万法賭て遣るから」と傲然と投げ出す人とそあれ顔は

長々の眼よ見えねど聲は確かに茶谷の聲あり

第二十九回

一万法の大金を事もなゝに卓子の上に投出したるい何者ぞ聲い確に茶谷立夫と聞もれど長々は猶ほ疑ひて窃に玆を抜出ッ横手に回りて眺むるに全く彼れ立夫あり一万法とは我生涯に見し事もなき大金あり开を惜氣もなく投出して一勝負よ賭るとは何等の大膽なる振舞ぞと長々は只呆れに呆るゝのみ今まで大言を吐き居たるビスマーク公爵も流石是には驚きし様子なるも今更手を引く事も叶はねばにや最と苦き顔よて「フム一万法ばかりの目腐金に此公爵が驚くと思ふのか」と嘲りぬ立夫は飽く迄も落着て「自分が既に公爵になつた氣で居るのだ後の苦みを厭はぬ遠慮なく取るが好い（ビス）飢は勿論釣餌まで

食取られて後悔するあ」と此方も立派に言放でど胸は只ならず騒ぐと見え息づかひまで荒く聞も軈てビスマークは札を切り右と左と己の方とに播き終り「ソレ勝負だ」と云ひながら先づ己れの札を開くに札は八點を示したり抑もバカラットの勝負は九點を以て勝となし其上ゑ出るは皆負あり九點より下い何でも九點に近き者が勝つ定めゆゑ八點ならば大概は先づ勝と見るべし去れば人々は皆茶谷が負あらんと思ひ口の中にて「向所まで悪運の強い青物屋だ」と罵れど茶谷立夫は微慍ともせず「コレ青物屋己の所から手が届かぬから已の札を開て呉れ」と云ふビスマークい言葉に應じて自ら茶谷の札を明け「ヤヤヤ九點だか」と思はず失望の聲を發し碎くるばかりに卓子を打叩く實に茶谷の札は九點なりビスマークい顔色を變あがらも拂はぬ譯に行かざれば我前に積上たる金銀貨紙幣手形を取混て茶谷が手形の所に推遣りたり今までビスマークに負け居たる一同い心地好げに「コ

レ青物屋其樣に卓子を叩くと自分の手を怪我するぞ負るが否なら逃て歸れ」と云ふ彼も今いヤッキとあり「負るが否でいないが一万法と云ふ大金い手前などの樣ゐ怪痴坊から取立るには一年掛るソレを一度に負られるゐら負て見ろ」茶谷い此問答を夏蠅しと思ふ如く「コレ青物屋此後を遣るか遣らぬか（ビス）遣るともサア幾等でも來い」茶谷は已れの一万法が今は二万法になりたれども其金には手も附けず最冷たき眼にてビスマークの前に在る殘金を見積て「フム未だ二万五百法位は有る樣だな好し一勝負で方を附けやう」と云ひ更に千法の手形を五枚取出して已が二万法の上に投出したり此有樣を見る長々は殆ど夢かと思ふばかりにて「惜いなア彼の樣な大金を本統に茶谷立夫は巴里第一等の金滿家としか思はれぬ已が若し一万法勝てゞ夫を以て直に鶴子を女房にし世帶を固めて生涯博奕には手を出さぬがと呟くのみ二万五千法宛の大勝負なれゞ人々も氣い氣に非ず宛も

我が錢を賭けたる如く手に汗を握りて待つビスマークハ無言にて再び歌牌を播きて開くに今度も亦茶谷の勝となれりビスマークハ最悔しげに我前の金を茶谷が方に推遣りつゝ「最うイヤ〳〵手前あどの鴨にあつて堪る者か」勝負に茶谷の痩腹を三万五千法肥して遣た」と云ひ額の汗を拭きながら立上る茶谷ハ喜ぶ色もなく「堂が潰たら己が其代にあらう」と云つゝ自ら其跡の坐に直り新しき札を取て切初しが是より一同は豊ある堂親の出來しを喜び盛に勝負を初るも堂親の勝とありビスマーク公爵も更に又千法の手形を幾枚か取られたり此時までも長々は唯だ茶谷立夫の顔をのみ眺むるに茶谷は猶ほ長々の茲に居るを知らず益々勝て益々落着き側中を負さねば手を引ずと決心したるに似たり長々の傍に在りし彼の筆齊は小聲にて「己も少しづゝ賭て見やうと思ふけれど茶谷へ此通り運が向て居る間は彼れよ只進上する樣な者だ運の神は初めての人を最負すると云ふか

ら己の代りに君が遣れば必ず運が引繰返る（長）でも己は大十法しか金がない（筆）其中十法を出し給へ僕も十法を出し合せて二十法即ち一ル井の金が一番低ひ賭金だから設けも損も山分さ（長）は後日の爲め茲で茶谷に我顔を見せ置きて三峯老人に向ひ確かに茶谷を博奕場にて見受けたり其證據には我亦た彼と勝負せし一人ありと言はん決心あれば早速十法の金を出しでゝ直に賭て見やうか（筆）イヤ待たまへ運と云ふ奴は一寸と躓くと引繰返るから此勝負が躓く迄待て居れば（長）躓づくとは何うするのだ（筆）イヤ其時には僕が知らせる」と二人が細語く間にも茶谷は愈々勝續け彼のビスマークさへも全く財布を空にせしと見へ墓の如くに膨れ返り男爵ロスチャイルドと綽名さるゝ番人大糟を呼立て「コレ大糟己ゝ五千法だけ貸て呉れ大糟は好き借手を得て打喜び「タツタ五千法で足ますか直に持て參ります」と云ひ一散に我室へと走歸る兼て茶谷と軋轢あるポン引の猿

田は餘所ながら茶谷の勝つを忌々しく思ふと見え聞えよがしの大聲にて「本統に茶谷ゝ能く當るぜ是でゝ先祖の金言を更めるが好い」と云ふ長々ゝ金言と聞き忽ち彼指環の事を思ひ出し猶ほ聞耳を立ながらも茶谷の環に目を注ぐに歌牌を切る彼れの手先にテラ〳〵と爛くゝ確に新しき指環にして即ち我が拾ひたる本物に似せ仮よ作らせたる者にゝあらぬかと疑はる去るにても彼れが先祖の金言ゝ如何なる語にや此指環に彫附ある(車を用ひず馬を用ひず唯我腕を用ふ)云々の語にゝあらぬか何とかして猿田に其語を吐せたしと思ふうち茶谷ゝ猿田の言葉を聞咎め「先祖の金言が何であらうと傍から口を聞てゝ了ぬ」と制す猿田ゝ猶ほ聞かず「本統だぜ茶谷ゝ今に歌牌の勝金で銀行でも建るが好い車を用ひず馬を用ひず唯我が歌牌を用ふと云ふ文字を看板に彫附てサ」扨ゝ念々此指環が思ひし通り彼れ茶谷の品ありしと長々が腕の中にて喜ぶに引替て茶谷ゝ痛く立腹し其顔色

を變れども詮方あし猿田を掴殺す場所にあらぬゝ「無言れ」と一言云ひ捨て又歌牌を取る筆齋ゝ茲ぞと見て「サア長々君是が賭きと云ふものだ賭たり〳〵」と長々の身体を着く長々ゝ計らずも茶谷家の金言を聞得たる嬉しさに前の方へ飛出て僅に一ルイの數取を茶谷が前に突出せり茶谷ゝ是に至りて初めて長々生の居るを覺り且驚き且惑ふ其顔色ゝ筆齋の畫にも寫し得し

第三十回

長々生が大膽に茶谷立夫の目の前に差附る僅か一ル井の數取ゝ實に人〻の意外に出たり「何だ大の男が先程から相談して居るから一身代賭るかと思へバクッさ二十法」かと口の中にて喇るもあり又信切にお前此赤い數取ゝ一ル井の記しだぜ勝ても一ル井の金貨が一枚しか手よ入らぬよ十ル

井なら其黄色い數取であければ了ぬと間違と見て敎るもあり筆齋ハ少し赤面し「ナニ初ての男だから少し味を覺えるまで澤山賭させてハ好くあいからサ」と言譯す「なるほど一度に懲させてハ後が取れぬ初心にハ一ル井が丁度好らう」と自ら上手がりて呑込むハ其實已れが懲ずまに負を取る此廉の獸なるべし一般の人々ハ「初心と聞きて初心が手を出せば運の神が狂ひ出す」と云へる此の社會の諺を信仰する者あれば是より必ず堂親の負にあらんと思ひ今までより餘計に賭く獨り長々ハ人人の騷ぐを總て知らず一心不乱の茶谷立夫の顏を見るに立夫ハ忽ち顏色を失ひ殆ど歌牌を持つ勇氣だもあからんとす左れど彼れ事に慣れたる痴れ者あれば心の中を覺られじと「サア皆賭たか〳〵」と云ふ負け腹のビスマークハ殘酷にも「茶谷の目ハ何處よ在る此通り賭てあるのが分らぬか」と云ひ猶ほ茶谷の猶豫するを見て「何だ此堂親ハ已の劍幕に恐れたのか「茶手前の面ハ小兒でも馬鹿にす

るヲ人に恐れられる樣な威のある顏だと自惚ると當が違ふぞ」と茶谷ハ遣返して何氣なく歌牌を切初めたれど長々の鋭き眼にハ其手の細よ震へるを隱すべからず斯て茶谷が播終りて開き見れば今まで一たびも負し事なき堂親が十點にて外れを現し側中の勝となり一ル井の長々まで賭金を倍よしたり長々は其金を本の所に置し儘取らず筆齋も別に差圖せずして二度目の勝負を待つに二度目も又堂親の負となる長々は賭金の早や四ル井にまで上りたるよは氣も附かず唯だ茶谷立夫が益々不安心の色を現す樣を見て一方ならず滿足し「フム彼奴何とあく腰が落着かぬと見ゐる金を負るのは厭はぬが已に此有樣を三峯老人へ云はれるかと思ひ夫が心配でならぬのだ」と呟き未だ終らぬうち三度目も茶谷立夫が負となる一同は長々が手を出せしより斯く運勢の一變したるを知れば長々を視ると宛も救世主を視るが如く成るべく長々の賭金の傍へ寄せて已れの賭金を置んとす

るなど其有様笑ふに堪たり既にして茶谷は四度目の勝負まで已れの負にありたれば茲等が見切時と思ひし如く札を置きて立上り「斯う外れが來れば遣るだけ益々深負する已は少し息を抜くから誰でも堂親に代ッて呉れ」と靜に其席を離れんとすビスマークは毒々しく「何だ是から吾々が敵打の時にならうとすれば最う逃るのか三遍か四遍の負に遁易し少しでも勝の減らぬうちに歸らうとする爾まで金が欲いのか」と云ふ外の人々も今此の外れ親を逃してはならじと思ふ如く逃る樣な卑怯者なら引留ても仕方がない歸して遣れ歸して遣れ」長々の賭金の傍へ接附て賭居たる一人はナニ此男爵の運勢が強いから恐れたのだ」と早や長々よ男爵の位を附たれど誰とて是を咎めぬのみかはビスマーク公爵までも「爾だ〳〵」男爵よ恐れたのだ斯く口々に罵られ如何で其儘歸らるべき「ヘン怪痴な奴等だ夫ほど已の金が欲けりや取して遣ふ賭て來い」と立夫れ再ひ腰を卸し前の如く歌脾

を切初しが實にや長々男爵の勢ひい非常にて是より開く度毎よ堂親の負とならぬいなし立夫れ茲に至て全く博徒の眞相を現はし日を尖らせて眼を光らせ油斷なく人々の賭者を默算する樣龜子の傍に來りて優き言葉を吐く日頃の茶谷とい全く別人かと疑はる長々い此樣子を見て「龜子にでも三峯老人にでも今の茶谷の顏を見せれい二度と家へい寄附けまい好〳〵是だけ見れい最う充分の証據と云ふもの明日い此事を老人に言て遣ふ」と腹の中にて思案を定む筆齋い又僅か一類の資本金が既に山盛に積上りしを見且い茶谷の前に在る彼が金子の大に少くありたるに見較べて最早や半金を引去りて手許に納め縱し負るとも納めし金だけい浮く樣にし「ウワよて勝負すべき時と曉り「サア最れ半金だけい取りたまへ」と長々男爵の耳に細く語くビスマーク公爵も既に堂親の手許潤きを見て「サア此一勝負が一か八だと由の如く盛上ぐる是に負れい堂親い分散せん斯る時ところ得て運

勢の立直る事ある者あれバ筆齋は再び長々男爵の肩を突くに俄男爵は心得て賭金の半額を引かんとす此時宛も茶谷が早や札を一枚配りたる時あれバ彼れ目敏く見咎めて「了ない親が播初めてから賭金に手を附るのゝ」と制す筆齋ゝ長々が手を出だすの少し遲かりしを悔めども今更ら詮方あし俄男爵も「儘よ此一勝負に丸々負た所が元を云へバ一ル井の損失だ」と高を括ッて乘るか反るかの判るを待つよ茶谷も此一舉を天下分目と殆ど血眼になりて札を開けりァ、是れ彼れが運の盡あり彼れが札ゝ又外れたり彼れが顔色ゝ益々青きを加へたれど彼れ別に騷ぎゝせず己れの前に積みたる金にて一同に拂ひをおし猶ほ足らざる分ゝ懷中より取出し其身も一文あしとなりたる代りに一文も借も殘さず「是で皆々滿足だらう」と震へる聲に最苦き笑を洩し其儘茲を立去りたり失望の極度とゝ斯る事をや云ふならん筆齋ゝ長々を促がして「サァ金を納め給へ二人の割前が一万法以上に

上ッた」長々ゝ一万法の聲に驚き「ナニ其樣な事はない（筆）イヤ僕ゝ初めから數へて居た一ル井の元金が十遍倍增になッたから一人前が一万零二百四十法だサァ君ゝ是で金持になつた」と云ひつゝ取込せて立上る傍なる人々ゝ嘲笑ひ「エ彼の野郎金の勘定さへ知あいぜ」と云ふ先刻の俄男爵今ゝ早や野郎あり是れが博奕場の人情なるか

第三十一回

今日ゝ是れ日曜日長々が待に待たる美術館行の日よゝある此前の日曜日ゝ春野耕次郎の身に差支ゆる事ありし爲め一週間延し置きたるなり今日こそゝ黑き上着を被て鶴子と共に晴の場所に行くかと思へバ長々ゝ殆ど嬉しさに氣も狂ふばかりなり殊に彼れ水曜日の夜に歌牌に勝ち思はぬ大金を得てよりゝ豚屋の看版を彫むにも及ばず晴着の質受ゝ彼れが身代の

千分の一二にて足れり一万法の金子い大資本ど云ふ程あらぬも質素なる世帯を持つにい充分あり可ありの店を持ちあがらも一万法の資本あくして而も安樂ま世を送る人甚はだ多し彼も鶴子をだに承知させ我が妻と定めあゞ此金ま て生涯の幸福を買ひ得べしと思へゞあぶく銭も粗末にせず財悖て入しかど中々悖ッて出さぬが彼れの辛抱強き所なるべし彼れ實に一万法の金に酔ひ家に歸りてより置くべき所も知ず卓子の抽斗にい錠がおし寐臺の下い何人に見附らるゝも知ず唯の手形や紙幣にてい有難味が湧けれゞ光る金貨に増す者なしど翌日い早朝に兩替屋へ行き出來たての金貨と取替來り或い兩手ま掬ひ上げて一個〳〵指の間を洩れ落ちる音を聞き「卵貨でい何うも斯い音が澄へぬ」と賞鑑し或い悉とく衣嚢に納め「斯う傍腹が膨れてい直ま掏兒などま狙はれる」と心配するあど空しく思案するのみなれど公債證書に買替るあどの安心法い夢にも知ず金が出來れゞ銀

行へ預るどの事い幾度とあく聞きて知れど扱て大金が出來て見れゞ如何なる銀行も安心ならず幾等銀行でも一万法い欲からう欲がる者に預けてい若し出來心を起されてい」と簡單なる論法より何でも肌身を離さぬほど世に確ま事いなしと悟りて終に革製の胴巻を注文し已が腰に巻付けたり金貨とは云へ一万法は凡そ七磅の目方あり此暑いのに堪苦勞ぶれど「金氣は冷る」と偏り合點し「金のあい人は何を腰へ巻て此夏を凌ぐだらう」と殆と怪しまるゝ計りに喜こびける此喜びの間にも彼れは猶ほ大事の目的を忘れずして茶谷立夫が不身持の數々を師匠三峯老人に言立んと時を見て其小口を開きたるにアナ意外老人は嚇と怒り「婚禮の前ま あれば世間の人が羨やんで様々の悪口や讒訴を云ふのは當前だ夫を貴様が誠に思ひ已に取次ぐ馬鹿があるか」と唯一口に叱り附け「イヤ取次ぐのではありません私しが確に見届たのです」と言開りば皆まで聞かず「貴様までが讒訴者に加擔す

るのか」と益々怒るのみなれば證據の指環を持出す事も出來ず「爾云はずに仕舞まで聞て下さい」と言掛れば「イヤ聞かぬ聞かぬ娘の幸ひを妨げる者は弟子でない師匠でないぞ」と寄附けぬ劍幕なれば長々は殆ど失望せしも自ら又思ひ切り「エ、斯まで云て聞れぬ者は仕方があい此方が信切で云ふ者を先が返ッて仇に聞けば此方は言ぬだけの事」と自狂よなりて斷念めしゝ是非もあき次第あり是れのみならず長々が身に猶ほ辛きは此の時より親子とも長々を疑ふが如く彼れの前にては內輪の話しさへ謹しむ樣にし中にも龜子は痛く長々を嫌ふ如くあるべく彼れには顏さへも見せじとする に似たり今まで家內同樣よ待遇されし長々も今ゝ一つの邪魔ものあり長々ゝ憤然とし暇を取りて去らんかと思ふことも度々あれど猶ほ思ふ仔細もあれば出を殺して踏み留まれり彼れが如きゝ見掛けに寄らぬ忠實の男と云ふべきか彼れの不愉快に引替て茶谷立夫ゝ日々親子を尋ね來る其

樣今までに異ならず歌牌室にて長々に逢し事ゝ夢にも覺えなしと云ふ顏にて長々に逢ども赤面せず去ればとて別に長々を避もせず親みもせず「アレゝ我妻の父の弟子なり」と冷淡に見て冷淡に待遇ふ丈なれば長々ゝ唯彼れが横着にして且巧あるに驚くのみ殊に彼れ先夜の負を物の數とも思はぬか相變らず立派なる馬車に乘り贅澤にも馭者二人馬丁二人を連たるなど一廉の貴公子あらでゝ其樣を學び得じ猶ほ聞く所に由れば彼の公證人と龜子の公證人ゝ既に立會の上兩家の身代に少しも傷のなき事を認め其旨を雙方に通じたりとの事あれば長々ゝ益々合點行かず扨ゝ彼の筆齋が茶谷立夫ゝ其家を荒せしのみかボン引にまであり下りし男ありと云ひたるも全く何か仔細ありて茶谷を憎める猿田の惡口を眞よ受し者にして茶谷の身代ゝ猶ほ無傷の儘なるか縱や他人を欺くとも公證人を欺く事ゝ到底出來難き筈なれば是ればかりゝ爭ひ難しと果ゝ我身にも分らずなりぬ

斯て漸く日曜日に達したれバ他人の事に氣を揉むより我が幸福を圖ること
そ能けれとて朝早くより身仕度して兼て打合せたる午後の一時を待兼て
ラベー街なる鶴子と耕次郎が下宿を尋ね行けり頃て其前に達せし頃若し
や鶴子が我を待兼ね四階の窓より首を出し空しく外を眺めはせぬかと先
づ窓の方を見上るに硝子戸は風入の爲めに開きあれど愛らしき顔は見え
ず其代り彼れが目に留る一物は鶴子が窓の最一つ上なる五階の窓際より肱
を突き空く遠近の景を眺むる一人あり此人を誰とするか下より見上たる
所にては唯其髭ある顎の裏を見るのみにして索より誰とも分らぬが虫が
知すと云ふ者か長々は見覺えある心地するにぞ更に通りの向ふ側まで引
退き茲より斜に見上るに果して是れ虫の知せし通りにして別人あらぬ天
狗ッ鼻の竹二郎なり其鼻は生茂りたる髭の外に一寸ほど突出て見ゆア
、彼れ春野鶴子と同じ宿屋に下宿せしか好し〳〵既よ住居さへ認め證け

ば必ずしも今日よ及ばず他日夫々の用意を調へ改めて尋ね來り直々彼に
逢ひ問詰るも容易なり彼れが爲に大事の美術館行を延すに及ばずと思案
を決して此家よ入行きさるが是れぞ意外なる活劇を演じ來る初あり

第三十二回

天狗ッ鼻の竹二郎が春野兄妹と同じ家に下宿せりとハ思ひも寄らぬ事な
れど今日ハ汚らはしき彼れ輩を相手にすべき日にあらねバ長々ハ其儘四
階に上り行き春野が室の戸を叩くに中より開きて愛らしき顔を出すハ別
人あらぬ鶴子なり他ハ氣の毒げに長々の顔を眺めて「オヤ兄さんから貴方
へ端書を出しましたが未だ其を見ませんか」と問はれて長々ハ又美術館行
の日が延しかと早や痛く失望して「でハ兄さんが猶だ御病氣ですか（鶴）病
氣ハ疾に直りましたが今日ハ銀行に調物が出來たとて今朝急に呼に來

して！（長）オヤ〳〵（鶴）夫で美術館行ゝ最一つ次の日曜まで延るからとて貴方へ斷り手紙を出しましたのにですが折角入しッたから先ア お這入り成い（長）兄さんの留守へ這入込でゝ好く有ますまい」と口にゝ言へど心にゝ這入り度きゝ山山なれば鶴子が「ナニ構ひません他人ちやあし」と普通の世辭を述ぶるを機會に「でゝ暫し話して行きませう」と答へ實の山よ入る心地にてホク〳〵と嬉びながら直に鶴子の室に入れゞ茲には一脚の卓子あり造り花の道具など其上に並らぶにを「オヤ日曜日でもお稼ぎなさるの」（鶴）稼ぎますとも夫に今日ゝ折角貴方と美術館へ行く約束をしたのが外れ丟念でなりませんから花でも造れゞ氣が紛れるかと思ひ此通り細工に掛ッて居たのです先ア腰を却して私しが花を作るのを見てお出あさい巧みお者ですよ」と笑ひながら椅子に指さす（長）でゝ拜見しませうナニ花を作るのも美術ですから其れを拜見する方が美術館へ行くより本望です」と

答てやをら腰を御すよ鶴子ゝ早や剪刀竹箆等の道具を取り其細工を初めたるが如何にも巧なる者にして見るうちに一輪の薔薇花を作り終り「サア御覽なさい」と差出す長々ゝ手に取りて幾度も其出來を褒め殆ど放し得ぬ樣子なりしが終に思ひ切り之れを私しが戴いても好でせう（鶴）好う御座んすとも貴方に上る積で拵へたのですもの大事にして硝子の箱へでも入れ床の間へ飾ッてお置きなさい」と云ひ又打笑ふ長々ゝ眞面目にて「床の間はありませんからボタンの穴へ差し胸へ飾つて置きませう（鶴）本統の花あら格別ですが作り花を胸飾りよしてゝ氣違ひじみますよ（長）氣違染ても構ひません貴女が作つて呉れたのだから」と言ひつゝ早や胸の邊に挿まんとすれゞ鶴子ゝ之を見て噴笑し「貴方ゝ本統よ可笑い方だ私しが靴屋の女工でゝもあれゞ私しの拵へた靴を首へブラ下て歩きます」長々ゝ云返す言葉も知ず暫しモヂ〳〵したる末にて其顏を紅めつゝ「ブラ下ますとも

貴女を此通り愛して居ますもの」と一生懸命の一言に鶴子も同じく其顔を紅めしかど又忽ちに笑ひよ紛らし「アレ又其様な事を仰有るよ」長々い夢中なり今い何も彼も打忘れて迫込つ「言ますとも貴女が私しの妻よ成て遥ろと仰有るまでい幾度でも言ます」よ不束千万ある言葉の裏よ無量の熱心自から現るれば鶴子も彼れが情を憐む如くなれど猶ほ其笑ひを止めず「其様な事を云ふと本統に婚礼の言込の様に聞えますよ（長）聞える筈です言込ですもの其様に笑はずと了ると か了ぬかと早く返事して下さいあ之が了れば私しい熱心に彫刻を勉強し必ず世界に名を揚ます了ねば死で仕まいますよ（長）ハイ死で仕まいい仕ませんが張合が抜るから生涯立派な彫刻師にいあられません食ふや食はずの長田長次で終りますと眞實に絶望の色を現はすにを鶴子い初めて眞目面になり「若し外の人が兄の留守へ来て此様な事でも言ば私しい皆まで聞ぬうち退出しますが貴方だから斯して

聞て居るのです（長）夫い私しも有難いと思ます（鶴）イエ猶だ有難くも何ともありません兄に相談した上でなれば私しから何とも返事い出來ませんから（長）てい兄さんに相談して下さいますか此奴い有難い（鶴）貴方い本統よ氣の早い人ですよ来私しが兄に相談するとも何とも言ぬ先よ又有難いなどと（長）でも相談していい下さるのでせう（鶴）イヽエ夫も貴方の身の上や心の裏など充分に聞定めた上てあければ何とも返事が出來ません」と明かに言切れども其顔色に我が無禮を憤ほるの色あきを見て長々い次第に安心し其聲さへも日頃の口輕き調子に返り「でい何の様な事でもお問なさい充分に答へますから（鶴）問へと云て急よ問はれる者でもありませんが貴方い彫刻師として三峰老人の様な有名な人にある心がありますか（長）ありますとも今も云ふ通り貴方が妻になつて呉れさへすれば私しい大切の妻を決して名もあく家もない長々生の女房だと云はせていい

ませんか限り魂かぎり働いて出世し貴方を良家の奥方と云はれる樣に仕上げます（鶴）仕上げるとて私しい盤一本で何うでも仕揚の出來る貴方の刻彫物でいありませんよ（長）イヱ笑談い扨置て本統に仕上げます夫にチ貴女が承知さへして下されば私しは必死にあり必らずアノ茶谷立夫等の本性を見破ッて彼れの婚禮を取消させ龜子を貴女の兄さんと婚禮させる樣及ばずながら骨を折ますヘイ夫は期とですィヱ私しよは分ッて居ます　よ兄さんが其後三峯老人の家へも來ず兼て行くと云ッた美術館へも行かぬのは全たく龜子が茶谷に婚禮すると云ふを聞き失望して張合が抜けた爲です兄さんが失望した樣子を見ても男を失望させるが可哀想だと思ひませう貴女の返事一つに由り私しは兄さんより猶ほ失望して仕舞ひます」と今まで一言毎に口籠たる其不束に引替て滔々と辯じ來る兼て兄思の鶴子なれば此引言を聞き益々心動く如く「本統に爾あれば兄も仕合せですけれど」と吱きて歎息し又取直して「貴方いの譯もなく婚禮〳〵と云ますけれど婚禮して世帶を持つにいの容易ならぬ資本の要る事をば存ですか（長）イヤ其心配よは及びません私しは聊か乍ら一万法の金貨を持て居ますから」と云ふは鶴子を喜ばせん心なるべし鶴子は忽ち眉を顰め「一万法と云へば眞面目よ稼ぐ職人が三十年辛抱しても容易では溜らぬ程のお金ですが夫を貴方が何うして持て居ます（長）是は天が私しを憐んで與れさとでも云ふ者でせう水曜日の夜に歌牌で勝ました」鶴子は痛く毒虫にでも刺されし如く愕然と打驚き「オヤ貴方は博奕打ですか歌牌で勝たなどゝ云ふ汚はしい金を以て私しと婚禮する積ですか」と言葉激く罵られ長々は周章狼狽き「イヱ其樣な譯でいありません決して私しから進んで歌牌をしたと云ふのでいなく全く已を得ずしたのですとて彼の茶谷立夫の本性を見んが爲め盡工筆齋に勸められ已を得ず手を出したる次第を事細かに言開くに其言譯

の漸く終る所へ誰やらん入來る者こそあれ鶴子は入口の方に振向き「ソレ兄さんが歸つて來ましたよ」と云ふ

第三十三回

長々生ゝ博徒にあらねば鶴子に疑はるゝを迷惑し必死にありて彼の一万法を勝得たる次第を辨解するも無理あらず辨解も漸く終りし頃鶴子が兄なる春野耕次郎ゝ歸り來りて一足室の中に入込しが思ひ設けぬ長々の茲に在るを見眉を顰めて踏留れり其樣子何どやら落着ず胸に心配を包むに似たるゝ打續く此頃の不愉快よ氣も結ぼれて解けぬあらん長々ゝ何と挨拶して好ちうかと思案も未だ定まらず耕次郎ゝ突と寄りて「オヤ今朝出し端皆が屆かぬんだと見えます子」と言來るを鶴子が受嗣ぎ「其事ゝ私しが言ましたよ今日銀行に用が出來美術館へ行く事が出來あくあつたと（耕）夫

よ今日ゝ樣々の調物があるのを家で調べる積で持て歸りましたから夕刻まで少しも暇がありません」と云ふゝ長々よ永居さるゝを恐れての豫防ならん長々ゝ口の中にて「夫でゝ此次の日曜日に又お供をするとしませう」と呟けども立ちゝ上らず鶴子ゝ兄の顏を見て「兄さん外に話もありますから先ア腰をお卸しなさい何時まで立て居るのです」と云ひ耕次郎が力あく腰掛るを待ち更に「アノ子兄さん長々さんゝ先程來て色々の事を話して居たのですよ夫で今また私しを愛するからとて婚禮の事を言込ました」耕次郎ゝ又眉を顰めつゝも「何を笑談云ふのだ」とて聞流さんとす長々ゝ又追込み「中々笑談でゝありません全体貴方へ先よ言込むが順ですけれど貴方がお留守ですから直々鶴子さんまで打明ましたが」（耕）イヤ鶴子へ云ふる私し云ふも夫ゝ同じ事ですが私しに合點の行かぬとゝ何うして貴方が鶴子を妻にしたいなどと思ひ込だのですか未だ充分よ鶴子の氣質も御存じ

ない中に（長）勿論長い御懇意でいありませんが丁度貴方が三峰老人の娘龜子をお見初めの頃から見染ました」と妙よ耕次郎の慾所を突きたり成るほど耕次郎が龜子を逢しい殆ど長々が鶴子よ逢しと同じ頃の事あれば我を鶴子の氣質も知ぬうちに愛すると咎めなが彼れも龜子の氣質を知らぬうちに愛する者其廉い先づ五分〳〵ありと長々い腹の中にて思へるあらん耕次郎い直ちに鶴子よ向ひ「和女い何と返事をした（鶴）兄さんに相談した上でおければ返事い出來ぬと云ましたですが子兄さん長々さんと私しとい貴方が思ふ程の他人でいありませんよ三峯老人の細工場でい毎日朝から晩まで一緒に居て話をした事もありますし夫よ又先日質屋でも逢ひました（耕）大層自分の田へ水を引くナ夫にしても婚禮の予込と云ふい容易の事でない（長）イヤ夫い私しも知て居ますが實い色々譯もあります打明けて云ふい失敬かも知れませんが全く斯なんです兼て私しい貴方が三

峰老人の娘龜子を思ひ込で居ると知り似合た縁と思つて居るうち龜子が彼の茶谷の妻にあると聞ましたから師匠の爲め龜子の爲め捨置れぬ事と思ひ何うかして貴方を龜子の婿にしたい者と早速決心を固めたのです茶谷い彼ア見えても惡人ですから私しい彼れを扞く工夫を考へて居るうち」鶴子さんの思曰を聞くと矢張り龜子の爲を思ひ茶谷を不安心な男とお認めあさも樣ですから私しも終に大膽か知ませんが貴方と縁續の兄弟になれば益々師匠や龜子の爲も計れると考へまして夫で此樣な事を言出したのです」と此方は一生懸命あれど耕次郎は有難しとも思はぬか想ッ氣もなき返事にて「フムでは龜子を私しへ世話する代りに鶴子を自分へ呉れと云ふ詰り交易の樣な御相談ですナ」と遣込るを鶴子は傍に聞兼て「交易なんて其樣な事ではありますまひ茶谷が惡人と分れば龜子を救ふのが友達の情と云ふ者ですから茶谷は一同の敵でせう其敵を防ぐ爲に私しと貴方と

長々さんと三人の力を合せるが好じやありません（耕）餘り言廻しが違いから私には何の事か更に分らぬ（鶴）分らぬ事はありません斯ですよ今の所では三人が一緒になつて龜子を救ひ婚禮の相談は其上で又緩々しやうでは有ませんか」と熱心に説くを見れば鶴子の心も長々を憎からず思ふと見ゆ長々は腹の中にて手を合さぬばかりなり（耕）三人が何と力を合せたとて次の週間と極て居る龜子と茶谷の婚禮が今更破られるものではなし（長）イヤ破れぬ事はありません隨分六かしい仕事でも三人が力を合せて茶谷立夫が悪人と云ふ事を老人と龜子よ知せて遣れば（耕）夫を知せるには確かな證據を手に入れねば（長）サア其證據は私しの手で大方は集まりました」と是より長々は我骨折たる事の筋道をば彼の茶谷立夫が初めて松子夫人に逢し時初對面と見せ掛ながら何とあく樣子有げな目配をあせし事松子夫人はまあ坊と云ふ賤しき女に生寫しなる事等を初め松子夫人が

質店よて指環を落せし事より其指環が茶谷立夫の品に相違あき事までを述終り「サア是までは分りましたから此上は唯だ松子とまあ坊と同人で茶谷が其情夫だと云ふ証據さへ手に入れば好のです（耕）所が其証據が擧りますまひ（長）イエ夫も大方擧り掛て居るのです」とて是より又公園地にてまあ坊が松子夫人の遺失したる指環を欲がり其手下をして我を暗打にしても奪はしめんとせし次第を説盡し猶ほ一層力を込めて「殊よ其私を暗打に逢さうとした奴等の重なる一人は直に此室の頭の上に住で居るのです是が何よりの手掛です」耕次郎は驚きて「誰が其樣な事を言ました（長）私しが今し方此家へ這入る時五階の窓より首を出して煙草を燻らせながら景色を眺めて居る所を見認ました私しは美術館へ行く積であつたから此次に來て捕へやうと思ひましたが美術館へ行くのを止めれば今直に捕へて問糺しても分ります」と話は益々危急の所まで推寄せたり

第三十四回

現在曲者の一人が此室の上に居ると聞き鶴子と耕次郎ゝ半信半偽（耕）何の様な人相です（長）鼻竹と綽名さるゝ位で鼻が滅法高く顎の邊り一面に磯くろしい髭が生へて居ます（耕）夫ゝ何かの間違でせう此五階に其様な人ゝありませんよチエ鶴子（鶴）イエ何うだか分りません隨分出入の澤山ある家ですから夫れに何だか其様な人相の人を見受けた様よ思ひます（長）イヤ見受けても見受けんでも居る事ゝ確です私しが見屆けてありますから（耕）彼れ是れ云ふより降て行て帳場で聞くが一番早い其者の名ゝ何と云ひます（長）名ゝ竹次郎と云ひますが名字ゝ未分りません併し帳場で聞くが者ゝあい私しが直に五階へ上り捕へて仕舞ます」と長々生ゝ頻りに勇み立てり（耕）捕へさとて仕方がないでゝありませんか先が直接に吾々へ損害を加へたと云ふでゝないから警察へ引立てると云ふ事も出來ず

（長）勿論警察へゝ連あくとも問詰ます何でも彼れがまあ坊の一の手下と云ふ事ゝ明白ですからまあ坊が何處に何をして居るかと云ふ事を問詰れゞ松子夫人と同人か別人かと云ふ事も分りませう又同人とすれゞ事よ由ると茶谷立夫がまあ坊の情夫と云ふ事も知て居るかも知れませんゾレニ茶谷と龜子の婚禮を廢させるゝ六しい様で實ゝ容易でせう最う吾々の手の裏に種々の證據が揃ッたも同じ事です（耕）でも其様な事を問ふ所が彼れゝ何も貴方に訊問される謂れがないから無論返事ゝ仕ますまひ（長）ナアニ彼れゝ當り前の良民と違ひ心に悪事が澤山あつて警察を恐れるに極ッて居ますから有体に返事せねゞ警察へ訴へると威しますと威しが聞かねゞ金を遣ッて鉤込ます」と云ひつゝ腰の上なる胴巻の金貨を探れり耕次郎ゝ茲に至りて漸やくに長々の熱心なるに感じ了るか了ぬか遣附て見るが好い（長）爾ですとも」と長々ゝ身を引メて立上るに鶴子ゝ最と氣遣はし

げに「曲者の室へ入込むのゝ危いからお廢あさいよ其樣な悪人なら短銃位ゝ持て居るに極ッて居ますから何の樣あ目よ逢ふかも知れません（長）ナニ私しが行けゞ大文夫です」耕次郎も立上り「短銃を持て居ても二人と一人だとて供々に行かんとす（鶴）二人でも安心が出來ませんよ」と頻に鶴子が氣遣ふも無理ならず一人ゝ未來の所夫にして一人ゝ現在の兄あれゞ孰れを傷つくるも心配なり斯る時しも室の外なる階段に當り荒々しき足音の聞ゆるにぞ鶴子ゝ直ちに聞耳立て「オヤ誰だか五階へ上ッて行きますよ」成るほど五階に上る音あり殊に耕次郎が歸りし節次の室の入口の戸を開しまゝ置きたれゞ其音歴々と能く聞も（長）一人でゝあい二人か三人の足音だ（耕）若し巡査が其曲者を捕縛に來たのでゝあるまいか（長）爾かも知れませんが併しお待あさいよ彼奴まあ坊と一緒よ踊り其後で私しを殺さうとしたけれど夫等ゝ警察で知ぬ事だが何の罪で捕縛〳〵に來のだらう（鶴）

茲で推量するよりも巡査か巡査でないか外へ出て見るが近道でせう」長々ゝ如何よも爾だと云ひあがら直に戸の外に走せ出づれゞ耕次郎も續きて出づ此時宛かも五階より降來るゝ彼の栗川巡査あるにぞ長々ゝ喜びて「オ、栗川君好い所で逢ッたよ少し話しがあるから此室へ這入たまへ（栗）イヤ爾うゝ了けぬ今日ゝ公用を帶び罪人を捕縛よ來て是れから五階で捕縛するに依り僕ゝ下へ行き曲物の逃ぬ樣出口の番を言附り降て行く所だから（長）イヤ夫ゝ知て居るがタッタ二言か三言話せゞ好い先ア這入たまへ栗川ゝ辭み兼ね「五分間から上手間が取れぬゞ」と云ひながら鶴子が居間の次の室に這入しも猶ほ氣にあるか頻よ五階の方を見上げあがら「聞給へ探偵が行て御用〳〵だと叫ぶけれど曲者は何とも返事をせぬからッレ探偵が騒に戸の鈴を引鳴して居るのが聞えるワ（長）あるほど引切るかと思へほど鳴して居るだが君の捕縛に來たのゝ鼻竹だらう（栗）ナニ僕が捕縛よ

來さのでゝない僕ゝ唯だ見張番として連られて來た丈だ捕縛ゝ外の者が引受て居るのだ（長）でも捕縛されるのゝ鼻竹だらう（栗）夫も僕の引受けた罪人でないから確ゝ知らぬが何でも村越お鞠を殺した事に關係のある曲者だソレ君の師匠に寐蠏の片端を舁せて置て旨く逃去た曲者がありたらうアノ曲者サ（長）分ッた〳〵彼れが即ち鼻竹だ僕ゝ馬尾藏の酒店へ夜の一時過に鼻竹が息せき切て走つて來サモ〳〵喉の乾いた樣に酒を呑だと聞き其上又師匠三峰老人から當夜の曲者ゝ職人風で長い髯があッたと聞き飛きり彼奴だやうと思ッたけれど外に少しの手掛もないから默つて居た何しろ夫ゝ結構だが先づ彼が寐蠏の一方を舁いだ男とすれば和坊が凡の罪人と云ふ事も大抵ゝ分ッて來るチ」と云ひつゝ耕次郎に目配したり（栗）左樣サ彼れを捕へて調べれば實ゝまあ坊よ賴まれたとか何とか云ふ樣な白狀をするかも知れぬ白狀すれば直にまあ坊を捕縛するのサ」と

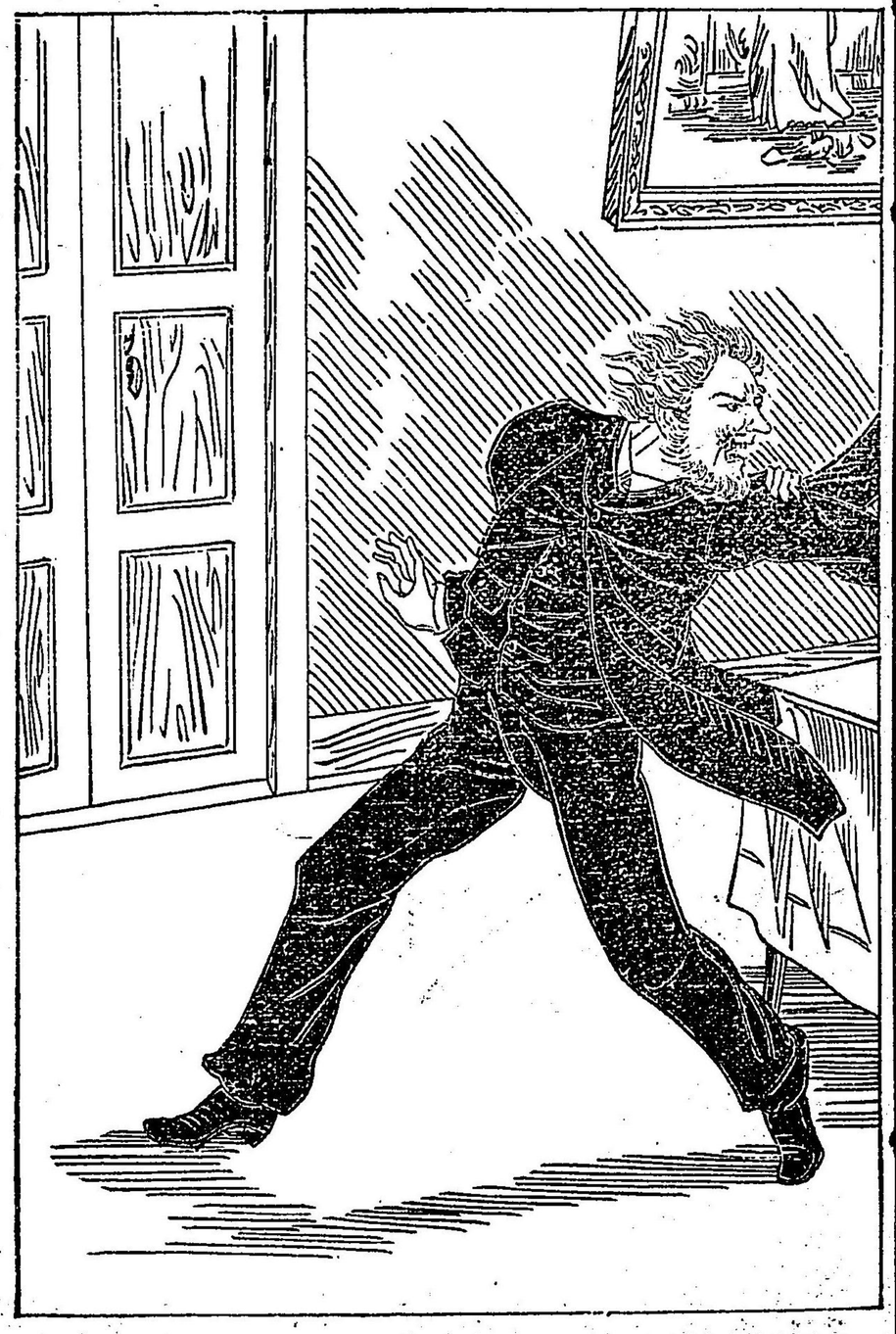
云ふうちに五階の鈴が鳴止んだよ」探偵ゝ到底曲者が戸を開かぬと見て鍵鎖治を呼ぶ事としたに違ひない爾すれば今に降て來るから僕ゝ出口は居ぬば叱られるドレ失敬」と言捨て栗川ゝ忙はしく玆へ立出で階段を飛下れり後に長々ゝ耕次郎と玆へ出來る鶴子とに打向ひて「何うです鼻竹がアノ事件の犯罪人とすれば老人の目を潰した貴夫人と云ふのゝ無論まあ坊だから此上ゝ誰だまあ坊が即ち輕根松子夫人で夫人が茶谷の情婦だと云ふ事を突留れば何の樣な婚禮でも破れて仕舞ふ（鶴）本統に爾ですよでもアノ曲者が逃ずに捕まれば好い者ですが」と評議の未だ終らぬうち忽ち鶴子が居間の窓に尋常ならぬ物音あり窓の硝子も粉微塵に毀れしかと思はるゝばかりなるにぞ三人ゝ躍て其室に入るに個ゝ抑も如何に窓の外に差出したる長一間幅半間ほどの短き樣側に盆栽など載せありたる其の所へ上より落來りし人あるあり此人誰ぞ是れ鼻竹あり彼れゝ到底逃れぬ所と見

乘るか反るかの了見にて己が窓より玆に飛降り鶴子の室を通り抜て逃去らんとの考がへにて大膽にも五階の上より狹き椽側を目掛けて飛しものあり

第三十五回

鼻竹の落來りし椽側には三方に低き欄干を圍らせり彼れ若し今一尺外の方に飛たらんには椽側に留る能はずして下の大地まで眞逆樣に落行く所なりしも唯彼れが運の强き者か一尺の違ひよて狹き椽側に留りしあり去れと四階と五階の間は殆ど二間半餘もあり其所を落來りて欄干よ身体を打し事なれば彼れ殆ど半死半生あり耕次郎は是を見て「サア捕へて巡査に引渡さう」と云ふ長々は周章もせず「イヤお待なさい引渡す事は引渡すが充分に問詰て何も彼も白狀させた上であければ」と云ひ自ら窓の戸を開き戯

れたる硝子を押遣りて鼻竹を引摺入れんとす其間に耕次郎は妹鶴子に向ひ「和女が居ても仕方がない次の間よ退いて居るが好からう」と云ふに（鶴）爾ですとも私しはアノ顏を見る丈でも恐しくて身が震ひます」と云ひ鶴子は其儘次の間に隱れたり長々は玆へ鼻竹を引來るに彼れ身体の痛みにて容易には顏も得上ず「爾手荒く引れては腰の骨が折て仕舞ふ待て呉アイタ、、（長）待て居る暇はない最う巡査が遣て來るから」此言葉に鼻竹は一層の力を得て「難有い巡査の來ぬうちに助けて呉れる積なのか」と云ひつゝ初めて顏を上げ長々の姿を見て「ア、手前あら安心だ己を助けて呉れるだらう」と呟くは雛の夜馬尾藏の酒店にて一緒に酒を呑し事を覺え居る者と見ゆ（長）ナニ己が手前を助ける者と怨みこそあれ恩はないもの（鼻）ナニ怨み己に何うして怨みがある（長）ヘン公園地の踊の夜己の指環を奪ふと思ひ己を推潰しよ掛ッたのみかお皺婆の家までも己の後を尾けて來たし



ないか鼻竹は病く驚きヤ、ヤ、彼の時の印度人は手前であつたか（長）爾と見える（鼻）じやア手前は探偵だな（長）ナニ探偵あどする樣な己じやないが（鼻）では己を助けて呉れ夫とも己が此通り警察に追詰られたを幸ひよアノ夜の怨みを返す積りか夫では餘り仇じけあいと云ふ者だ男なら己を放して呉れ怨みは此次逢た時に尋常よ返されるから（長）口ばかり叩かずと己の云ふ事を聞け手前の樣な者を相手にして怨を返すの何のと云ふ子供らしい事じやあい助けて遣る事は助けて遣るが其前に問ふ事がある有体に返事をするか（鼻）助けて呉れるなら彼是云はずと直に放て呉れ今探偵が鍵鍛冶を迎ひよ行たから引返して來れば最う助からぬ（長）何と云ッても聞くだけの事を聞くまでは（鼻）好し仕方あがい何でも云はふ早く問へ早く早く（長）外でもない村越お鞠と云ふ女を殺した一條だが！（鼻）何だ己れは人あど殺した覺えはあい（長）覺にがなくとも巡査が手前を捕縛

に來たのは其の罪だから仕方がない手前が寐臺の一方を持ち通りかゝつた老人に一方を舁がせ手前は旨く逃て仕舞ひ其の老人に容易あらぬ迷惑を掛けた事を覺えて居るだらう今更ら何んと云ッても了けぬ手前が其の場から逃げ去ッて馬尾藏の家へ這入り息繼に一杯呑だ事まで詳しく己は知ッて居るから鼻竹は暫し考がへしが云はで叶はぬ事と知り殊に一刻猶延すれば一刻だけ我身の危ふさを增來る場合なれば早くも思ひ定めし如く（ウム彼の事か後で聞ば何とか云ふ老人が目を潰されたと云ふが可哀相に己の身代にあつたのだ（長）何だ手前の身代とは（鼻）爾よまあ坊は己が引返して强談に來るだらうと思ひ毒藥を以て待て居る所へ老人が行たから己と間違て毒藥を掛けたのだ此異樣なる話しに長々は益々怪み何だとまあ坊は何故手前に毒藥を掛やうとした（鼻）手前も悟りが悪いなア彼の人殺しを知て居るのは己一人だから己の目を潰して置ば安心だと思つた

のだ己は其後もまあ坊に逢ひ既に手前の知て居る通り公園地で一緒に踊りもしたけれどまあ坊は旨くおまかし己を痛める積ではなく老人と知て投掛けたと云て居るし其前にも己に其通りの手紙を寄越したけれど己は故と馬鹿になり氣の附ぬ振で居る斯して油斷をさせて置て己がまあ坊を殺して遣ねば先が返て己を殺すアノ樣な險呑な女は生ては置れぬ」とすら〳〵獨り述來り既にまあ坊がお鞠を殺せし事は疑ひもなき迄よ口外した れば長々い痛く心に喜び乍らもお鞠を殺した下手人がまあ坊だと云ふ事い疾くに知て居たと云ぬばかりの顏附にて「シタがまあ坊い何故お鞠を殺したゝらう（鼻）夫を己が知る者か己い唯だ死骸の取方附を頼まれた丈だもの（長）其手續い（鼻）斯サアノ日の朝無名の手紙が來たから調で見ると金儲の口があるから今夜十一時にアルッ街まで來て呉と書てある差出人い分らぬけれど久しく外國へ行て居たまあ坊の字に違ひないから兎も角

もと思ッて夜の十一時を待ち行て見るとアのお鞠の殺された家の軒下よまあ坊が立て居て今度此家を假た所何時の間にか誰とも知れぬ女が此家の中で首を縊つて居るから警察へ屆けやうかと思ふが屆けて若し疑ひが自分に掛れば厄介だから何所へか此死骸を捨て呉れ爾すれば二百法遣るからと云ひ善當り手附として直に二十法呉れたから夫い易い事だと請合て死骸を見ると首を縊つた者でいなく確かに縊殺された者だから己い一時驚いたけれど茲が儲所だと思ひ「オイ姉御此死骸じゃ二百法で受合はれぬ誰れ外の者に頼みヱと斯う一本極て遣ると流石いまあ坊だ無言て千法呉れたから己い益々安心し此後い是を種に幾等でもまあ坊を絞れると思つた所先も中々上手を越すアバ摺だ直で硫酸で目を潰し再び己に自分の姿を認められぬ工夫をして何でも目さへ潰して置けば其上い女の手一つで此己を殺す事が出來ると思ッたに違ひない」と澱みもなく述べ來る閻

く事皆意外あれば長々も耕次郎も猶ほ此跡を聞かんとす

第三十六回

是まで迷來りて鼻竹の只管よ時の移るを氣遣ふ如く「サア是だけ云へば最う好らう早く約束通り放して呉れねば再び巡査が上ッて來るが（長）イヤ猶だ少し問ふ事がある（鼻）問ふ事は幾等ありても巡査が來てから放して呉れたのじや何もならぬから餘り手間が取れゝば幾等問ふても返事せずに行て仕舞ふぞと云ひ腰さへも落着ぬ如く戸の方を眺め廻す（長）イヤ最う五分と い手間は取れぬ全体まあ坊とは何者だ（鼻）何者だと手前の見た通りの女ぢやないが踊の時などに一緒に逢ふばかりて其外は何も知らぬ唯金ばかれが綺麗だから姉御〳〵と立て居るのサ（長）でも職業があるだらう（鼻）爾サ大金を湯水の様に遣ふ所を見れば儲口のあるだらうが夫も

眞面目の商賣でのなく鼻の下の長い金持を丸めてゝも居るだらうよ彼の氣質では外の仕事の出來ぬから（長）今何處に住んで居る（鼻）何處に住で居るか其樣な事を問ふ樣じや手前猶だまあ坊の氣質を知らぬと見えるあ先年外國へ行く前より隨分己等も懇意にしたが其時でさへ尋ねて來られるを夏蠅と思ッてか誰にも住所を知せはせぬ其癖己等の住居へも幾度も遊びに來たけれど長々は少し意外の想をあせども其言振の偽りとも思はれねば更よ問を起し何時外國から歸ッて來た（鼻）夫も確かに知らぬけれど此頃よ違ひない己の逢たのも人殺しの晩が初めてだサア是だけて好だらう放して呉れ（長）未だ〳〵」と云ひなから長々は暫し考へ「まあ坊に情夫があつたのを知ッて居るか（鼻）爾サアノ氣質でも二人や三人もあッただらう（長）爾じやない茶谷と云ふ伯爵を情夫にして居たが（鼻）夫も別に不思儀でも何でもない侯爵や伯爵など云ふ者の手を引て公園地を散歩した

居た事ハ幾度も見受けたから（鼻）だが手前ハ其中の一人が茶谷と云ッた事を覺えぬか茶谷立夫と云た事を（鼻）己が其樣な事を何うして知る者か公園地で逢た時ハ已などにハ口も聞かず自分が丸で侯爵夫人にでもなつた樣に濟して居たから此方からも挨拶などする事ハ出來ず知ぬ顏して其次に逢た時褒美の金に有附くのが己等の目當だもの（長）シテ見るとまあ坊が貴夫人の眞似などハ出來ぬと聞たのハ間違だな（鼻）爾サ踊の場所でばかりアノ女を見る者ハ彼のお眺よ貴夫人の眞似など出來やうとハ思ひも寄らぬが中々爾でない己等の仲間でハ女俳優に違ひないと思ッて居る（長）手前も爾思ふか（鼻）思ふとも俳優であけれバアノ樣に能く踊り又金を散く筈ハないもの「長々ハ聞くに從がひ益々我疑がひの當る如き心地すれど是だけにてハ猶は何の手掛りにもあらざれバ今度ハ短兵急に推寄せて「手前が輕根松子夫人と云ふものを知ッて居るだらう」と問ひ彼れの顏色

よ目を附くるに彼れ更に感ぜずして「何だと！」と云ひ掛しが此時梯段よりて何か物音の聞えたれバ鼻竹ハ耳を立て「先ア聞け巡査が上つて來る茲で己が縛まれバ手前まで卷き込むぞ」と云ふ此度胸に長々も少し驚き直ちに窓の方に行き往來を見降すに猶ほ彼の栗川巡査が出口を見張り鍵鍛治の來るを待つ樣子なれバ「ナニ未上てハ來ぬ併し最長い事ハないからサア早く云て仕舞へ輕根松子と云ふのが即ちまあ坊と同人だらう（鼻）輕根松子などと己は今聞くが初めてだが若し同人なら己の方でも其名前を覺えて置き度い其松子と云ふのがまあ坊よ似てでも居るのか（長）似て居るとも生寫しだ（鼻）其女は何所に住で居る（長）アンヂョー街の角屋敷に（鼻）シテ其女も矢張此頃外國から歸つたのか」と今はアベコベに長々を問詰んとす（長）爾と見える夫を手前が知ぬ筈はあるまひ（鼻）イヤ知らぬ（長）全体まあ坊の本統の名は何と云ふのだ（鼻）夫も知ぬが爾サなアまあ坊と云ふ

所を見れば矢張り松子とか豆子とか云ふのだらう併し最う逃して呉れ落着て居られない（長）イヤ猶だ（鼻）猶だと云ても此上の事は知らぬから仕方がない（長）知ねば仕方がないけれど其代り證據を貰はねば（鼻）證據とは何の證據を（長）手前が今まで言ふ丈の事が虚でないと云ふ確か證據を（鼻）莨坊め其樣な證據が有る者か（長）有るから呉れろの云ふのた人殺しの後でまあ坊から寄越した手紙が有ると云たちやないか其手紙を今も猶ほ衣囊へ入て居るだらうサア呉れ今度こそ本統に巡査と探偵の足音だぞ」成るほど最下層の段階子に當りドヤ〳〵と上り來る足音あり（長）サア最うたッた一分で逃損ふう實に是れ危急の場合あれば鼻竹は物をも云はず衣囊を探りて反古の如き物を取出し長々の目の前に差附る長々は受取りて推開き唯一息にて讀盡し「好し是で好い」と云ひ突放すよ鼻竹は一足にて早や戸の外へ飛出す其早きと電光石火に異ならず長々は後に耕次郎と顔

見合せアヽ彼奴巡査の網の中へ飛込んだ（耕）イヤお聞きあさい足音を彼奴下へは降ずに再び五階へ上つて行ましたが（長）五階へ歸れば捕まるばかりです今度は巡査が鍵鍛冶を連て來ましたから夫とも再び此室の窓へ飛降る積りでもありますか（耕）今度飛降りれば捕へて巡査に渡して遣りませう全体今放したのも能くなかつた（長）だつて放して遣ると云ふ約束でアレ丈の事を仰有らせたのだから（耕）夫は爾です約束だから仕方もないが」と評議の未だ終らぬうち早や巡査い四階まで上り來り此室の前を通りて更に又五階へと上り行きたり知らず鼻竹は如何にして逃れんとするか

第三十七回

五階を指して登り行く巡査の足音を聞あから耕次郎は長々に打向ひて「折角貴方が問ふたけれどアノ鼻竹とか云ふ男は別に大切な事を言ませんで

した子と云ふ（長）イヤ何うして是で最う三峰老人の目を潰したはまあ坊と確かよ分り様よまあ坊から鼻竹に寄越した手紙まで手に入れましたから此上は唯だ松子夫人の書た者を得て其文字を比べて見れば同人か別人か直に分ります（耕）ですが松子夫人の書た者を手に入る工夫がありますか」此問には長々も閉口して頭を掻きしが良ありて「今では工夫と云ッてもありませんが後で能く考へれば必ず何とか出來ませう今までの苦勞に比ぶれば是から後は易しい者です」と事もあげに言放てど眞の困難い漸く是より初まる者にて今までは序の序ありとは更よ思ひも寄ざるならん（耕）夫にしても茶谷伯爵が其まあ坊の情夫と云ふ事は少しも證據が上らぬでありませんか」と云ふ成る程耕次郎の氣に掛るは茶谷と龜子が婚禮の一點に在る事なれば斯く云ふも無理あらず長々は其心を察し遣り「ナニ貴方松子とまあ坊と同人と分れば其松子の落した指環が茶谷伯爵の品と云ふ事

は既に金言で分つて居るから其後は言ずとも分ると云ふ者です」と頻りに耕次郎の氣を引立んとするに其中よも早や五階よては鍵鍛冶か樣々の鍵を取り鼻竹の室を開んとする音い手に取る如く聞ゆるにぞ耕次郎い心配氣に「若し今鼻竹を放した譏で吾々に疑ひでも掛れば面倒ですヲ（長）ナニ其樣な心配はありません」と口には立派よ言切れど心には幾分か危む念の存するより「イヤ貴方い鶴子さんと共に室の中で待てお出なさい私しが五階へ行き疑ひの掛らぬ樣旨く言開いて來ますから」と云ひ已は直ちに此室を飛出し入口の戸を固く締め置き其儘五階へ走り上るに此時鍵鍛冶は戸を開き果せ巡査探偵殘らず鼻竹の室に推入たる所あり去れど鼻竹は如何にせしか其姿の見えざるより一同は打ち驚き（甲巡査）是は不思議だ鍵鍛冶を呼に行た間に彼奴悠々と逃て仕舞た栗川巡査は是を打消し「其樣な筈はない僕が出口の番を仕て居たから逃れば必らず僕の目に觸る筈だ（甲）

でゝ誰かの室ゑ隠れて居るだらう先づ四階に下宿して居る人の室から探して見やう」長々は悸として「丁ません〳〵」と思はずも聲を發するに甲巡査は直に聞咎め「貴方は全体誰ですか」長々が答へぬ先に栗川が「イヤ此紳士ハ僕の知人で今まで此下の室へ遊びゑ來て居たとて長々の身の上を保證するにゞ長々は力を得て「貴方がたの探して居る曲者は今し方五階を降り四階に下宿する私ゞの友人の室へ來て隠まふて呉れと云ひましたが私しが友人と共に斷然跳附ましたら再び此五階へ上りました夫ハ最う確かです私しが保證します（甲）では此邊に居ねばならぬが」と怪む言葉の終らぬち乙巡査走來りて分つた〳〵」廊下の隅に天井裏へ登る階子がある夫を上つて彼奴天窓から屋根へ逃たのだ」と叫ず一同は之を聞き唯だ驚ろくのみ（甲）でも夫は君の想像と云ふ丈だらう愈々屋根へ逃たと云ふ證據はあるまひ（乙）大ありだ天窓の戸をコヂ開てある今から屋根へ上れば捕へる事

が出來るだらう」と云へど一人も返事せず彼しろ五階の屋根にして地を離るゝと百尺餘りあれば屋根、蓑を商賣とする者でも迂濶にハ上り得ず況してや大地の外は歩きし事なき巡査探偵にして一たび之に上り行かば歩まぬ先に眼眩まん殊ゑ若し曲者が足場を圖りて待受くるに於ては近寄る者ハ唯一突に突倒され辷り落て命を失ふのみあれば誰も彼れも顔見合はすのみにして我れ上らんと言ざるも無理ならず獨り長々ハ奮發して「でハ僕が上ッて捕へて遣う」と進み出づ此言葉に栗川も力を得て「僕も行かう」と云ふ一同の巡査探偵ハ賛成の聲も發せず去れべとて引留る樣子もなきゆゑ長々と栗川ハ一同を推退けて天井裏に上り曲者のコヂ開たる天窓ゑ潜りて外ゑ出れば外ハ見れ香渺たる大空ゑして飛ぶ鳥の外見る人もなし屋根は左までに險しからず十度餘りの傾斜あれば通例の坂道に同じけれど何しろ滑かなる瓦にして其上靴ばきの事なれば足掛りとてハ更ゑあく一歩

を踏過まれば身を支ふる由もなし二人とも幾分の覺えあればこそ自ら進み出て此險呑ある役に當りし者の茲が生死の境かと思へば迂濶にも進みもならず先づ此方彼方を見廻すよ曲者の孰れに行きしか其姿見えざれど唯だ頂邊の所に當り隣家と此家と兩方より用ふる者と見え最太やかなる煙突あり其陰の外にも隱るべき所あければ二人とも必定夫れと目を附けて(長)アノ背後に隱れて居るぜ(栗)夫も無論サ併し何うして捕へて呉れやう(長)二人が右左りに分れてから行ふでもないか(栗)好し」と云ひ二人も煙突の許まで進み茲にて右と左に別れ兩方より探り行く若し左右とも同じ時に煙突の背後に到らば二人と一人の戰ひゆゑ彼れ鼻竹を捕ふると容易なりし所なれど長々の足や早かりけん僅かあれども栗川より先に出たれば待居たる鼻竹は兼て足場を圖りたる事と云ひ兩手を廣げて長々に向ひ來り唯一突に長々を突飛し次に一方より現はるゝ栗川に向ひたり憐れ

むべし長々は鼻竹に突れし爲め其足を辷らせて俯伏に倒れたり彼れが身もも宛も水の流るゝ如くスル〳〵と辷り降る彼れ立んにも立つ由あく何か捕へて身を留んと揉掻けども一面の瓦葺にて取留むる者もなし初めは〳〵と辷りし者が益々揉掻くに從ひて愈々勢ひを增し來り今は宛も雪あだれの山より落來る如く留むるに由なからんとすアヽ彼れが身の屋根に在るは今一秒の間なり一たび屋根を離るれば百尺の下に落ち街上の石に骨までも微塵とならんアヽ彼れ終に此世の人に非ざらんとするか

第三十八回

嗚呼長々生もの唯だ鼻竹が屋根へ逃たる事を示し巡査よ春野彩次郎の室を搜索させまじとの一心より自ら屋根に出來り却ッて鼻竹に突倒されて今もの我が命だに取留るに由あからんとす彼れの壽命も實に瓦の一枚〳〵に

縮み行きつゝある者あり彼が身の聲もなく力もなく下へ〳〵と辷り行くのみ世に斯も情けなき例やある壽命の益々縮むに連れ彼れが腦髓の愈々世話しく動き初め僅か一分時に足らぬ間に斯すれば助からんか爾すれば免れんかと心百端よ走迷ふ中に唯一つ頼みとするは屋根の誌る所に必ず筒樋あらん之に足を踏留れば我身を支ふるに難からじと足の先を瓦に着くるに此時確に足に掛る者ありたれどアハヤと思ふ暇もなく足の早や屋根の外よ突出たり今こそ必死の場合足は外れても手は外さじと肱を張りて杖に突き之に滿身の重さを加ふるに辛くも九死の中に一生を得彼れが雨の手は其筒樋の溝に落入りたれば之にて身体を食留めたり抑も此筒樋と云へるは屋根の外に附たる者にはあらず屋根の端を堀り窪めて溝となし雨水の下に落るを防ぎたる者なれば屋根の崩れぬ中は筒樋だけ外れ落る恐れはなし去れど唯だ恐るべきは長々が腕の力能く其身体を釣上

げて何時までか堪へ得べき一旦取留めたれど身体は既に屋根の外にブラ下り唯だ腕の力一つにて其重さを支へ居る者あれば腕の力盡るると共に今度こそは何の支へる者なく落行ん何とかして腕の疲れぬうち這上る外はあし長々は僅に我身の留りたるに力を得此樣な時は自分で周章ては助かる者も助からぬからと云ひ篤と心を落着るに我さへ斯る目に逢たれば栗川巡査も突落されしに相違あし栗川既に落ち去らば其後よて鼻竹は更に又我れを方附けよ來ると必定あり夫までに身を屋根の上に引上ずば奈落の底の人とあらん好し〳〵先づ片足を上げ行きて溝に掛くれば後は最易き事あり體操しても覺えありと我と我心を勵まし先づ兩肱の力にて肩と首とを前の方よ突出しそろ〳〵と右の足より上行くに此時何者か最重き力を以て我肩を踏着る心地し引續きて筋骨に非常の痛みを覺え總身強張りて動くさへ自由あらず是れ俗に云ふ小グラの返りし者にして何人も

踏着けしよ非ず唯だ我が力の餘る爲め俄かに筋の痙りたるなり今までとても水を游ぎたる時などに小グラの返りし事一二度あり其時は唯だ揉揉かずして靜に其の自ら直るを待つの外なければ長々は又氣を緩め筋の自然に伸來るを待たんとすれど其待遠さい實よ一刻が一年より長く思はれ何時まで待て直るやら其當もなし二年三年も待たるかと思ふ頃より我身体は宛も鈎鐘の如く重くなり手も肩も千切るかと疑はる誰か來て助くる者はなきかと思へば遙か下の方にて「アレ彼の屋根に人が下て居る」と口々よ囃す聲聞ゆるに似たり是も心の所爲なるべし茲に至りては心さへも攪亂れ視れども見えず聽けども聞えず頓ては屋根までも我を振り落さんとする如く右左に搖れ動く如くかと怪しまる最早や支ゆるよも支へ難し左しもよ勇氣ある長々なれど茲に至りて勇氣盡き斯くブラ下りて苦まんより手を離して死る方が幾倍安樂なるも知れず死して一刻も此恐ろしき苦

痛を短くせんと既に最心の決心を起し是が此世の見をさめと兩の目を張開くに此時唯一つ眼に留るは我が鼻先なる瓦の上に落留れる一輪の薔薇花あり先刻鶴子が手づから作りて我れに與へ我れ自らボタンの穴に挿したる者あり之を見るとひとしく鶴子の姿も目の前に浮び來り我を靡招く心地せらるゝ我身は猶ほ死すべからず假令ひ死す迄も鶴子が我に贈りたる此薔薇花を抱きて死なん是れ切てもの慰めなりと再び必死の力を出すに漸くに小グラの痛みも直り輕く片足を繩の溝に掛け得たり天の助けか我身の運か有難しと思ふと共に心も張り體操にて覺えたる秘術を盡すに不思議にも兩足とも樋溝に掛り元の屋根に攀上り果せたり彼れホッと息を突きアヽ此花で助かッた」と云ひ薔薇花を拾ひ上て再び我胸に差し今度は筋違に這ふ如くよしてろろ〳〵と瓦を踏めば漸く又絶頂なる煙突の許に至るに茲は宛も煙窓の銪とも云ふべく周圍に平なる椽側あり鼻竹が

潜み居たるも即ち此樣側あれば長々は是れに身を隠き我胸を撫で乍らも空く四邊を見廻すに長々がブラ下りしとは反對の側の樋溝に巡査の帽子掛へるを見る扨ては栗川は鼻竹よ投落されしなれ殘念なる事を仕てけるよと我知ず歎息すれば此時又一方の端に當り助けて呉れと云ふ聲あり驚き見るに是れあん彼の鼻竹にして彼れも一分間前の我と同じく軒の端にブラ下れり察するゑ栗川と組合ひたる結果にまて栗川ハ下に落ち彼れハ猶ほ落切らぬ者なるべし長々は赫と怒り「已れ巡査を投落したな」と云ふ鼻竹は必死の聲にて「投落しはせぬ加勢を呼に行たのだ助けて呉れ助けて呉れ」(長)手前の樣な奴は殺しても足ぬ奴だ已も自分で這上つたから手前も自分で這上れ(鼻)這上るにも最う力が盡て仕舞た此上は腕が續かぬ助けて呉れ手前何も已を見殺しにする程の怨はあるまい(長)あるかあいか考へて見ろ(鼻)爾う云はずに足を出も已ゑ捕まちせて引上て呉れ此方の家根

は長々が辷りし方より最狹くしてなるほど長々が足を伸せば鼻竹の手に届くほどなり左れど長々は素より彼を助くべき謂れあければ其儘で栗川巡査が加勢を連て來るまで待て居ろ(鼻)爾う邪見な事を云はずとコレ早く足に捕まらせて呉れ助かりさへすればまあ坊の本名も今住ひ居る所も知せて遣る今已を殺しては世間にまあ坊の本性を知た者が一人もなくあるから後で詮索しても分らぬぞ我はまあ坊の情夫の名迄も知て居る」と必死になりて說來る此言葉は初て長々の心を動かせり「何だまあ坊の情夫の名を知て居るでい其頭文子だけ云ふて見ろ(鼻)イヤ助て呉れねば云われあいサア早く早く」と迫立るのみれば長々も其氣になり身は煙笑の樣に握まり葡萄して其足を差出すは鼻竹は「難有い」と云ひ其足を捕へるより早く「サア手前も一緒に死ぬ」と云ひ足の拔る程強く引くァ、彼れ到底已の助からぬを見言葉を設けて長々の足を取り不意に乘じて我身と共に引落さ

ん訓なり

第三十九回

出抜よ強く足を引れ長々い殆ど我身を支へ得ざらんとせしかども初より鼻竹の心を疑ひ煙突の控に用ひたる鎖の綱に手を掛け居たれば辛くも身体を支へ得たり鼻竹い必死と爲り「幾分其綱に握まつても最う駄目だぞ引落さいで置くものか」と云ひ益々其手に力を込め猶ほ口續けに罵りて「手前と一緒よ上つて來た栗川とか云ふ巡査も早や已に投落され下の甃石に死で居る手前も其後を逐へ己と一緒に落るなら勢有く思ふが好い」と果い長々の足を折んばかりに力を極めて且引き且捻るにぞ其痛みに堪へ得ずして綱持る手も弛まんとす今い早や是までなりと全身の筋力を絞り來り握まれし右の足を漸く一尺ばかり上に引上ゆ鼻竹が頭の少し前の方に出たるを幸ひ充分の狙ひを定めて左の足よりて彼れが天狗鼻を碎くるばかりに跳

挫じくよ彼れ其痛みに眼眩み苦と叫ぶ一言と共に長長の足を放し其匝下に落行きさり長々は身を直して先我が足の痛みを揉み次よ額の汗を拭ひ「彼奴も先づ目指す敵の片割と云ふ者だ死で仕舞へば此上は一本鎗にまあ坊を詮策する丈の事だ」と呟きつゝ立上りて元の天窓に引退ぞき夫れより降りて鼻竹の落たる場所に到り見るよ彼れ殆ど目口鼻の差別もなきまで に打碎け血に塗れて死するを見る其傍に同じ有様の死を遂たる一人は嶋むべし彼の栗川巡査なるにぞ長々は幾度か嘆息し其傍に驚きて立番せる倉地外數人の巡査よ向ひ屋根の上の顚末を物語るに就れも長々が自ら屋根の端にぶら下り辛くも再び攀上りし有様を下より見留めたる事なれば長々の功を褒めて止ず去れど長々は心に豫々の秘密を包る事なれば長く語うちよ我口を辷せてはならず思ひ好き加減に切上て再び四階に上り行き春野耕次郎の室に入り彼等同胞と此日を暮したりとぞん

是より既に三日を經たり其筋にては鼻竹の死したるを見て最早や問越お鞠の殺されし事件は探索の手掛なきものと爲し茲に見切を附たりと云ふ去れど長々い猶ほ見切ず彼れが懷中にいまあ坊より鼻竹に送りたる一通の手紙あり之を證據としてまあ坊を訴へるい易けれど唯我が師匠の家に拘る事柄を世間の口端に掛るを好まず成るべく何人にも知せずして事の落着を計らんと思へるなり去れバとて此手紙だけ證據として再び三峯老人に告るとも老人い先に吾を叱りし如く亦々や餘計の詮索立てとして我を斥けん殊に又此手紙だけにていい實際何の證據にも立たず我が肝腎の目的いまあ坊と松子夫人と同人なりとの證據を得續て茶谷立夫がまあ坊の情夫なるを見極め夫にて立夫と龜子の婚禮を妨ぐるのみに在れども此手紙い唯だまあ坊が鼻竹に送りたる丈の者にて輕根松子夫人にい露ほども關係なし何どかして松子夫人の書たるものを得其筆癖と此筆癖とを見較

べるが差當急務なれど如何にして松子夫人の書しものを手に入るべき自ら松子夫人を訪ふい既に先頃指環を還しに行きたるにて懲々せり嗚呼如何にせバ好らんかと只管心を碎けども是ぞと云ふ思案も浮ばず其中に立夫と龜子が婚禮の日限い益々推寄せるのみにして今三日を空く過せば何も彼も後の祭となる場合あれば彼れ殆ど氣は氣に非ず師匠の家に入り行きても彫刻さへ身に附かねば唯當て度もなく外に出で街上を徘徊するに犬も歩るけば棒の譬へかモンシー街を通る折りしも思ひ掛けなく彼のお皺婆を認得たれば先の夜公園の踊に赤印度人の裝束を借り开を返せし時婆がまあ坊を知ると語りし事を思ひ出して忽ち一策を按じ付き其傍に寄り行きて肱を掛け「婆さん何うだ相替らず繁昌かヱ」と肩を叩くに婆は好い所で逢たりと云ふ風にて「オヽ長さんか此頃の不景氣に何が繁昌する者かヱ日頃正直あお前まで直に掛ふと約束したアノ損料を未だ拂つて呉れぬ

程だものアンから延喜が悪くなり當と云ふ當が悪く外れるばかりサ（長）爾々己はすつかり忘れて居たよサア是で損料を取て貰はう」と云ひつゝ彼の胴巻より有名なる金貨一枚を出して與へ是では八法の釣になるか已等は此頃無靈が當り山の様に金貨を持て居るから釣は入ぬ滯ほつた利子に遣らう」婆は驚きて長々の顔を見上げ「本統に無靈が當つたのかエアヽお前にやア當るよ人間が正直だもの私しにも少し儲けさせてお呉れあ損料の踊り看物も亦色々來て居るから其中でも日本のコカダなど云ふのは本統にお前に看せて踊らせ度い何れほどか輕からう」長々は我餌の充分に利きしを見「儲けさせて遣うとも夫もナニ損料を借るのぢやあいが差當つてお前に頼みがある（皺）アヽ儲口あら何でも頼まれるよ（長）儲け口ともお禮は幾等でもする外でもないがお前まあ坊を知て居ると云たヲ（婆）爾サ大知だつたが外國へ行て仕まつたから私しも大事のお得意を失つた様な者

サ（長）所が其まあ坊が歸つて來て今ちや立派な貴婦人になり輕根松子夫人と名乗てアンヂョー街に住で居るがお前其家へ尋ねて行きまあ坊に逢て來て呉れないか」アヽ彼れ大膽にもお皺婆を松子夫人の家に遣り松子とまあ坊と同人なるやを見屆けさせんと思へるあり（皺）オヤオヤ直ぐ其所のアンヂョー街に私しい少しも知らなんだ外國へ行き貴婦人になつて來たあら定めし色々あ衣類も持て居るだらうお前に頼まれずとも私しやア尋ねて行くよ行て古いのを買出して來るワチたがヲ長さん今い買出しの資本がないから十五ル非か二十ル井の金が溜れゞ其時に行としやう（長）ナニ夫くらゐの資本いゾレ茲に」と云ひながら亦胴巻を探り一握の金貨を取出し借氣もなく手渡しせり彼れい今まで此金を以て鶴子と世帯を持つ資本にせんと思へゞ虎の子より大事にせしも鶴子に濟らはしき金なりと罵られてより今い重荷の如く思ひ殊に屋根の端にブラ下りし時此金子の

爲め我身が猶更重かりしと思へい金子い身を危くする元と心得え早く遣ひ捨んと思へるあり去れど婆い容易に納めず「長さんお前い何だか氣味の悪い人だチェ（長）ナニ氣味が悪い者か無盡が當つて持餘して居る金だから、差當りお前の資本に是だけ貸て遣るのサ（皺）ァ、貸て呉れると云ふあら借やう斯見えても私しい譯もあく貰ひ物い受取ぬよ先達ても廉いと思ッて買た着物が泥坊の品だとて警察で非道い目に逢たから（長）此金を盗んで來た者と思ふい猶ほ非道いや何處からも尻の來る金ちやないから夫れだけい安心するが好い（皺）だが其まあ坊に逢た上でお前い何うして貰ひたいと云ふのだェ」と聞返す是より長々い如何ある計畧を授んとするや

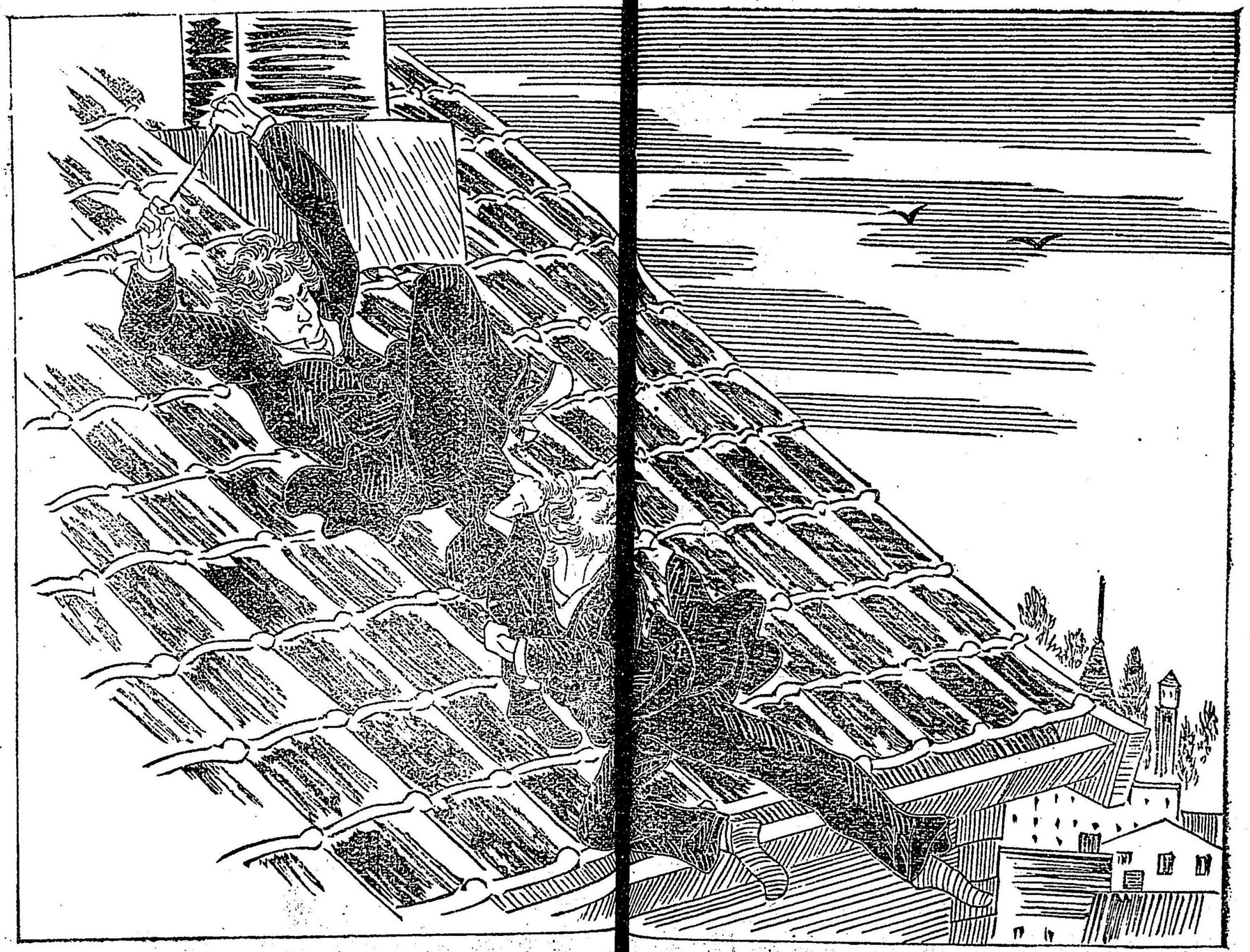
第四十回

松子夫人が若しもまあ坊に非ざりせば尋行きたるお皺婆は定めし極りの

悪き思ひをすべし長々も升を察せざるに非ざれど今まで探り上たる所にては十が十まで同人に相違あく殊には外に探偵の道あければ長々は度胸を据ゑ間違ば又其時に思案あらんと高を括りて婆に向ひ「實はチョお前がまあ坊から古被でも買取ッて其代價を拂ッた上まあ坊の自筆で書た受取を取て來て貰ひ度いのだ（婆）夫は了あいよ私しとまあ坊は受取の遣取をする樣お他人行儀の間じやあい今まで書附なしに借たり貸たりして居たのだもの（長）夫にしても別に金主があッて其金主に受取を見せねばならぬとか何とか旨く言へば好い」婆は彼の金子を撿めァ、「丁度二十ル非ある成るほど是でお前は私の金主だから爾云てい見やうけれど一体お前い何故其樣にまあ坊の書た者を欲がるのだェ」長々い言葉巧みに「夫が此方の秘密と云ふ者サお前だから聞せるが實いナ先夜公園で踊た時まあ坊に逢たのだ先ァ何うした機みかまあ坊が已に思ひを掛け無理に已の手を引て休

息室へ連て行くやら大騒ぎ夫を外の奴等が嫉妬んで已を、搦り殺すなどと云ひ出したから夫でアノ夜お前の店へ泊て貰ッたと云ふ者だ所が此頃まあ坊が已等に文を寄越し或る所まで忍んで來て呉れと書てあるけれど夫が眞實まあ坊の書た者か夫とも已を搦らうとする外の奴の計畧か知れぬから何うかしてまあ坊の書た者を手に入れ其文と較べて見度からサ（皺）ジャア斯しやう私しがまあ坊に逢ひ内々で聞て見やうお前に其樣な文を出したか出さぬか（長）鹿馬を言子エ其樣な事を言ていまあ坊が已を活智あしと思ふから已の名前いおくびにも出していて了ぬ（皺）大層お前い氣六かしいよアヽ好い事が在る其文を私しにお見せ私しが一目見れバまあ坊の書た者い直に分るから（長）所が生憎に今其文を持て居ない（皺）でいお前宿へ歸ッて取てお出で夫が一番近道だよ（長）爾するとお前大事の設を取逃すぜ今まあ坊に逢ひ外國の古着でも買出せばアノ樣な女だから只も

同樣の直段で呉れるとも知れないよ（皺）夫は爾だか若しお前がまあ坊の書た者を手に入て夫で何かまあ坊に惡戯でも仕やア仕ないかと私しやア何だか心配だから」流石は年の功だけあり早や長々の目的を疑ひ我が大事の得意とするまあ坊を保護せんとす長々は必死になり「何に其樣な事がある者か已が其筋の探偵じやあるまいし」とて猶ほ樣々に說廻すに婆は漸く合點して「夫なら好いけれど後で若し私しがまあ坊に怨まれる樣な事にでもなれば損が行くから夫で念を推て見たのサ（長）じや其樣な事がないと分ッたから早く行て呉な（皺）是から直にかへ（長）爾とも今夜忍び逢ふと云ふ約束だから今の内に行ねば出て仕舞ふ」と眞顏にありて促すに婆も初めて其の氣にあり「餘ぼどお禮でも貰はねば引き合ぬよ」と云ひ是れより共々にアンヂョー街を指し行きしが頓て眞近くなりし頃長々は但ある珈琲店に入り」茲に已等は待つて居るから」と云ふに婆は心得輕根夫人の宅を指



し往けり斯ることには慣れたる女なれば先づ玄關に立ち取次ぎの下女に向かひ「夫人は猶だお宅だらうッ」と云ひ樣突々上がらんとす下女ゝ驚きあから「丁ませんよ夫人ゝ誰にも逢ませんから」嬰ゝ中々辟易せず「何だ誰にも逢ないッてお前私しを知あいッ此儘私しを追歸して御覽よ後で夫人から叱られるから」と云ひ猶ほ聲一ばいに張上て手嚴く云まくるに松子夫人ゝ内より此聲を怪みてか密と合の襖を開き美くしき顏を出して差窺く嬰ゝ得たりと附込て「ソレお見な他人と違ひ私しだから夫人ゝ逢て下さるちやないか」と云ひ下女を突退け松子夫人の鼻先まで推寄せ行く夫人ゝ嬰の顏を見て打驚き「オヤ婆さんか能く先あ尋ねて」と云掛けて身を引くゝ中へ這入れとの意あるべし嬰ゝ勝誇る顏附にて彼の下女を後目に掛け其儘襖の中へ入んとするよ此時中より悠々と出來る一紳士あり高き帽子を頂いて最と横柄に搖へたるゝ孰れ身分ある人と見ゆ此人お皺婆にゝ目も掛けず

知らぬ顏にて玄關より戸外の方に出行きたれば嬰ゝ引違へて中に入り「オヽお前本統に能く歸ッて來たよ私しや最二度とお前にゝ逢れぬ事かと思ッて居たが先ア好ッた安心したエまあ坊イヤサ松子婦人お前今まで何所へ行て居た今度何所から歸つて來たがお前ゝ好くないよ歸り爾々昔の情夫を引入てサお隱しでない今出て行たアノ紳士がお前の一番の好い人だよ其樣な事いちやんと知て居るワチお前が借金で此土地に居られなくなり夜逃同樣に外國へ逃たのも皆なアノ人に入揚たからの事だワチナニ私しが他人なぞに多舌る者か何の樣な事を知て居たとてお前ゝ大事のお得意だものだが本統にお前ゝ感心に年が若いよ八年前から少しも異らず返つてズッと若く成たイーエ本統だよ頬の傷なぞもアレ先ア少しも見えなく成てサでも猶だ幾等か凹んでゝ居るだらうが私しの目にさへ見えぬから他人にゝ誰にも見ないない隨分私しが傷を隱す秘傳を敎へ遣たッけが

チエ何しろお前い仕合せ者だ本統に剛ひ者だよ此通り立派な婦人に成て歸つて來てサ」と久し振に逢見たる嬉しさの餘り留度もなく多舌り立るまあ坊の松子婦人未だ此婆が我敵なるや味方なるや充分認め得ざる爲め頓みにい返事せん氣色もなし

第四十一回

實に此松子夫人い横創のまあ坊あり他人を欺き得るとするもお皺婆を欺くべくもあらず婆い少しも疑はず打寛ろぎて話し初む松子い猶ほ充分に安心せず婆が言葉の切れぬうち一層の事斷然として我いまあ坊に非ずと言切んかと思案する体ありしも既に顔を合せし初めに於て思はず知らずお婆さんかと聲を掛けたる落度もあり今更辞むとも其詮なく殊にい恐る氣もあき相手あれば昔の如く打解け置き又役に立る事あらんと少しの暇に心を定め」婆さん本統に能く尋ねて呉たがお前何うして私しが輕根松子と名乘り此所に住で居る事を探り出したエ」婆い悧しくも」何うしても斯してもあい一昨日の晝過ぎお前が馬車で走らせる事を往來で見受たから」と口から出任せに言掛れば」ア、分つたハスマノ街で其時私しい貴夫人と合乘して居たたらう」婆ハ益々力を得」爾さ私しい一目見てお前が外國から歸ッたと知り直に聲を掛やうかと思つたが相乘の方があるから夫も能くあるまいと思ひ見え隱れに其後を尾けて來た所お前が此家へ這入たから近所で夫れとなく聞合せたら何でも輕根松子夫人と云ふ樣子だと分つたから改めて尋ねて來やうと思ひ一昨日い先づ其儘引取たがチー（松）だがお前い私しの事をまあ坊と云ッて尋ねた譯でいあるまいチ（皺）其樣な舞間を云ふ者かチ安心おしよ唯チ口から出任せに此角屋敷は若し山田男爵と云ふ人の家でいありませんかと斯う問ふたの

サするとイエ彼れハ輕根松子夫人と云ふ方が此頃住ひましたと答へたから占たと思ひて何氣なく歸ッたのサ（松）感心にお前ハ氣が利くよ（皺）其樣な事に掛けちやァ慣れた者サ夫から昨日實ハ尋ねて來やうと思ッたけれど少し用事もありッイ今日に成た折角此通り尋ねて來たから今までの通り少し儲させてお呉なだがお前一体何所へ行ッて居て此通りの身分になるにハ隨分苦勞をしたいらう話してお聞かせ（松）アヽ隨分苦勞をした夜逃同樣に此方を立ち少しばかり公園あどで謠た事のあるのを幸ひ謠女の群に交り露國の都へ行ッたがチ初めの一年ハ隨分辛かッたけれど二年目に或貴族に見初られ落籍せて貰ッてサトラヴと云ふ所の別莊へ圍はれたが給金が一年十万法で外に樣々の手當があるから隨分面白かッたけれど三年五年と經つに縱ひ古里が戀しくて毎晩の樣に公園地の躍や何かを夢に見るのサ夫でも先ア巴里でまあ坊と云ふ名前の忘れられる迄と思ひ辛抱に辛抱して今年迄居たけれど最う能い時分だと思つて歸つて來たと打明て物語る（婆）本統にお前ハ剛い者だよ最う是で貴夫人にあり濟し安樂に暮されるだらう（松）爾サ生涯贅澤に暮されるから是より氣に入ッた亭主でも持ふかと思つて居るが（婆）でも今し方出て行たアノ生白い紳士ハお廢しよアレを亭主にすれバお前また苦勞をするよ（松）アレハ何に大丈夫サ八年も昔しに互ひに好いたとか何とか云ッた事もあるけれど今でハ最う何でもない（皺）でもあるまいよ歸り勿々アヽして尋ねて來る所ろを見れバ（松）ナニ人道で逢ッて互ひに猶だ顏だけ覺えて居たから尋ねて來ただけの事サ（婆）先ア併しお前に何も說諭をしに來たわけでもいからも其の樣な事ハ何うでも好いお前何か私しに儲けさしてお呉なチ（松）爾折角尋ねて呉れたのだから何うかしたいと思ふけれど最う古着など着ない身の上になッたのだから（皺）夫ハ爾でも着古した被物ハあるだらう夫

を私しに拂ひ下げて呉れゝば古着を買て呉れるより儲るゝ子着古して下女に遣る樣な者ゝ澤山あるだらう（松）夫ゝあるがお前に拂ッてゝ下女が機嫌を悪くするから（皺）ナニ下女にゝ私しから又充分に渡りを附けるからあるのから拂ッてお呉れ」と云ひながら四邊を見廻し隅の方の長椅子に投掛けある一枚の被物に目を留め「アヽ彼れを拂ッてお呉れ最う痛く皺にあつて貴夫人にゝ被られないよ松子も同じく其方を眺め遣り「左樣サ彼れなら拂ッても好いが」と云ふ婆ゝ早や手に取り來りて其地合を檢らためながら仕立が露國風だから引解にしても寶口ゝ遠いけれど｜（松）相變らず商賣にゝ密ッちい子夫でも拵へるには五百法から掛ッたのだよ（婆）田舍でゝ夫ほど取れるだらう巴里で仕立ゝば三百法で出來る（松）幾等巴里だッて第一地合が違ふから能く御覽な（婆）成る程ど地合ゝ可なり好い樣だ百法に拂ッてお呉れ下女にも五十法や其處らの渡りを附あきやならぬか

ら隨分高い者に附くけれど（松）高いか知らぬが私しゝ夫位のお錢ゝ要ないよ（皺）夫ゝ爾だらうけれど何うせ只で下女に遣る品だから私しに百法で拂つて呉れゝ下女も上前を取て喜ぶし私しも品ゝ兎も角も貴夫人を一人得意にしたかと思へゝ後々の爲に嬉しいからチ爾してお呉れお前だッて又爾ぢやないか百法ゝ半日の小遣にも足りまいけれど只遣る被物を百法で賣れゝ百法だけ拾つたも同じ事だまあ坊ゝ婆の言廻しの巧あるに思はず笑ひを催せしが忽ち又何事をか思ひ出せし如く「オヽ拾つたと云へゝ私しゝ大變な品物を落したがお前何うかして夫を取返す工夫をして呉れまいか」と思ひも寄らぬ言葉を聞き婆ゝまあ坊の顏を見上げ「落したとゝ何の樣な品あんだエ（松）ナニ品ゝ詰らない指環だが私しが露國へ行く前に思ひ思はれた紳士が有たの其紳士が又遊ふ迄の記にと自分の家の紋や金言を彫附た指環を呉れたが｜（皺）オヤ紋や金言と云へゝ貴族かエ（松）爾

サ伯爵だよ伯爵の冠物まで彫附けて有るのだよ所が私しが露國へ行て間もなく其紳士が死たから其指環を何更貴く錢金にも代られぬ樣に思ふけれど生憎と私しゝ夫を此國で質に置て行たのだから何うか流れぬ樣にと思ひ年々利子を送ッて居たが今度歸ッてから第一に夫を受出しに行た所外の品と一包にして歸つたから途中で其指環だけ遣して仕舞ひ家へ歸つたから氣が附たけれど最う仕方がない！（皺）オヤ〳〵夫れでも新聞にでも廣告して拾つた者より澤山の禮をするとか何とか云へば（松）爾サ私しも爾したいけれど自分の名前でゝ廣告するとも出來ずと云ふものゝ不思議あともある者で直に其翌日若い男が指環を拾ッたと云て故々茲へ屆けて來てヲ（皺）でゝ受取れゞ好ッたのに（松）所ろが氣味が惡くて受取られないヲ其男が先ア何うして私しの落したと云ふことを知たのか若しや其筋の探偵でもありゝせぬかと思ッたから私しゝ大事を取り其樣な品を落した覺えゝないと云切て遣たのサ」お皺も眉を顰め來り」何の樣な男だッたエ（松）夫がサ自分で逢ずに下女に取次をさせた者だから（皺）でもお前鍵の穴から瞰く位の事ゝしただらう（松）夫をすッかり忘れたのサ後で氣が附て直に窓から瞰いたけれど背後だけしか見えなんだから今でも殘念な事をしたと思ッて思るがヲ併し其風附で若しや此人でないかと內々當りゝ附けて居るが」是よりまあ坊ゝ猶ほ如何ある事を云出んとするや

第四十二回

（皺）でも其心當りの人とゝ誰だ」エとお皺婆が問返すに松あ坊ゝ答へんとして暫し考（「ナニお前の知た人でゝないよ夫に能く考へて見ると矢張り私しの思ひ違ひだ（皺）夫にしても何だか氣味の惡い話しゃやないか拾つた人がお前を知て居て直々に返しよ來るとゝ（松）爾サ、だから新聞に廣告

して見度いと云ふのサ指環の直打い精々で五十法か其所等だけれど私しゝ千五百法までも出して遣る先の夜公園地にて赤印度人に向ひ千法まで附上たれど彼れ手離さゝりし故今度ゝ五百法附增たる者なるべしお婆ゝ打驚き千五百法と云へばお前七十五ル井じやないか其樣な馬鹿〳〵しい値がある者か千（松）イエ少し譯があるのだよお前だから打明て云ふけれど知ての通り隨分私しゝ男も欺したから何所に何の樣な敵があつて私しを附狙つて居まひ者でもない（皺）夫ゝ爾だよ全体お前の綺致が好過るもの（松）綺致ゝ何うでもサ、だから私しの心配ゝ其指環が事に寄れゝ私しを怨む者の手に落たかも知れぬと云ふ者、今千五百法と云ふ褒美を出せば唯の人あら必ず持て來るだらう（皺）夫ゝ持て來るとも千（松）夫を若し持て來ないあらば只の人でゝあい必ず私しの敵と云ふ者で其指環を錢金に代られず夫を以て私しに仇しやうと思ッて居る證據だから私しも用心せ

ねばあらぬ自分の身に暗い覺えゝあいにしろ人と云ふ者ゝ詰らぬ事を根に持て恐ろしい仇をする者だから（皺）夫ゝ爾とも、其所まで考へるとは感心だ、だけれど千エ若し慾に目のない細工人が贋の指環を拵へて千五百法取に來たら何うしやう（松）ナニ其樣な氣遣はないよ何月幾日何處の邊よて遺失した紳士の指環と書て置けば贋の拵へ樣がないじやないか夫に千其指環には煙りの樣な細い字で車を用ゐず馬を用ゐず唯我が足を用ふと云ふ金言を刻附てあッて顯微鏡で見れば能く分るから（皺）好し〳〵夫で若し拾ひ主が持て來てお前の事でも問ふ樣あら一切知ぬと答へ或紳士から頼まれさと言へば好いだらう（松）爾サ其落し主が私しだと云ふ事を知さぬ爲にお前に頼むのだから其積で居て呉れば好い」と是にて話は畧ぼ終りたれば婆は先に直を極たる古着を取り衣囊より百法の金を出し渡さんとするに（松）夫には及ばぬよ新聞の廣告代や其褒美の千五百法をお前に

渡さねばならぬから」と云ふ婆は又百法を渡して自筆の受取書を貰ひ、行ねば長々生の頼みに負くを知るゆゑ「イヱ商賣は商賣で、頼まれ事は又別だから夫を一緒にしては帳合が立たなくなる渡す者は渡して受取る者は別に受取ねば（松）大層規則が八かましいヲでは百法置てお出で別に私しからは廣告代を見積て二千法渡すから（皺）アヽ爾してお呉れ、夫ぢヲ私しには金主があつて自分の商賣とは云ふ者の實は金主の商賣だから此百法の受取も書て貰はねば（松）オヤ〳〵大層面倒臭いヲヱ（皺）面倒でも二行か三行だ譯はないワヲ、爾せぬと金主が疑り深い人で棒先を切たいらうあどゝ私しを疑ふからサ、ナニ金主の外には誰れにも見せはせぬからお前の名前で書て呉ても大丈夫だよと婆は長々より敎はりし通り言廻し終に松あ坊も其意に從ひ卓子に向ひサラ〳〵と受取り書を認めて猶ほ其抽斗より別に百ル井の金を出し之を婆に渡しながら「今日最少しお前を引留たいが貰

はね或彫刻師が是非とも私しの姿を彫み度いと云ひ畫過ぎから其の方へ行く筈だから最うそろ〳〵仕度をせねば此の上長く話して居ることも出來ぬが此次又緩々と（皺）イヱ爾云はずとも私しも猶ほ用事があるから永居ゝ出來ぬなるほどお前の綺倆では彫刻師や蒔工が大騒ぎをする筈だと云ひ是れにて彼の古着を疊み持ち再會を約しつゝ婆は松子に別れを告げ玄關まで出で來りて以前推退けたる下女に向ひ約束の如く五十法の割を與へ其儘茲を立ち出でつゝ頓て彼の長々を待せ置きたる珈琲店の所に至るに長々ゝ餘ほど待ち兼ね居たる者と見え嬉しげに出で來り「首尾ゝ何うだ（皺）大好しだよ自筆の受取まで取て來た（長）だが其の松子夫人と云ふのが已の云ふ通り松あ坊であつたいらう（皺）爾ともヲ他人が行ば松あ坊であいと云ふ所かも知れぬが私しに隱す事ゝ出來ず直に打解けて色々の話しをしたがヲ（長）其話を已等に聞せて貰ひ度が（皺）茲では話も出來ぬ

じやないか私しの店まで一緒にお出で（長）お前の店へ遠過ぎるから直其所の小公園地で好いだらう」とて長々〳〵是より婆を小公園に誘ひ行き人なき所の腰掛を撰みて坐するに婆は松あ坊が露國より歸りさる次第あど詳しく語り且へ彼の受取を出し示して「何うだエ文此字と文の文字と同じ事あヂ」と問ふ長々へ一目見るに全く先に鼻竹より得たる手紙と同筆なる故是あらば三星老人よ向ひ松子夫人の松あ坊あるを證據立るに充分なりと喜びあがら「アヽ是だ〳〵矢張り已への文も松あ坊が自分で書た者に違ひない（皺）だが長さんお前松あ坊に忍び逢ふあら用心せねば了ないよ先の情夫が猶だ松あ坊に就いて居るからお前に何の樣な仇をするかも知れね（長）好し〳〵だが其情夫の就て居る事が何うして分る（賊）私しが行た時其男が玄關へ出て來たから分るはヂ松あ坊へ最う情夫でも何でもないと云ふけれど私しの見た所では昨夜から其男が泊り込で居たのだよ（長）其

男の容貌へ何の樣だ（皺）口でへ充分に言あいけれど隨分好い男だヂエ恐しい立派あ姿をしてサ（長）年へ（皺）年へ三十を越て居るだらうけれど矢張り松あ坊と同じ事で私しが七八年前に見た時と餘り變つては居あい樣だ夫にヂ最一つ怪いのは松あ坊が紳士の指環を捨たから夫を新聞に廣告して呉れと云ふのサ私しの思ふには其指環も矢張情男の品だらう自分では既に死だ人の品だと云ふけれど何しろ見出した者への褒美が千五百法と云ふのだから何か譯があるに違ひない」長々は心の中に含けども其指環の我手にある事へ今より婆に知す可き事にあらぬ〳〵唯無言に控もるのみ婆へ猶語を繼ぎ「お前が松あ坊を横取すれば情夫が怒るのへ目に見て居るよ何しろ松あ坊へ今でへ非常あ金持でお錢を湯水の樣に遣ふから情夫へお前に弗箱を奪はれる樣あ氣がするヲヂ爾だらうよ松あ坊へ五百法もする立派な着物を唯の百法で私しに賣て呉れる樣あ氣前ものだものコレ御

覽あ」と云ひ乍ら彼の古着を長々の前に廣げて見す長々は一目見て忽ち其裳の邊に太き疵のあるを見出したれば心にハッと驚きて「何だ婆さん大な穴が開て居るじやないか」婆ハ初めて氣が附きて「オヤ此ハ先ア大變な大疵だよ私しハお前が待兼るだらうと思ひ急いで撿めた者だから少しも氣が附あんた此樣な好い切地ハ一寸と其類がおし織ふとても織ハ出來ず店へ置ても賣れないよ」婆が驚きて打嘆く此大疵も長々が身に取りてハ千金に代難き寶なれバ「ナニ婆さん其心配にハ及ばぬよ僅か五ル井で買たと云へバ已等が先程お前に渡した廿ル井で此着物を買て遣ふ松ゐ坊とても惡氣があつてお前に疵物を推附た者でハあるまひから今頃ハ後悔して居るだらう」婆ハ二十ル井の掛聲に俄に其機嫌を撿め「夫ハ何より有難いが役に立ぬと分ッた者をお前に高く賣附るハ（長）ナニ他人ハ役に立つ舞ひが已等に取てハ役に立つィヤサ人形を彫刻すれバ是で四五枚ハ着物が出來る彫

ハ惡くても此切の着物を着せれバ着物に目が呉れて買ふ人ハ幾等もある（皺）成るほど商賣〳〵だ子ェ人形の着物にするとハ知なんだ（長）じや廿ル井で買取たよ」と念を推し彼の受取書と此着物を鬼の首より大事にし長〳〵ハ茲を引上たり嗚呼彼何故に此大疵ある古着を珍重するや夫等ハ讀者が疾より承知の事なれバ云ふ丈が管なるべし

第四十三回

長々がお皺婆より受取りたる此着物ハ即ち松ゐ坊が三鋏老人の目を燒潰せし夜纏ひ居たる者にして裳ある穴ハ逃去らんとして戸に挾まれ其時引き切りて行きたる者あれバ松子夫人の罪を糺すにハ之に增す證據ハなし警察に當はへある彼の切と此着物とを比べ見れバ如何ほど雄辨の辨護人にても是を打消す事ハ出來ず又如何ほど慈悲深き陪審官にても無罪の見

込を附ける能はじ長々い斯る確かる證據を得たれば我が目的の早や充分に達せし如き思ひをなし雀躍りしつゝ師匠の家を指し急ぎしが頓て間近くなるに從ひ猶ほ樣々の困難あるを思ひ出し足の運びも鈍るを覺ふ第一此着物を證據とせんにい警察に蓄へある彼の切れを借來らずばならず穴の開きたる着物い幾等もあり殊に僞證を作らん爲め似寄りたる穴を開るも最易き譯なれば一克なる師匠の事とて却ッて我れをば僞證など作る者と疑ばば何とせん切て栗川巡査でも生存へれば彼れに頼みて其切を警察より借來り此穴と合せて見する望みもおきにあらねど彼れ今い此世の人に非ず次に又松あ坊の自筆の手紙とても目の見えぬ師匠に向ていい殆ど何の役にも立たず去ればとて龜子を呼來りて之に鑑定を任すも安心あらず他人にい猶更ら頼み難し何か好き工夫いおきものかと空しく思案を絞るうち遠くもあらぬ師匠の家へ早や歩み着きたれば先づ入口より細工場

を眺むるに今までとい痛く容子も違ひ彼の彫掛けたる義勇兵の石像も當分用あしと云ふ如く布を蔽て姿を隠し鶴子や耕次郎が來りし頃一同の寄合たる卓子も椅子と共に隅の方に片寄せられ塵の積るに任せたり長々は此有樣を見て扨は婚禮の期も近附きて其濟次第スミルナに行く積りあれば早やそろ〳〵と取片付に掛りしか嗚呼我目的も容易に似て容易に非ずと獨り歎息を發しあがら歩み入るに再び長々が目に留るは其中央に二個の椅子を置き宛も又何人かの半身像を作る如く夫等の道具を取揃へ其上摸型に作るべき粘土あども備へある一事あり扨は孰れかより肖像の注文を受けスミルナ行きの留守中に我れに作らせる積なるかと頭に怪み考へ乍らも先づ彼の古着を一方なる長椅子の上に掛け師匠老人は孰れに居るや外に來客などありては秘密の話しに差支ゆれば其居間まで尋ね行かうかあど思ふうち靜に彼方なる戸を開き徐々と入來るは即ち是れ師匠三峯

老人にして其手を引るは龜子が唯一人の伯母なる柳田夫人なり(柳田夫人が此家に來り住へる事は本篇第一回及び第六回に在り)此夫人は即ち老人の爲めには從妹にして早くより寡姉とあり田舍にて女子教育の私塾を開き居たるも今は此家の厄介とはあれるなり尤も幼き頃より龜子に讀書を教へたるも此の夫人なれば老人が目の濃れし以來は老人の秘書官兼家内取締りと云ふべき役目にて甲斐〳〵しく立働らけり長々は二人の姿を見るよりも此の婦人ならば松お坊の手紙を鑑定させ老人に呑み込せるにも屈强と思ふより其の傍に進み寄り先づ夫人には目禮し老人には「先生細工場の樣子が丸で變りました子」と云ふ老人は驚きて「オヽ長々か手前何所へ行て居た昨日から颯ぱり見にず今日ゝ手前に手傳せる事があるので朝から探させたけれど宿にも居ないと云ふからー(長)オヤ爾ですか私しゝ又其樣な用事があるとゝ知らずー(老)朝から居酒屋へでも行て居たのだら

う仕樣ないあァ(長)イヱ其樣な事でゝありませんシタが其御用と云ふゝ(老)手前お用事と云へば彫刻の事より外にはない(長)誰かの肖像でも作るのですか(老)問はずとも手前にや目があるから邊の樣子を見れば分るだらう」と撮と不機嫌の体あれば長々ゝ益々〳〵失望し問返す言葉も出ず(老)今日ゝ三時から輕根松子夫人が來る筈だ(長)ヱ彼の松子夫人が(老)爾サ兼て己が手探りに夫人の像に作つて見度いと云つて居た事ゝ知て居るだらう已ゝ其後も何度とあく夫人に賴み捨苗夫人からも賴んで貰ひ種々樣〳〵に骨折つた其甲斐に夫人は終に承知した三時と云へば最う間もないからサア貴樣も其仕度を手傳て呉れ」長々ゝ腹の裏にて「ヱヽ三時と云へば夫までに松子が松お坊と云ふ事を老人に承知させる暇はない最う大方二時だから」と呟き更に聲を發して「ヘヱ本統に手探りでお遣りなさるのですか(老)本統だとも己は稼業の事に嘘ゝ云はぬ疑はしいと思ふならコレ此手

紙を見ろ今し方松子夫人から寄越したのだ」とて手に持る紙切を差出すに
ぞ長々は受取りて一目見るに難有し其の筆癖はお皺婆が受取りたる彼の
受取書及び松あ坊より鼻竹に送りたる手紙の文字に少しの違ひもあらざ
れば證據の上に更に又一證據を加へたるを打悅び猶ほ其文句を見るに「師
よ先日御承諾せし通り妾の顏ゝ御身の隨意に任せヤさん是にて若し見本
の役に立たば誠に妾の名譽なれば今日午後三時に細工場まで伺ふべし別
に用事とてなき身なれば此後も毎日三時より五時までの間ならば御都合
次第參上すべし月日輕根松子より」とあり今我が持る二通の書類が此書附
と同じき事を柳田夫人の口にて云へば老人も打消すに由なからん松子夫
人の來りし時より直々に他れを攻てゝ徒らに事を荒立るのみにして且ゝ
老人をも立腹せしむる譯なれば假令ひ時間ゝ短くとも先づ老人を說伏せ
て老人の口より松子を攻さするに如くゝ莫しと長々が漸く思案を定むる

うち柳田夫人ゝ長々の氣を知らず「でゝ長々さん老人を頼みますよ私しは
龜子が待て居ますから」と云ひ其身は早既に退かんとす長々ゝ周章夫人を
引留めつ「少しお待なさつて下さい大變なお願ひがありますから」と云ふ

第四十四回

今柳田夫人を立去せてゝ誰か又松子夫人と松あ坊の手紙を比べ其の同人
なるとを三鬼老人に知さんや長々生ゝ斯く思ひて遽だしく柳田夫人を引
留むるに夫人ゝ怪みて「私しに願ひとゝ」と振返る長々ゝ何から先に云出さ
んか其順序さへ定らねば「へエお願ひと云ふゝ其の、へエ手紙や着物や色々
あります」と戸惑ひて述來る夫人ゝ長々の血相まで變れるを見唯事ならじ
と思ひし如く「何ですと手紙や着物とは（長）へエ茲に在る此古着です是ゝ
何と云ふ纖物でせう」夫人ゝ長々が氣の違しかと疑ひながら彼古着を一目

見て「左樣サ荒糸織の單物でせう」と云ひ又も其儘立去らんとす長々い必死になり「了ません了ません猶だ色々とお話しがありますから此儘二階へ入しッてい了ません老人い聞咎めて「何だ長々手前い古着あぞ買ッて來たのか何所かのお轉婆にでも遣る積で馬鹿め女の後など追掛て夫で二日も三日も己の家へ來あんだのか」と叱り附る長々い殆ど左右に敵を受し如くにて「イエ其樣な事じやありません夫も是も貴方の爲です貴方に此不幸を掛た曲者を捕へる爲め警察官を手傳たり方々へ奔走したりー（老）何だ曲者が捕まッたのか（長）捕まる所を屋根へ逃げ辷り落て死ました其事い撮う新聞にも出て居ますが全く敵の片割です（老）フム片割が死で仕舞ッたか屋根へ逃るなど云ふ所を見れば己に寐臺を舁がせた奴だらうな（長）爾です天狗鼻の竹二郎と云ふ奴です」柳田夫人い口の中にて「夫が天罰と云ふ者です」と生徒に説聞せる如くに云ふい猶ほ女教師の癖が抜ぬあるべし老人

は見えぬ目を引開て「天罰と云ふなら己の目を燒潰した女の方が先に死る筈だ寐臺を舁せた曲者も憎い事は憎いけれど己い夫より女を恨む長々未だ其女い捕まらぬか（長）夫い未だ捕まりませんがー（老）エヽ探偵あどヽ云ふ者い仕方のあい奴等だナ己の目を潰した奴い戸に狹ッた着物の切で貴夫人と云ふ事が分ッて居ると云ながら其後の證據い一つも上らぬ己が若し目が見えれば草を分ても尋ねるけれどアヽ殘念だ恩ひ出すと猶ほ殘念だ若し其女が捕まつて見ろ己い其細首を掴み潰し此指で其女の兩の目玉を抉り取ッて其上で嬲殺しにして遣るが」と言ひあがら最悔しげに兩の拳を握り固め唇頭までも怒りに震ふ若し此老人にして眞に其女を捕へ得あば今自から云ふ通り嬲殺しにも仕兼まじ長々い猶言を云ふ如くに「其女が今少しで捕まるけれど」と呟くに（老）其女が捕るだけの何か手掛を見出したか（長）其女から今云ふ鼻竹へ送ッた手紙が手に入ました（老）何だと

手紙手紙なら名前を書てあるだらう其女の名前ハ何と云ふ早く聞せろ」長々ハ既に我目的の達したる如き心地にて「名前ハ唯まあ坊と丈しか書てありませんがー（老）夫だけでハ仕方があいな（長）でも其筆癖を証據にして同じ筆癖の婦人を探せバ（老）手前も矢ッ張り探偵の樣に氣の長い事を云ふ夫を探す中にハ己が最う死で仕舞ふヲ確かに其の女の住所姓名が分れバ格別左もなけれバ再び己の聞く所ろで曲者の話しを仕て呉れるな聞くだけ己ハ腹が立つ（長）イヱ夫れが滿更ら分らぬでもありません斯うして柳田夫人を引き留めたのも夫人に其の手紙を貴方へ讀み聞かせて頂だく爲めです（老）住所も本名も分からぬ手紙を讀だとて何にあるか」と言ひ切れども猶ほ其文句が聞き度きと見え「でも讀だ所で損ハあいあドレ讀で聞せろ」と云ふ柳田夫人ハ長々より受取りて直に讀下す其文「竹や私しもヲ何の苦もあく逃て來たよだがヲお前が寐臺を早で行た後で馬鹿野郎が歸つて

來たよけれどお案じでおい私しが兼て持て居る毒藥で馬鹿野郎の眼を燒潰して遣たから」是だけ聞き老人ハ又怒り「何だ其馬鹿野郎と云ふのハ誰かと思へば己の事に（柳）最う此樣な汚らはしい手紙ハ讀ますまい（老）イヤ〳〵猶だ何の樣な事を書てあるか知れぬ一字も殘さず正直に讀で仕舞へ夫人ハ又讀下す「幾等奴が悔しがつても」今度ハ己を奴と云ふのか」二度とお前や私しの顏を見る事ハ出來ぬから安心してアヲ錢で警察の知らぬ所へ下宿をおし來る水曜日の夜ハ昔の踊仲間を引連れて公園へ來てお呉よ久し振に一杯呑せるから其代りお前も用心おしよ若しアノ事を初め私しの事を他言すれば私にや未だ毒藥の殘りがあるからお前の知らぬ間に馬鹿野郎と同じ目に合せるよまあ坊より」とあり柳田夫人ハ讀終り胸惡しと云ふ如く眉を顰め「貴婦人とも云はれる者が此樣な文章を書くだらうか少しも教育のない人間ですよですが不思議だ何だか此文字は見た事がある樣

で」と言掛る長々は茲ぞと思ひ「見た事がある筈です今師匠が私しへ見せた手紙と見較べて御覧なさい」と云ひ彼の松子夫人より老人に寄越せしと云へる先刻の手紙を差出すに夫人は又一目見て「色を失ひ「オヤ〳〵是は益々不思議だ何う見ても同じ人の書た者だ（長）貴女に爾う見えますか（柳）見えますとも文字だけは全く同じ事です（長）爾見えれば追々分ります違ふのは唯名前だけで一方にはまあ坊とあり三峰老人へ當たのには一」と云ふ言葉の終らぬうち老人は又聞咎めて「手前の云ふ事は少しも分からぬが一（長）分らねば柳田夫人にお聞なさい」と目を持て夫人の言葉を促すに夫人は猶ほ充分に事の意を解し得ずして宛も夢かと思ひつゝも「一方には輕根松子夫人と書てありますが其字と今讀んだ恐ろしい手紙の文字と同じ事だと云ふのです（老）其樣な事があるか夫は長々が欺すのだ（長）是れは飛んでもない事を仰有る両方の文字が同じ事だとは私しが何とも云はぬうちに柳田夫人が獨りで氣が附たではありませんか（柳）爾です私しは書たものを見附けて居ます丈に」と云へど老人は更に承知せず「好し〳〵手前等は二人で目配せして已を欺して居やがるなア、此樣な口惜しい事はないと齒を嚙メめて憤る夫人は流石に女教師もする程の人なれば此疑ひを忍ぶ能はず此方も佶と怒りを浮べ「私しが何で貴方を欺しませう其の疑ひの晴るまで私しは此間を退きます」とて決然として又立ち上れり長々の遺憾想ふべし

第四十五回

長々ハ再び柳田夫人を引留めて「夫人、夫人、茲が大事の所です今貴女がお退きあさつてハ私し一人の力で何うして師匠に合點させる事が出來ませう松子夫人と云ふのハ實に意外な毒婦ですから今其本性を扞かねバ龜子さ

んの身の上にまで掛ます」と我を忘れし熱心に夫人も心を動かせし如く無言の儘にて坐に復せり老人ハ益々怒り「何だ龜子の身の上にまで拘はると馬鹿め松子夫人が何であらふと龜子の知た事じやない（長）龜子さんが知なくても其の身の上に掛るのハ同じ事です（老）云ふな言ふな手前の云ふ事ハ皆證訴だ證據もない事を此老人が信じると思ふのかサア其鼻竹とやらに遣ッた手紙を松子夫人が書たと云ふ證據が何所に在る（長）證據ハ茲に在ますけれど貴方が御自分の目で讀比べる事が出來ぬから困ります柳田夫人にお聞なさい」と此方も今ハ殆ど師弟の隔てを忘れ荒々しき言葉を用ふ夫人ハ長々に賛成して「ハイ書たものだけの所でハ何うしても同じ人としか思はれません（老）馬鹿を云ふな書た者が何の當になる旨く他人の文字を似せて書く人ハ世間に幾等もあるヲ（長）夫にしても是だけハ贋筆でありません貴方に松子夫人が寄越したのハ無論其自筆でせうし鼻竹が

私しへ渡したのハ鼻竹自身に贋などを作る筈がありませんから贋とハ決して云はれません（老）でハ鼻竹を呼で來い（長）夫ハ貴方の無理と云ふ者鼻竹ハ今云ふ通り屋根から落ちて死ました夫でも松子夫人が松ぁ坊と云ふ名前を以て下等極まる振舞をして居る事ハ私しの外に知た者も澤山ありますす殊に私しも松子夫人が初めて此家へ來た其の夜に門苫取の公園で松ぁ坊が大勢の破落戸を手下にして躍つた事ハ確に知ッて居ます松ぁ坊と云ふ賤い女が露國へ行ッて身代を作ッた爲め今ハ立派な貴婦人に化けて居るのです第一松子と云ふも松ぁ坊と云ふも同じ名前でハありませんか」と必死になりて解立れど老人は今まで世にも珍しき婦人ぞと尊ひ居たる輕根松子が我が目を潰せし敵ぞとハ容易に思ひ得ぬのみか目の見えぬ丈け疑ひの心も深ければ確かな證據を得る迄ハ承知せぬも無理あらず「貴様の云ふのハ誰にでも作れる事だ作事で無いならばサア證據〳〵證據が

あければ二度と再び此家へ寄附けぬぞ（長）證據い色々とありますよ第一栗川巡査も此家で初めて松子夫人を見た時に顔が松あ坊に其儘だと云ひました（老）其樣な事を誰に云ふた（長）私しに（老）でい栗川を呼んで來い（長）栗川い鼻竹を捕へる時一所に辷り落て死ました（老）何だァノ栗川が死だとな貴樣の證人が皆死るとは不思議ぢやないか、死だ人の名を數へ上る樣あ無駄事を止て仕舞ひ何でも好いから己に分る證據を出せ己に分る證據とて目の見えぬ人に分らせるい最難き事なれば長々い殆ど持餘して見えたるが忽ち思ひ附くとありて宜しい長い短かい爭ふ事いありません松あ坊い横傷の松あ坊と綽名される位の女で左の頰に横傷がありますよ（老）でい益々松子夫人と別人だと云ふ證據じやないか夫人の頰に其の樣な傷があるとい誰も噂をした者がおい（長）所が夫人の頰にも夫れがありますよ夫人い化粧術を心得て居ますから巧みに白粉などを附け其の傷を

隱して居ますけれどあるとは確かです幸はひ貴方は夫人の像を作る爲め其の顔を探りますから其時能く氣をお附あさい目には見えねど指先には必ず接りませうから初て老人の意に落る樣に云得たれば老人も少し滿足の樣子にて好し是は面白い今に來るから其時には念を入れて探ッて見やうだが待てよ否々嘘だ〳〵夫人に其樣な傷があるなら已に其顔を探らせる樣な約束をする筈がおい是だけで最う探らずとも傷のないとは分ッて居る（長）爾でありません貴方が達て夫人の肖像を作り度いと云ふ者だから夫人は貴方を喜ばせる爲めに已を得ず承知したのです夫に又貴方が横傷の松あ坊を知て居やうとは思はぬから縱んば貴方に其傷を知れた所で何の差支はありません論より證據です來るのを待てお探りなさい（老）探るとも其代り覺えて居ろ愈々已の思ふ通り夫人の頰に傷がなければ貴樣こそ汚らはしい嘘突だから以後弟子でもおく師匠でもなく已の家へは寄

附けぬぞ（長）夫は固より承知です」と長々は堅く受合たるが隨分浮雲き仕事と云ふべし松子夫人の左の頰に横傷のありしには違相なきも夫は七八年前の事なり如何なる傷たりとも年を經て癒えぬはなく殊に松子夫人の傷と云へるは今度歸りてより何人の目にも見えず捨苗夫人の客間にて長々が穴の開くほど眺めし時も全く傷なしと思ひ詰め夫に又松子を能く知たるお皺婆までも全く傷の隱れしに驚きし程あれば今日猶ほも老人の指先に障るほど凹み居るやは甚だ覺束あし若しもや年の効にて肉上り指の掛らぬ程に癒たらんには長々は老人を説伏るに又一入の難儀を被るから傍に居る柳田夫人も斯く氣遣ふものと見え頻りに其眉を顰めぬ知ず此結果は如何に成行べき

第四十五回

長々が畢生の願ひ唯だ老人をして我言葉の半分をも信ぜしめたしと思ふに在れど何分にも老人が松子夫人を我が敵と思ひ得ず幾度が長々の言葉に合點せんとしてが又後戻りし「イヤ〳〵嘘だ虚だ先ア考へても見るが好い夫人が眞實己の目を燒潰した曲者ならば己に恐れて逃げころすれ此家へ出入する筈がない夫も一度が氣が附かずに來やうけれど既に己の目潰れた次第を知る上が二度と足踏せぬ筈だ夫が屢々尋ねて來るのみならず己の機嫌まで取ると云ふが身に其樣な覺えのない證據じやないか」と斷然として言切りつ復た動くべうも見えざれば長々は猶ほ語を進めて「イエ松子夫人が幾度も此家へ尋ねて來たのが外に仔細があるのです夫等が追々分りませうが兎に角も今柳田夫人に讀で貰つた二通の手紙で貴方が未だ胸に落ぬと仰有れば私しには又別の証據もありますと云ひ衣裳を探りて彼の受取書を取出し「柳田夫人何うぞ此書附も讀で下さい」と差示すに夫

人ゝ一目見て「オヤ是ゝ手紙ではなけれど書人ゝ矢張り同じ人です筆癖が一切です」と云ふ老人ゝ聞耳立て「フム手紙でなければ何の書附だ（柳）代金受取りですよ文句ゝ金百法也荒糸織の單物古着を賣渡したる代金として お皺殿より受取る者なりと書てあります（老）シテ其名前ゝ（柳）ハイ是には貴方へ寄越した手紙と同じく輕根松子と書てあります（老）輕根松子と書てあれゞ夫が何だ松子夫人だとて隨分着古した被物を拂ひもするだらうしやないかェ長々手前は何の證據に此樣な書附を持て來た（長）ヘイ此書附だけでは別に何事もありませんが此書附を手に入れ〻次第を聞けば松子と松あ坊と同人と云ふ事は少しも疑がひがありません（老）夫は何ういふ譯で（長）イヱ此の皺婆と云ふのは兼て松あ坊と怨意にしたと云ふ事ですから私しは松子が松あ坊であるかないかを見極める爲め婆を頼みて松子の屋敷へ遣たのですスルト松子夫人は婆にまで我が身の上を隱す事

は出來ず昔の通り打解て一別以來の話をしたと云ふ事です夫に此書附は私しがアノ鼻竹に貰ッた手紙と筆蹟を比べる爲に是非取て來て呉れと頼んだのです（老）貴樣のする事は探偵より能く行屆く手際過て眞事とは思はれぬが（長）夫をお疑ひなさるなら私しがお皺婆を呼んで來ませう婆は古着商で未だ鼻竹や栗川巡査の樣に死にはしません生て居ますから何時でも茲へ來て其委細を話ます松子夫人が婆に話した事の概畧を聞けば何の樣な疑ひでも解けて仕舞ます是から行て直ぐ婆を呼で來ませうか老人は急に返事も出ざれど追々の證據を聞き漸やく疑がひ初めしと見え次第に其の顏色まで變じ來れり（老）待よ此家で彼れ是れ騷いでは龜子も居るから好くないテ本統に其の女の罪が分ッて呉れゝばなァ已は先程も云ふ通り握み殺して呉れるけれど」と云ふ今は半信半疑を既に過て大方長々と同じ心にまで推寄せしあり（長）此女の罪は明白に分ッて居ますよ猶ほ貴

方には話さぬ事が澤山ありますが貴方はアノ犯罪の夜彼の家の戸に狹まり貴夫人の被物が切れて殘ッて居たと云ふことをお忘れにいなりますまい（老）何うして夫れを忘れる者か（長）でい私しが茲へ持ッて來て居る荒糸織の單物を柳田夫人に檢めて貰ひませう是が則ちお皺婆が松子夫人より買取た着物で戸に挾まれて破れた穴がありますから」と進み出る此最後の證據にい如何に頑古なる老人も其心を翻へさゝる能はず「ヤヤ何松子夫人お皺婆に渡した其着物に破れた穴が開て居るとなドレ〳〵已に探らせろ已にドレ」とて兩の手を差出し老人い探りながら宛も恐ろしさに堪へざる如く其聲までも震はせて「あるほど變だ引破つた穴がある夫あら愈々アノ松子夫人が長々己の目を燒拔た曲者が今に茲へ遣て來るから見ろ！」柳田夫人も同じく身震ひし「老人私しい茲に居て其樣お汚らはしい夫人に顏を合せるも否ですから御免蒙つて最う二階へ行きますよ（老）行け〳〵已

にアノ樣お夫人を警察へ連出して我家の名を汚すが否だから旨く處分する工夫からして定めて置かねばだがナお前二階へ行ても此事を一言でも龜子の耳へ入れていあらぬよ」と堅く命ずる老人の言葉を聞き終り夫人い早や二階へと上り去れり後に老人い長々に打向ひ「已が思ふにい何よりも近道いお皺婆を茲へ呼で來て松子夫人に逢せるが一番好らうと思ふ不意に逢せれい兩方とも驚いてドキヤキするから必ず疑はしい所が分る（長）夫い爾ですとも婆を呼で來て貴方が直々に松お坊の話を聞き其上松子夫人に突合せれば充分貴方に合點の出來る樣に分りますよ（老）でい長々手前い今から直にお皺婆の許に行き婆を呼迎へて來て呉れろ爾う斯うする內に松子夫人も遣て來るからサ直に行つて呉れ直ぐに〳〵」と長々を迫立る其聲の猶ほ終らぬうち細工場の戸の外に最優しき女の聲あり「這入ても好う御座いますか」と問ふい是あん確に輕根松子夫人なり他れい我身の苦

何ある目に逢さんとするを察し得ず其顔を探られん爲め約束の如く老人を尋ね來しなりア、飛で火に入る夏の虫此場ゝ如何に治まるや

第四十七回

松子夫人ゝ我身が敵として狙はれ居る事を知る由なければ此方の案内も待たずして優然と入來り口許に笑を含みて三峯老人の傍に寄る此時夫人は長々の茲に在るを見殆ど他人には分らぬほど薄く顔色を變たれど直に取直して長々にも友達に與ふる如き笑を與へたり老人は此足音を聞き杖を便りにして立上る彼れが顔にゝ今まで怒りたる色も消え日頃よりも更に柔和なる景容を現はせども心の中ゝ如何にあるべき今あろゝ我目を潰せし敵を捕へ其嫌疑を糺せし上樣子に由りてゝ生涯の怨をも晴し呉れんとの決心なれば胸の波のみ高かるべし「オ、夫人か好く來て下された」と挨拶する聲にまで何處となく怨を帶て聞ゆるゝ唯だ長々生の心の僻みなるべきか長々ゝ腹の中にて「夫人が何うか樣子を悟らねば好いが」と只管に祈るのみ夫れど夫人ゝ神に非ず如何で樣子を悟るべき麗はしき聲音にて「實ゝ直に二階の龜子さんの室まで行うと思ひましたけれど細工場の中で老人のお聲が聞える樣に思ひましたから一寸と御挨拶だけ仕てと思ひ此通り這入て來たのですよ（老）イヤ夫ゝ却て結構です最う追々に日も詰る頃ですから早く初めぬと夜に入ます初ての日ゝ何うしても長く掛ります からサア夫人直に雛形を作る事に取掛りませう（松）ですがせッせと歩て來まして私しゝ息が切れて暫し龜子さんの室へ行き休で來るまでお待なさつて頂きませうナニ十分間とは掛りません（老）イエ夫人龜子は未だ化粧も出來ませんから（松）ナニ貴方私しに逢ふに化粧が入ますものか茶谷さんに逢ふのではなし夫にテ先日約束してありましたから今日は露國の

流行歌を二三枚寫して來ましたよ一寸と夫を渡して來ませう」と早や立に掛らんとすれど老人が心は既に疑ひの滿々て一刻も早く夫人の顏を探り此疑ひを晴さずば自ら落着かざる場合ある故「イヱ後でお渡しおされば好い今は唯だお顏だけ探りまして大凡の見當を見る丈ですからサヽ長々早く夫人をお据らせヤしなナニ大凡の當が附けば猶だ長々に買に遣る品物もありますし其間に緩くり龜子の室でお話しおさるが好い本統の雛形には其後で取掛ります」と云ふ長々は師匠が我を買物に遣ると云ふは則ちお皺婆を呼び來れとの心あらんと悟りながら無言の儘にて先づ其言附の通り夫人を見本の臺に据らせ「なるべく身体をお樂にして顏を少し前の方へ突出す樣な句配に」と宛る寫眞師が客の身姿を差圖する如くにするに夫人は其言ふが儘に身を搆ゆ（長）サ老人身搆が出來ました（老）爾か爾かドレ〳〵」と云ひながら老人は手を延して夫人の顏を探り初む長々も氣が氣に

非ず此試驗は遂に如何なる事になり行くべきやと老人の指先のみ眺むるに老人の指先づ前額の邊より探初め漸く頰の邊に下らんとするに夫人は思はずも發する聲にて「アレー」と叫ぶ老人は驚きて「オヤ何うか致しました か（松）イヱ何も致しませんが何だか搭感たくてッイ聲を出しました」老人は再び探りに掛り「なるほど鼻は希臘形と違ひ本統に私しが夢にまで見た搭好です口許が締ッてと耳は少し小形の方で分りました分りましたドレ頰ハフム此頰ハ昔しミカエル、アゼンロの刻んだ美人ともまた違ひあるほど美人の本相が備つて居ます」と言掛て老人ハ宛も指先を燒痛せし人の如く急に其手を引きたるが再び又差延まして「ハテお茲に少し凹んだ所がありますなフム是ハ確に古疵だ夫人貴女の頰にハ横に古疵がありますか」此無遠慮なる問に逢ひ夫人ハ殆ど顏色を變へつゝも「ハイ是ハ幼い頃椽側から落まして（老）爾ですかてハ矢張り雛形も此邊を少しばかり凹ませて置ま

せう」と云ふ夫人い熱心に「十四五の頃までい目に立つほどの痕になつて居ましたが今でい鏡に向つても自分にも分らぬ程ですから故々雛形の頬へ疵を附るにも及びますまい尤も私しい爾思ひますが夫とも目に見える程の疵ですか」と長々に向ひて問ふ長々い突然の事とて少しまごつきいしたれども「イエ貴女の頬に横疵のあらうとい今まで少しも知りませんでしたと答ふ横疵の一言い極めて耳障りなれば長々も直ちに我言葉の辻りしを悔ひたれど其甲斐なし（松）此方にさへ見えぬ程なら愈々雛形の頬へ疵を附けるにい及びますまい」老人は些細の事を爭ふ時に非ずと見て「ハイ人の目に見にぬ程なら勿論附るに及びません」と云ひ静に其手を引去るに（松）最う探り丈け濟ましたか（老）ハイ濟ました是から本統の雛形に掛ります から長々を同業の所へ一つ道具を借に遣り私しは粘土を練りませう龜子にお逢なさるあら此間に逢て來つしやい（松）では直に二階へ行き降る時

には龜子さんと一緒に來ませう（老）イヤ龜子が傍に居ては私しの心が散ります必ず貴女お一人で（松）では爾う致しませう」と云ひ長々と老人の顔を見る其樣子にて察すれば松あ坊は早や既に老人に横疵の事を知れてより一種の疑ひを起せしに似れば長々は腹の内にて「エヽ老人は此松あ坊が目から鼻へ抜る樣な利發な女と云ふ事を知らぬから仕方がない疵がある と分ッても無言て居れば好いのに根を推して問ふた爲め大概曉られて仕舞た樣だ此女最う再び此家へは足踏をせぬ積りだらう」と呟けり夫人は立ちてでは裏階子から上りますよ是を上れば直ぐ上が龜子さんの室でせうと云へど容易に上り行く景色はなし何げなく見せ掛けて壁に掛けたる繪額あど眺むるは我が逃道を搜す者か左なくば何か老人が確に我身を疑へるや否やの所を突留んと思へるなり長々は夫と察し先ほど持來りし證據の古着を其儘長椅子に掛け置きたる我が不注意を後悔し彼の古着を夫人

の目に見られてはと獨り心を痛むる中に夫人は隈なく室中を見廻して充分に彼の古着を認めたり認めて忽ち顏色を變たれど逃もせず問もせず唯だ長々を振返りて彼れが腹の底まで見拔んとする如く其顏を佶と見る長々は眞實の探偵者にあらぬ悲しさ見られて平氣に濟す能はず當惑の色隱さんとして自から現れたれば松あ坊の鋭き眼は唯是れだけにて何も彼も見拔しあらん去れど他れ何氣あく「ドレ早く龜子さんに逢て來ませう」と云ひ其儘階段を上り行ぬ

第四十八回。

松子夫人は二階へと登り去り今は其足音も絹服の音と共よ聞えずありぬ耳を澄して聞居る老人は發狂せしか氣拔せしか將た我が心を失なひしか「ア、」と一聲凝し居たる息を洩して突と立上り三歩四歩階段の方に跫跟

き行く長々い浮雲あしと直ちに其肩を取留て「貴方は何をなさる」と問よ老人初て我に歸りオヽ爾だッた貴樣が猶だ傍に居たか已は婦人の足音に聞惚れて貴樣の居る事を忘れて居たと云ひ又深き息を吐く其樣實に異樣にして離魂病者が夢の中に徘徊するに異ならず（長）貴方能く心を落着ねば何の樣あ間違ひをするかも知れません（老）ィヤ心配するあ落着て居る落着て居るサ貴樣は早く行て仕舞へ（長）行て仕舞へとはお皺婆を迎へに行くのですか（老）ア、爾だお皺婆を迎へに行くのだ婆と突合せて已が夫人を尋問する（長）婆と突合せた所でアノ樣な夫人ですから大膽に知ぬと言張り立腹の体に見せて此樣あ所に居るは汚はしいと云ひ立去て仕舞ますよ（老）ナニ立去ふとて立去らせぬサア行け行かぬか（長）行けと仰有れば行きますがー（老）行け早く（長）でもアノ松あ坊を巡査にでも引渡しますか（老）ウム巡査に引渡す（長）此家で松あ坊が捕縛されたと云へば貴方は

固より龜子さんの名前に掛り世間の噂になりますが何所で捕縛させるのです（老）何所でゝも捕縛させる早く行けサ早く」と只管に迫立る其樣子全く日頃の三峰老人に非ず何所とおく安心し難き所あるにゝ長々ゝ心の中にて「アヽ師匠ゝ全く氣が違ッた傍に己が居て遣ねバ何の樣な事を仕出來すかも知れぬ」と未だ呟き終らぬうち老人ゝ心の怒を制し得ず大喝一聲よ「己の言附に負くのか早くお皺婆を呼びよ行け」と叱り附る長々ゝ己むを得ずイエ是から行きますが私しが婆を連て歸ッて來るまで松あ坊が居るか居ないか分りませんよ貴方にゝ見えますまいが今松あ坊が二階へ上つた樣子で見れば充分疑ひを起して居ますから私しの留守の間に逃げて仕まうかも知れません（老）逃してゝ大變だ此室の出口と玄關へ錠を卸し其鍵を持て行け鍵があければ逃るにも逃られぬ（長）宜しいでゝ直に行て來ますが先づ貴方を椅子の所ろまで連て行て上ませう（老）夫に及ばぬ己ゝ此通り

杖があるから案内を知た細工場でゝ獨りでも不自由ゝせぬサア行け」と又迫立られ今ゝ長々も猶豫ならず殊に一分一秒の手遲れにて大事を過まるも計られぬ場合なれば「好しく」お皺婆に突合せ松子の面の皮を引剝た上茶谷立夫に關係のある事まで已が白狀させて呉れる」と腹の中に思案を極め其儘茲を立出て先づ間の戸に錠を卸し次には其外の逃路と思はるゝ所を悉とく鎖し置き其身ゝ一散に走去りたり老人ゝ立し處にて長々が卸す錠の音を聞き盡し其走去りたる足音まで確めし上にてグッと身を引延し て見えぬ目を張開きつゝ「サア大復讐の時が來たぞ彼の惡女を殺して遣るエヽ殺さずに置くものか」とて齒をギリ〳〵と嚙鳴せしが頓て徐々と壁に寄り探り〳〵て今し方松子夫人の上り行たる階段の許に立ちたり「茲だ茲より外に降て來る所はないと云ひつゝ其杖の一端を取り力を極めて引拔くに中より出る一物ゝ夏猶ほ寒き九寸五分あり昔し西國の婦人が肌身を

たらんには直ちに立歸りて此匕首を奪ひ取るべきに彼知らざるは是非もなし斯て老人は打聞くと凡そ二三十分にも及びしならん此時の靜なる事は譬ふるに物もなし其間に日も追々に暮れ掛り寂寞たる細工場は陰氣一層の陰氣を添ゆ鬼氣人に薄るとは斯る場合を云ふなるべし去れど老人の心に燃る怨みは其待遠さの增すに從ひ益々募り今は顏色さへ血の氣を失ふ此時初めて老人の耳に入るは階子段の物音なりサワ〳〵と摺來る絹服は擬ひもなし先程登り行きたる松子夫人の服の音なり老人は又身を引延べ「サア松子だ此惡女め天罰を受けに來るな」と呟きぬ降來る松子は此有樣を知るや知らずや

第四十九回

二階より降來る絹服の音ゝ足音と共に靜に近づき終に階段の下に鎖せる

狹き戸を開きたり已れ曲者待搆へたる老人ゝ先づ松あ坊を充分己が前まで出來らせる爲二足ばかり引下り次に左の手を差延れば嬉しや松あ坊ゝ我前に在り延べたる手前ゝ彼れか絹服の肩に接りぬ壁立させていならじと思ひ有無をも云はず其細き喉首を握み〳〵たり他れが七轉八倒の苦みも叫ぶに由なし助けを請ふに由なし老人ゝ怨みの刃を上げ來り力を彼れが胸の邊を刺透すに固より狙ひの外るべくもあらず唯一突に仕果たり「アヽメた」と老人ゝ聲を發し喉を握りし手を放すに松あ坊の死骸ゝ恰も立木の仆るゝ如く老人の足許に横たはれりァヽ老人今までゝ唯だ腹聲の一念に我身も忘れ世間も忘れ一切の事總て忘れ居たるも死骸の仆るゝ音と共に其忘れ居たる事どもを忽ちに思ひ出せり人殺しと云へる言葉ゝ聞くさへも恐ろしきに自ら人を殺せしとありてゝ誰か又恐れざらん增てや三墨老人ゝ心水の如く清くして平生更に惡念なく唯一時悔しと思ふ一心より

放さず持居たる懐劍も是にい勝らじ鍛えに鍛えたる切味い是れ老人が我仇を殺す時の用意にと目の潰れし以來隱し持てる品ありとぞ此九寸五分を思女松お坊の生血に染るも今一時間の中にあらん

夫れ彫刻の術と云へるい最も清く最も高く又最も古き美術にして其かみ希臘人より傳はり今も猶ほ襲れたる人の手に落ず其故い之を事とする者常に昔の英雄を手本とし君子聖賢を座右に置き親く其言行を推想ひ其風采を胸に描くより心自から高くなり假令ひ沐浴齋戒せざるも一切の邪念に遠かる爲なるべし殊に三峯老人の如きい俗塵深き巴里の市内に育ち都人士の氣風に染たりとい云へ猶ほ朴訥なる一野人なり心飽く迄も剛毅なるのみかい身の作りも亦頑丈にして一たび鑿を手にして大理石に臨む時い怒りたる石工も及ばぬ程に力を極め難きを見て難しとせず一心不亂よ業を勵む能く人を愛し又能く人に親めども所謂る善惡共に強き者にて一

旦其人が我に偽りあるを覺らば寸も借さず厘も容さず我身を碎きても亦其人を碎かんと、す彼れ猶ほ茶谷立夫が偽りあるを知り得ざれど既に松子夫人の偽りあるを會得せしかば其怒りの最強きも怪むに足ずと云ふべし彼が怒りたる心の裏血走りたる眼の表今は龜子もなし我身もなし一念唯だ復讐に凝固り人を殺さば我身が罪人として法廷に引かるゝにも心附ず我が捕はれし後にて娘龜子が如何ほど歎くべきやと云ふ事をも顧りみず只管よ松子を刺殺さんと思へるあり長々を出し遣りしも之が爲なり松子に龜子を連ずして唯一人降來れと言たるも之が爲なりア、彼が其身を過る刻限は次第々々に近くなりぬ彼れ宛も古への復讐者チミセスの石像の如く階段の下に立ち動きもせずに唯だ階段の物音を親ふのみ九寸五分の匕首は隱して背後に廻しさる彼れが手先に堅く握れり彼が一生の運命は唯此一轉瞬の間に在り若し出行きたる長々生にして露ほども此有樣を知

たらんには直ちに立歸りて此匕首を奪ひ取るべきに彼知らざるは是非もなし斯て老人は打聞くと凡そ二三十分にも及びしならん此時の靜なる事は譬ふるに物もなし其間に日も追々に暮れ掛り寂寞たる細工場は陰氣一層の陰氣を添ゆ鬼氣人に薄るとは斯る場合を云ふなるべし去れど老人の心に燃る怨みは其待遠さの增すに從ひ益々募り今は顏色さへ血の氣を失ふ此時初めて老人の耳に入るは階子段の物音なりサワ〳〵と摺來る絹服は擬ひもなし先程登り行きたる松子夫人の服の音あり老人は又身を引淫へ「サア松子だ此惡女め天罰を受けに來さな」と呟きぬ降來る松子は此有樣を知るや知らずや

第四十九回

二階より降來る絹服の音ゝ足音と共に靜に近づき終に階段の下に鎖せる

狹き戸を開きたり已れ曲者待搆へたる老人ゝ先づ松ゝ坊を充分已が前まで出來らせる爲二足ばかり引下り次に左の手を差延れば嬉しや松ゝ坊ゝ我前に在り延べたる手前ゝ彼れか絹服の肩に接りぬ壁立させてゝならじと思ひ有無をも云はず其細き喉首を握み〆たり他れが七轉八倒の苦みも叫ぶに由なし助けを請ふに由なし老人ゝ怨みの刃を上げ來り力を彼れが胸の邊を刺透すに固より狙ひの外るべくもあらず唯一突に仕果たり「アヽ〆た」と老人ゝ聲を發し喉を握りし手を放すに松ゝ坊の死骸ゝ恰も立木の仆るゝ如く老人の足許に横たはれりアヽ老人今までゝ唯だ腹讐の一念に我身も忘れ世間も忘れ一切の事總て忘れ居たるも死骸の仆るゝ音と共に其忘れ居たる事どもを忽ちに思ひ出せり人殺しと云へる言葉ゝ聞くさへも恐ろしきに自ら人を殺せしとありてゝ誰か又恐れざらん增てや三翌老人ゝ心水の如く清くして平生更に惡念なく唯一時悔しと思ふ一心より

氣も轉倒し殆ど發狂せしと同じく何も彼も打忘れて殺したれば一念我に復ると共に我身の恐ろしさに堪へ兼て熱き溜息を吹きあがら血に塗れし九寸五分まで投捨たりアヽ我い人一人殺したりと思へば我身を置くべき所もおし若し目の見ゆる人ありせば此無殘なる死骸を見忽ち血迷ひて逃出すべきも老人は逃出す事も叶はず目に見えぬ血の色を心に描きて動きもあらず叫びもならず唯立すくみて身を震はすい恐しさの爲め針附にせられしかと怪しまれ心に燃たる怨の火も今い血潮に洗ひ消さるたる如くなり怨みの一念消ゆると共に後悔の念い愈々強く我身を責む「アヽ已の身い人殺の罪に汚れたか虫一つ殺さぬ男が茲に待伏して首を握つて其手で彼の九寸五分でアヽ何うしても人殺だ先い是で何の樣あ言開きのあらうも知れぬ者を其言開きの出來ぬ樣出し拔に喉をメめ欺し打ちよ殺したといと唯一人口走しが思へば思ふほど益々我が罪の深きを知る松あ坊を我

が當の敵とい今まで堅く思ひ詰しも其證據とては唯だ長々の言葉のみなり若し長々か我を欺きたらんにい何とせん縱や長々い欺かずとも長々が確に證據と認めたる其證據が間違ひならば何とせん裁判官さへ誤りのある者を目の見えぬ此老人が一言も相手の言葉を聞かず唯頬の疵のみを探りとして直に彼の美くしき松子夫人を我敵と思ひしい何事ぞ松子夫人に苦し罪なくば我身あろは天地の容さぬ大罪人あり縱し又松子に罪あるとも私しに殺すい人殺しなり三峰老人い人殺し龜子の父い人殺しと世間の人に言るれば龜子の辱かしめは幾許ぞ今となりては自殺して此世界を逃るゝより外はなし自殺は易き限りなれど龜子の身の上を如何にせん人殺しの娘てふ恐ろしき惡名は生涯彼れが身に纏はん思へば我を怨らせて松子を殺させし其の人こそ怨めしき限りなれと老人は泣きつ悔みつ今は立つ足さへ定まらず开を支へん爲め蹌踉きながら寄り行きて横手の壁に身

を持せば靜かなる細工塲に微かに聲あるは何の音ぞ切り口より迸しる血潮の音と聞もれば俄に又身の邊の血腥き心地せらる逃去りても若し彼の死骸に躓かば何とせん老人は口續に「何うすれば何うすれば」と叫びしも思案あし今にも長々がお婆どやらを引連れて歸り來らば其時あそは遁の盡あり長々は我に面じ此事を隱すとするもお婆は隱す筈なし驚きて警察に訴へん我は龜子の目の前にて繩に掛て引立られん一時發狂の業と云ふも誰か又信ぜんや長々の歸る迄に此死骸を片附んにもアヽ目の見えぬ我一人如何で片附ると叶はん聲を出して人を呼んか呼ばゝ龜子が降來りて此有樣に氣絶せん是を思ひ彼を想ひて老人の腦髓ゝ再び攪亂れ行かんとす今ゝ自殺の一方なり好し好し我れゝ壁に此頭を打碎きて死んのみ老人ゝ既に斯よと見えたるも又新しき思案を浮べぬアヽ死ゝ易し何時にても出來る事あり死ぬ前に松子夫人が既に事切れしや否を見屆けずば成ら

ず猶ほ虫の息の存するならバ介抱の見込無き迄も醫者を呼びて相當の手當すると切てもの罪亡しあり手當もせずに犬猫同樣に捨置て夫が爲に助る者を殺したりと云れてゝ我れ死すとも猶ほ心に負く先づ他の身体を探り見ん猶ほ玉の緒の一脈を繫げるも圖られずと茲に心を取直しつ壁を離れて床に這ひ手探あがら死骸の方に近くに漸くにして手先に接るゝ長く散亂きたる亂れ髮あり此髮の毛を便りとして頭まで探り行き老人ゝ又忽ち震ひ上れり「オヤ〳〵」松子夫人ゝ先刻己が其顏を探つた時確かに帽子を冠つて居たが此死骸にゝ帽子が無いハテなイヤ帽子ゝ倒れる時に飛だのだと」云ひ更に手を延て顏を探るに先ほど探りさる相貌とゝ何とおく違ふに似たり此時の老人が心の恐れゝ殆ど營ふるに物もなし「イヤ〳〵」爾でおい違ふと思ふゝ心の所爲だ松子夫人の顏にゝ横疵があるから直に分るアノ疵ゝ爭はれぬてドレ」と云ひ隱なく顏を探り見るに疵らしき者一つもな

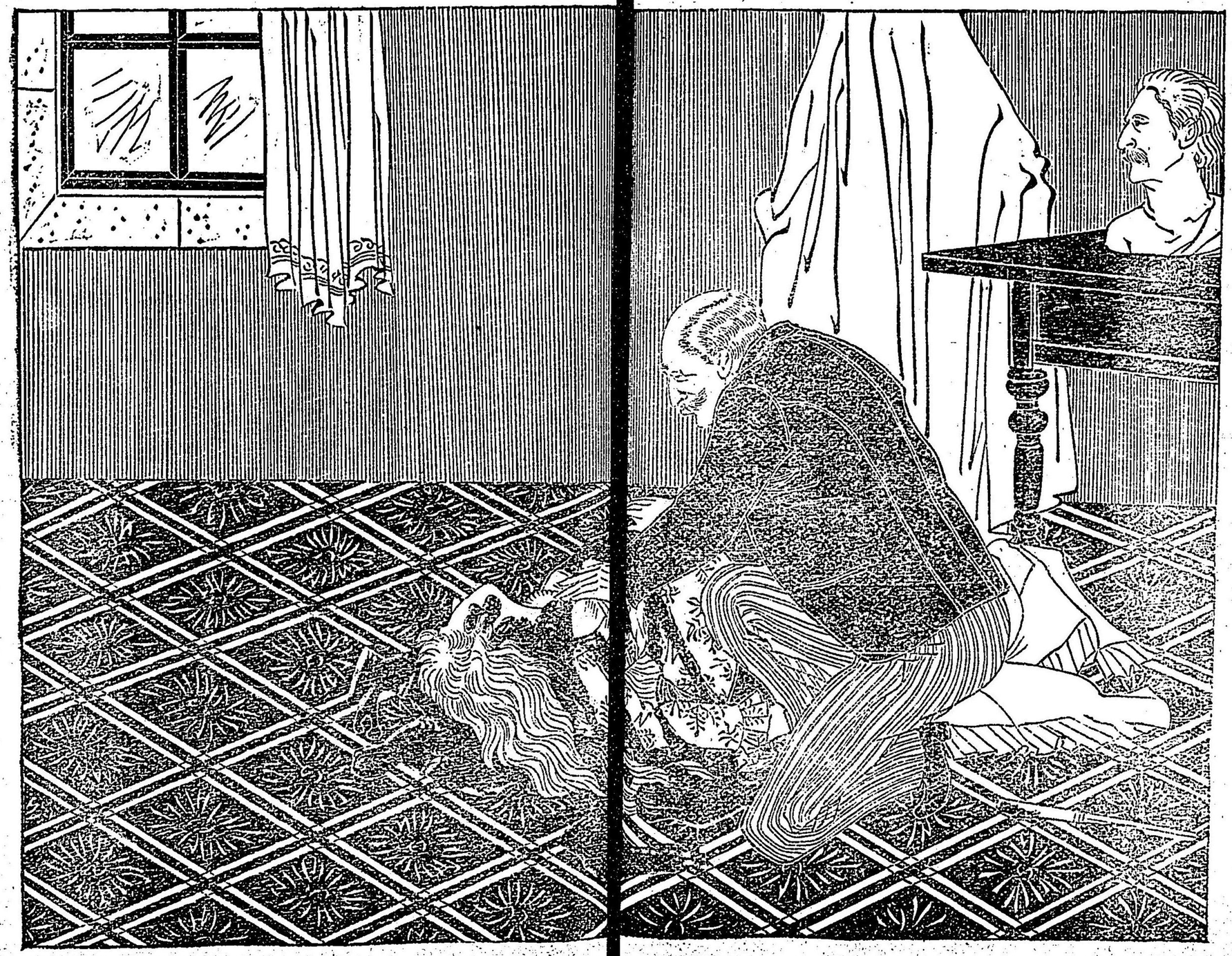
し老人ゝ踏返りて「ヤヤ是ゝ何した松子夫人の顔とゝ違ふがココレ私に殺されさお方お前ゝ何方じや」嗚呼嗚呼譯者も妹に至て筆進まず

第五十回

松子と思ひて殺せし女松子に非ず誰ぞ三墨老人の心にゝ若しやと思ふ疑ひあれど其疑ひを思ひ出すさへ恐しく誰と一思案を定め得ず其身ゝ驚きに跳返りて尻居に撞と倒れし儘起上る勇氣もあく人を呼ぶ心も出ず再び手を差延て横疵のあき顔を探らんにも總身唯だ恐ろしさに凍えたりとも云ふべきか差延る手も延びず此時若し猶ほ九寸五分の我手に在たらんにゝ猶豫もなく我が胸を刺貫て此恐しさを逃るゝ所あれど九寸五分ゝ孰れへか投捨たり暫しが程ゝ胸に轟く我が動悸の音に叱らるゝのみなりしも良ありて氣を取直し「イヤ〳〵矢張り已の思ひ違ひ松子だ松子だ松子の外に此室へ降て來る者ゝない呉々も一人で降て來いと言附て置たから爾々柳田夫人も降て來ぬ龜子も勿論一人でゝ降て來ぬ已の探り樣が足らあんだ能く探れゝ彼の横疵があるに違ひあい」斯く云ひて再び其手を差延べしかど容易に其顔にゝ障り到らず先づ髮の毛に手を掛るに其柔らかきと絹糸の如し「斯う已の手に縋れ附く所ゝ何うしても鬼えのある髮の毛だエヽ松子でゝあいのかなァない〳〵外の女だ此締れ具合は宛でーエヽ情けない悔しい」と探り終らずして泣叫ぶ老人ゝ此死骸を誰の死骸と思ふにや斯る時しも表の戸を外より推開く音の聞えしかば老人ゝ又驚き「最う駄目だ長々生が返ッて來さお婆どやらが此有樣を一目見れば他人の事とて無言て居ず警察へも訴へるだらうがーイヤ夫にしても長々の目で見れば殺されさ女が誰と云ふ事ゝ分る一刻も早く夫が分らねば猶ほ更心配に堪へぬから」と呟くうち長々ゝ唯一人にて入來り「先生生憎にお婆ゝ家にも店

にも見えませんの貴方がお待兼だらうと思ひ取り敢へず引返して來ました
が」と言來りて忽ちに老人が血塗れたる女の死骸に寄添るを見「ヤヤ何事か
出來たのですか」と言ひ一歩老人の傍に進み死骸の顏を見るよりも「ヤヽ是
ハ亀子さんが何うかしたのですか」と驚き叫ぶ兼て疑ひし事とハ云ハ亀
子の名を聞き老人ハ魂消る聲にて「エヱ長々何と云ふ此女が亀子とか（長）
ヘイ亀子さんです（老）殘念だ殘念だ己ハ亀子を殺して仕舞た」と我を忘れ
て泣くも道理（長）ヱ何と仰有る（老）何とも云はぬ己が殺した己ハ松子を
殺す積りで階段の下に待て居た所絹服の音がして降て來たから唯一突に
突た所ろー（長）夫が亀子さんあでッたのですヲ分りましたドレ其處をお
退きなさい私しが見て上げます未だ命の助からぬ者でもない」と長々は殆
ど老人を突退けて亀子の傍に寄り見れば傷ハ首の骨の直下にあり何樣深
く刺したりと見え滾々と流れ出でたる血ハ邊一面を染め做せり（長）血の

餘計に出るのハ却ッて好いとか云ひますが心臟ハ猶だ少し皺動いて居る
樣です（老）何うだ未だ脈があるのか醫者を早くサヽ醫者を（長）醫者ハ直
に呼で來ますが夫れまで茲にハ置れません二階の寐間まで舁き上げます
うサ手傳ッて下さいなオヤ目が見えなくてハ手助けにもならぬのかヱヽ
仕樣がないなアソレ其の突當りが戸の所です其戸をグッとお引開けなさ
い私しが一人で抱上げますから爾です〳〵貴方も私しの後に就き一人で
二階へ探りながら上つて來る位の事ハ出來ませう」と云ひ大事に亀子を抱
上げて徐々二階まで登り行くに廊下の掃除をなし居たる下女お花ハ斯と
見て「アレ先ア嬢樣」がと打叫ぶを長々ハ睨み附け「何だ騒々しい嬢樣ハ今階
段から落て此通り氣絶なさつたのに上に居て夫も知らず此の迂かり者め
併しナニ太した事ぢやないから直に直る人にでも多舌ると暇だぞ」と叱り
附け更に「柳田夫人ハ何所に居る」と問ふ（花）御自分の居間に（長）でハ居に



來て下さいと云ひ夫からゐ前ゝ直に玄關の取次室へ行き誰も來ぬ樣に番をして居ゐ誰が來ても老人と嬢樣ゝ留守だと云ひ決して上へ揚るのぢやないよ」と今ゝ宛も主人の如く殿かに言渡せゞ背後より這上りし老人も長々の拔目なく行屆くに感心せしと見え「長々さんの云ふ事ゝ何でも已の首薬だと思へ」下女ゝ夢中に夢を見る如く一言の返事も得せず直ちに柳田夫人の室へと馳行きたれゞ長々ゝ龜子を寐臺まで運び行き充分に注意して死骸同前ゐる其身体を先づ難もなく横に置き更に背後に從へる三峯老人の手を取りて「先生貴方ゝ我が娘を殺害した罪ゐ依り牢屋へ行き度いと思ひますまい」と推問ふゐ老人ゝ小羊の如く柔ゐて「イヤ何うかして娘の命さへ助かれゞ已が身ゝ最う何うあつても厭ゝない（長）万事私しゐさへ任せて貰けゞ龜子さんも助かる者なら霊せる丈の手を霊して助けますし夫ゐ又警察ゝ素より世間の人誰れも貴方が龜子さんを殺し掛たと云ふ事ゞ

知らぬ樣に計らひますが（老）ア、何も彼も貴樣に任す何うぞ其樣に計らつて呉れ」と殆ど手を合せて拜ぬばかり斯る所へ——

第五十一回

斯る所へ馳入り來るは下女花子の知せゐ驚き氣も轉倒せし柳田夫人なり長々の背の方より聲を發し「龜子が階段から落ましたゝか」と忙しく問ふ長々は直ちに振向き最殿かなる調子にて「靜になさい夫人泣たり叫んだりする場合でありません殊に下女などには一言も云はぬ樣ゐ願ひます實は階段から落たではなく老人が他人と間違べて傷けたのです傷は中々深いけれど直らぬ事もありますまひ幸ひ私しの友人ゐ外科の名人があつて來た世間へゝ名も知れぬ男ですが斯ぢな場合ゐは外の醫者より最も信用が出來ますから十分問と經ぬうちゐ私しが呼で來ます丁度唯今も私しが外から

歸る時道で逢て此門口まで一緒よ來て分れましたから未だ居る所も分ッて居ます」と早口よ言明す夫人ハ此言葉の耳よ入しや入ざるや唯だ老人が娘龜子を害せしとの一言よ驚き呆るゝみのにして頓には返事も出來らず（長）分りましたか夫人此事が少しでも世間へ洩ては成らぬから醫者の方は私しが受合ますが若し召使ひの者から洩れば夫は貴方の落度ですよ外の者には誰にでも階段から落て怪我をしたと言聞せてお置なさい」と長々は龜子の命と老人の名譽を兩あがら救ひ得させ警察沙汰と世間の噂を防がんと思ふより熱心に言渡すなり夫人も素より辨へ深き人なれバ充分に呑込て合首きあがらも「夫にしても餘り松子夫人が惜いでハありませんか夫人ハ何所へ行きましよ（長）何所へ行たか龜子に逢ふとて二階へ上り其儘降てハ來ぬのです私しが出る時に表の戸に錠を卸して置ましたから二階の何所かに隠れて居るか夫とも錠を降さぬ先に逃出して仕舞たよ極ッ

て居ます」夫人ハ聞きて震へ上り「何も彼も分りました最う此家には居りません貴方が錠を卸す前よ逃たのです（長）でも二階へ上ッて來たのを貴女ハ見受ましたか（柳）ハイ見受ましたよも龜子の室へ這入て來たのですもの（長）夫から（柳）夫から龜子よ向ひ今日ハ愈々老人が私しの肖像を作るよ由り其所を龜子よも見せ目が見になくても別よ不自由をせぬと云ふ事を合點させて置きたいから直よ龜子を連て來て呉れと頼まれたと云ひでハ龜子さん私しハ下よ待て居ますから直よ細工場へ降て入ッしやいよと云捨て自分は直よ龜子の室を出ましたが今考へて見ると爾云て裏階段へハ降らずよ自分ハ表階段を下ッた樣です斯と聞く長々より背後よ在る老人ハ猶ほ驚き「何だアノ松お坊めが龜子よ下へ降て來いと云たのかエ、惡女め已に殺されると云ふ事に氣が附て驚もない龜子を欺し自分の身代り立たのだと齒を噛メて悔しがるも道理あり柳田夫人ハ全く顔の色を失ひ

其聲を震はせつゝ「私しも今になつて爾だらうと思ひます」と云ふ獨り長々は爾ゝ思ゝず「イヤ眞逆に松さん坊が龜子さんに恨みないから龜子さんを身代りに立ると云ふ夫ほどの恐しい心でもありますまい唯だ龜子さんを下へ降し其間に自分が逃れば下には目の見える私しも居る事だし龜子さんを自分と間違る筈もなく驚いて詮索しても間に合はぬとになるだらうと是位の了見でせう」と云ひ老人を慰めしも是時愈ち又長々の胸に浮かぶい若しや彼の松子夫人已が大事の情夫とせる茶谷立夫が龜子と婚姻するを嫉しく思ひ儘よ老人が我身と間違へ龜子を殺せゞ殺せと云ふ恐ろしき心なるかと思ひ出しては始ど戰慄するばかりなれば生死も知らぬ龜子を控へて想像に時を移すべき場合に非ず殊に又松子が心根の如何なりしや彼れと茶谷の間柄ゝ何樣あるやなどの疑ひゝ追々探るべき折あらんと思へば柳田夫人に猶は二言三言注意を殘し長々ゝ其儘醫者を迎へにと此所を

立去りたり抑も長々が迎へ來んとする醫者と云へるは彼の書工筆齊と同じく家もなく妻もなき書生上りにして氣心の逢ふ所より長々とは屬魂の懇意あれゞ醫道に掛けての腕前ゝ必ずしも世の大醫に劣るに非ず唯だ上部を飾らぬ爲め世の信用を得ず隨つて一家を支ふる程の所得を得ざる丈にして一さび此人の地療せし者の中には私に望みを屬するも多しとか此人名を石村淡堂と稱し先程長々がお婆婆を迎へに行きたる歸りに此家の門口まで共に來り分れて近傍の珈琲店に入たるなり長々ゝ其事を知れるにゞ直ちに其珈琲店に走附れば淡堂先生既に一血の内に飽き心地好げに猥吟せるにゞ長々ゝ先づ彼の有名なる金貨一片を出し「コレ給仕〳〵是で淡堂先生の勘定を取り殘りゝ此次の勘定に廻して置け」と命じ終り直ちに淡堂の前に行き小聲にて「君が爲に急病人を見出して來て旨く療治が行屆けば一身代作れるぜ」淡堂ゝ唯の怠惰者に非ず患者のためには容食を忘る

ゝほど醫術が好の人あれゞ猶豫なく立ち上りて直に行かう其病氣ゝ何だ（長）實ゝ父が娘の胸を短刀で刺貫たのだ（淡）フフム予殺しか（長）でゝない外の人と間違つて（淡）オヤ〳〵夫ゝ非常の近目と見えるな（長）近目でゝない盲人だ僕の師匠の三峯老人サ併し君殿重に秘密を守て呉ねゞ成ぬよ（淡）其樣な事ゝ安心したまへ決して他言あどはせぬ男だ（長）じゃア君療治が届くだらうか（淡）夫ゝ患者に接した上でなければたが何か血ゝ澤山出たのか（長）出たとも〳〵留度もなく出て仕舞た（淡）外へ澤山出血するのゝ返て能い內部へ出血してゝ迎も助からぬ所だが（長）若し直るとすれゞ幾日ほど掛るらだう（淡）夫も分らぬ通例一週間餘り經ねゞ其樣な病人ゝ直るとも直らぬとも見込が附かぬ（長）見込だけ附た所で愈々直ッて達者にある迄には餘程月日が掛るだらうヲ（淡）左樣サ一月掛るもあり三月掛るもありサ（長）好し〳〵一月掛れば其間に伯爵を取占るぞ（淡）何

だと（長）イヤ是は此方の事だと云ふうち二人に西山三峯老人の家に着き長々が先に立ちて龜子の室へと上り行きたり

第五十二回

龜子が三峯老人に刺れてより今ゝ九日目とありぬ龜子が生死は未だ分らず大抵の病人ゝ九日目に至れゞ醫師の見込も定まると云へゞ老人も柳田夫人も長々も早く淡堂先生に其見込を聞き度しと思へるなり長々が連來りし彼の淡堂先生ゝ其日より今に至るまで殆ど我子を痛はるが如く日に幾度も訪來りて龜子の傍に坐し少し樣子の異りし時ゝ夜の十二時過るまでも龜子の一呼一吸を伺ひて疲れたる色をも見せず老人ゝ長々が能き醫者を迎へ來りしを喜び此人の手に掛て直らずゝ天命と斷念るも恨みなしと云ひ朝早くより夜の更るまで龜子の傍に附分あれど龜子ゝ醫者より固

く物言ふことを禁められ偶々何か言度き時ゝ纔に手真似をあすのみにて悲しや其手真似ゝ一も老人に見えざれば老人ゝ唯だ口の中にて「龜子許して呉れ龜子許して呉れ」と呟くのみ真に親も子も憐むべし此間にも下女ゝ長々の差圖を守り總て尋ね來る人に向ひてゝ嬢様ゝ繪の額を掛代る爲め壁に上り過ちて梯子より落ち痛く怪我したりと披露して一人も上に通さず去れば日頃より龜子を知れる人々ゝ日々容体を聞きに來れど獨り彼の輕根松子のみゝ膿だとも潰れたとも音沙汰なし長々ゝ腹の内にて「彼れ自分の身代りに龜子を立て大怪我をさせた事を嗅附て居るのかあ」と疑へり夫に引替へ切々と訪來るゝ龜子が許嫁伯爵茶谷立夫なり彼れ幾度か龜子の寐間まで通し呉と請ふ事あれど下女花子ゝ之を許さず醫師の言附ありと云ひ堅く拒みて退くるにぞ彼れ心配に堪ざる如く更に三晩老人へ宛て手紙を送り越せしかど柳田夫人と長々と相談の上にて此手紙ゝ未だ老人に

示さずとぞ斯て九日目の今日となりぬ今日ころゝ醫師の見迄を聞く時ぞと一同ゝ宛も判事の宣告を待つ罪人の如く恐る〳〵待受るに壁前に到り淡堂先生ゝ入來り毎もより又一入の真面目ある面持にて一同にゝ言葉も掛けず先づ病人の寐蓐に寄り暫し様子を伺ひし末「今少し息を背へお引あさいドレ最一度爾々今度ゝ極輕く咳して」などと云ふ龜子ゝ無言にて差其圖に從ふに此の間の一同の心配ゝ一方ならず孰れも息を凝して控ゆるのみ既にして先生ゝ少し龜子の頭を起し「嬢様氣分ゝ何の様です」と問ふ老人ゝ心配の餘り座に堪ず獨り立上らんとするに此時先生ゝ又龜子に向ひ「イヤ心配に及びません貴女も寐床に居る方が安樂でゝありませうが最う少しづゝ起直らねば了ませぬから」と云ふ一同ゝ驚きて「何と仰有る」同音に問掛れば（淡）イヤ嬢様ゝ最う直りました傷を受たのゝ、右の肺の上部ですが最う其傷が癒て肺ゝ異狀あく働らいて居ますから此上ゝ唯だ直る一方で

す」と云ひ其身も安心の息を吐き「ア、年が若くて且つ血液が清潔ですから左しもの重傷も此通り早く直るのです」老人今ゝ嬉しさに叫ぶ聲にて「でゝ娘ゝ生返りませうか（淡）生返るドコロでなく今から二週間の中にゝ馬車に乘ても差支へのない程に回復します猶だ身心とも酷く動かしてゝ了ませんが少し位ゝ話もし起られるなら起るのが好いのです」老人ゝ飛び立ちて淡堂の身に感み附き「二万法十万法此のお禮にゝ私しの命でも」と云ふ淡堂ゝ靜に推退て笑ひながら「イヤ貴方ゝ算盤を知ませんあ通例診察料ゝ一度が五法で十度とした所で五十法です夫に毎夜病床に詰た慰勞として百法を足し合せて百五十法が立派な謝禮と云ふ考です（老）先ア其樣な事を云ずに取敢ず之を」と云ひ老人ゝ衣囊より小財布を取出して無理に淡堂の衣囊に推入んとす淡堂は受ずと云ひ推返さんとする所を長々が仲裁し取敢ず納めしむれば此時龜子ゝ初めて最弱き聲を發し「でゝ先生最う物を

言ふても宜いのですか（淡）ハイ少しゝ云ふ方が宜しいけれど酷く心を動す樣な事ゝ了ません當り前の事を少しづゝ仰有る樣に」龜子ゝ心得たりと見え更に「私しの命ゝ先生のお蔭で取留ました」と禮を述べ次にゝ三峰老人に向ひ「阿父さん茲へ來て喜んで下さいな」と云へば老人ゝ早や泣聲にて「オゝ己の罪を容して呉れたか」と云ひ寐室を杖に龜子が身に縋り付んとす淡堂は傍より「アゝ餘り心を動す樣な事ゝ禁物です」と云ひ長々も「老人涙を納めて先づお据りあさい」と制す龜子も同じく「阿父さんお据なさいよ据つて病氣中の事柄を話してお聞せなさい」老人ゝ漸く心を推鎮めて席に復せば龜子ゝ又「私しの知て居る人々ゝ大抵尋ねて來て呉れましたか誰も寐間迄ゝ來ませんでしたか」と問ふ（老）イヤ夫ゝ淡堂先生の差圖に從ひ皆玄關から追返して仕舞たのだ（龜）でも何とか私しを慰めてゝ呉れたでせうか茶谷さんも來たのでせう」長々ゝ聞きて心の中にて「アゝ傷ゝ癒ても心の迷ひ

ゝ未だ癒ぬと見えるなァ」と呟きたり（老）オ、來たとも〳〵茶谷伯ゝ毎日の樣に來た（龜）爾だらうと思ッて居ましたですが何故茲へ通ほしませんで（老）夫がサ先生の言附だらうぢやないか誰にも合せてゝあらあいと（龜）夫ゝ知て居ますが今度來た時ゝ最う茲へ通しても好いでせう」淡堂先生ゝ此時長々の目附にて彼れが茶谷を嫌るを見て取れば「イヤ嬢樣貴方ゝ唯だ回復の緒が立たと云ふ丈で未直ッたと云ふのでゝなく少しでも不養生があれば直に後戻が致しますから友達に逢たりするゝ猶だ充分に直た時まで待ねば了ません（龜）でも貴方少し位ゝ話しをする方が好いと仰有ッたでゝありませんか父と話をするも外の人と話しをするのも同じ事であり相な者ですが（淡）左樣其人が貴方の心に何ともあい人ならば搆ひませんが若し逢て少しでも貴方の心を動かす樣な人ならば害にあります」龜子ゝ少し顔を紅めて「でゝ害にならぬ時まで待ませう（淡）ナニ夫も長い事でゝ

有りません誰にでも逢て好い時が來れば私しが爾申します夫までゝ話しも唯だ家の者とする丈で外の人にゝ決して逢てゝ成りませぬ」と殿重に言渡すに龜子も「分りました」と含づきて承知したり

第五十二回

醫師淡堂先生ゝ猶ほ龜子に向ひて樣々の差圖を與へしが兎にも角にも本腹の見込立ちしと聞くからに老人の喜びゝ一方ならず「サア長々も永々の看病に嘸や疲れた事であらう今日ゝ外へ出て一日保養をして來るが好い龜子の傍にゝ已と柳田夫人が附て居るから心配ない」と云へば龜子も長々の思ふ感ぜし如く「本統に長々さんにゝ御厄介になりました最う阿父さんの仰有る通り私しに心配ゝありませんから安心して散歩でもしてお出あさい」と勸む長々ゝ少し思ふ仔細もあれば此言葉を幸ひに「ハイ今日ゝ晩な

でお暇を頂きませう」と云ひ醫師淡堂と打連て茲を出しが彼れが心にハ三峯老人が深く淡堂を尊へるを幸ひに淡堂を我味方として茶谷と龜子の婚禮を破らんと思へるあり淡堂ハ外に出ると共に發と息吐き「アヽ龜子孃の全快の見込が附て此樣な嬉しい事ハない」と云ふ（長）嬉しい筈だ君ハ實に大醫でも及ばぬ程の手際を現ハしたもの是から追々名が上るぜ（淡）ナニ龜子孃の直ッたのハ少しも僕の手際でない唯だ天然自然と云ふ者だ何の醫者でも僕と同じ事をして同じ功を奏するに極ッて居るから夫が嬉しいと云ふではないが唯チ若し孃が死る事にでもあれば其死亡屆けから胸の傷を怪まれ遂に僕が醫師規則に背き犯罪の疑ひある者を屆けずに居たと云ふ罪に問はれるから夫を心配して居るのサ（長）成るほど夫ハ素人の知らぬ苦勞だがチ君ハ既に龜子の身体の傷を癒したに就て次にハ心の傷を療治して貰ひたいが（淡）心の傷何を云ふのだ孃の心臟にハ傷ハないが

（長）爾でハないよ龜子が今も第一に茶谷伯の事を問ふたゞらう龜子及び老人共に其茶谷と云ふ奴に心醉し婿夫にする積で居て僕が何を云ッても取上ぬのだ所で若し君の口から言つて貰へバ少しハ考へるだらうと思ッて（淡）イヤ夫ハ御免蒙むらう人の婚禮などに口を入れるは太嫌ひだから（長）ナニ當前の婚禮あらバ僕が何も横合から彼是れ云はぬ唯だ龜子及び師匠の身に取り容易あらぬ災難が目に見えて居るからサ（淡）何の彼のと其婚禮を破ッて當て君が自分で婿にある積りでハないかチハヽヽヽ（長）是ハ怪からん僕を其樣な惡人と思ふかチ（淡）爾ハ思はぬが戀ハ思案の外だから（長）笑談じやないよ僕ハ龜子の友達で春野鶴子と云ふ女に望を屬して居るから龜子の婿にならうなど云ふ心ハ毛ほどもないが何分にも茶谷伯と云ふ男が捨置難き惡人でー（淡）待給へよ茶谷伯と云ヘハ何だか聞覺えのある名だが」と淡堂ハ頻りに首を傾く（長）貴族名鑑にも出て居る如

だから聞、覺えいあるだらうよ其樣な事い何うでも好い先づ聞給へ其茶谷と云ふ奴い唯に惡人のみならずだアルッ街で三峰老人の目を燒潰した松お坊と云ふ女の情夫だ夫れを知らずに老人がー（淡）何だアルッ街是い不思儀だアノ村越お鞠の殺されれた事件じやあいか（長）夫さ〳〵僕の考がへでいアノお鞠と云ふ女を絞殺したのも多分茶谷と其松お坊だらうと思ふのだ併し君が村越お鞠と云ふ名前まで覺えて居るい不思儀だオエ淡堂い返事もせず頭を右左りに傾むけて空しく何事をか考がふる体なりしが頓て「分ッた」と云ひて手を打ち「アヽ人間の記憶力と云ふ者い不思議な者だ僕い先程龜子嬢が茶谷と云たのを聞た時から何でも聞、覺があると思ひ樣々に考へても思ひ出さぬ所を君がアルッ街と云たので初て思ひ出ーた」と異樣な事を云ふに由り長々い且怪み且い其思出せし事と云ふが若しや我爲に手掛りゝある如き事柄にはあらぬかと思ひ「其思ひ出したとい何の樣な事

を（淡）イヤ待たまへよ君の云ふ茶谷の名前い何と云ふ（長）立夫と云ふのサ（淡）爾々立夫々々待たまへ（長）又待ちたまへか大層待せるぢやないか（淡）イヤ待たまへ待たまへと云ふのは僕の口癖だから待たまへよ僕に其茶谷立夫の人相を當させて見たまへ第一背が高くて寧ろ痩た方でー（長）夫から（淡）待たまへよ色が白くて一廉の美男子だらう（長）全く其通りだが君何所で其茶谷に逢ふた（淡）待たまへ〳〵是にい色々の話しがあると云て往來でい話しも出來ぬ何所か休息所へ立寄つてい何うだ（長）結構サ直ぐ其所にあるからサア寄らう」とて二人い但有る珈琲店に入行きつ其一方に腰を御せしが長々い早く其話が聞たければ頻りに淡堂を促すに先生待たまへ」とて一杯の麥酒を呑乾し「ナニ珍しい話でも何でもないが其代り僕の言ふ事にい嘘も偽りもあい丈が取得だ（長）其積りで謹聽する（淡）僕が學校を卒業した當座の事だから今より六七年前だが毎夜僕が晩餐を

喫べに行く安料理屋へ同しく喫に來る女が有る（長）夫が村越お鞠だらう（淡）爾先ッ潛をせずに待たまへ所が其女が古い汚れた着物を着て居るけれど通例の貧乏人とは違ひ汚れても絹服だから僕は不思議に思ひ氣を着けて居るうちにッイ想意にあり或夜僕の振舞た酒の酔に色々の事を話した（長）其中に茶谷の事があるのか（淡）待たまへと云ふのに君は後々彫刻の上手に成るだらうが決して話しの聞き上手には成らぬ男だよ（長）君も聞せ上手には成りそうもない夫から（淡）夫から身の上話を初め數年前まで役者であつて可あり盛に遣て居たが其中に男が出來到々芝居へも出る事が出來あくあつたとて惚け交りの話を聞くと何でも其男が貴族で非常な美男子で其上に世間の信用が厚いとか色々の功能を並べたが其時何でも立夫々と云ふ事を言た樣であつた併し僕は唯だ浮々と聞て居たが其後幾日を經てか僕が又例の通り其安料理屋で晩餐を遣て居ると其お鞠が

狂氣の如くに遣て來て一直線に僕の卓子を差し馳寄つた」を宛も其時の事を其儘思ひ出せし如く興に乘りて語り來る」長々も今は全く手掛りになる事柄と見て取りて耳を傾け初めたり

第五十四回

ドクトル淡堂は言葉を繼ぎ「待給へよ君も知る通り僕が學校を卒業してから初めて外國へ旅行したのは漫性病に罹ッて居る某貴族の伴をして伊國へ行た時だが爾々其少し前だ今云ふ村越お鞠が料理屋へ飛込で來たのは爾だ僕が伊國行の仕度など仕て居る頃であつた（長）其樣な事は何うでも好い肝腎の話を聞せたまへ夫からお鞠は何うしたのだ（淡）突然僕の手を捕へ大變ですよ先生兼てお話しアした私しの大事の人が昨夜怪我をして人に負さッて來ましたが貴方より外に療治して下さる方はありません直

に來て下さい直に〳〵と迫立るから僕ハ變に思ひ昨夜怪我した者を今まで其儘置たのかと問ふとナニ昨夜も十二時過云ハ今朝の曉方で夫から今まで貴方の居所を探しヤッと此通り見出したのですと云ふ何樣狼狽の体だから僕も可愛相にあり早速お鞠の後に隨て行くとアルッ街の路次の角に在る小作な家へ這入ッた（長）夫が即ち僕の師匠が目を潰された家だらう（淡）夫から二階へ上ッて見ると寒蓙の上の怪我人と云ふのはお鞠の素人療治で手とも云ハず頭とも云はず布の切でグルグル巻にしてある僕は夫を解て傷所を檢めさが頭にも杖で擲れた傷があり手などハ硝子の屑で引掻た者と見え滅茶〳〵にあつて居て右の腕には女持の極細い短銃で打貫れた痕もあり其外頭の後部にも大道へ轉り落た樣な怪我がある併し幸ひに軌れも急所を外れて居たから夫々手當を施こしたが僕ハ唯だ其患者の顏附の立派なにハ驚いた何う見てもお鞠などゝ一緒に暮す男でないから扱ハ此男貴族の果か何かで浮氣女を強求つて食て居るのだなお鞠なども食れて居る一人だなと見て取た猶ほ念の爲めに患者に向ひ二言三言聞たけれど患者ハ身分でも憚かるのか滿足に返事もせぬ故僕も其儘歸つたが其時お鞠ハ出口まで送つて來てアレが有名な貴族茶谷立夫で今ハ敵のある爲め艱難辛苦をして居るが其敵を追拂へバ直に私しを屋敷へ迎へ表向婚禮するのですよと云た長々ハ聞來りて大切の手掛を得し如く打喜び「だが何うして其樣な怪我をしたゝらう決鬪でもあるまいし（淡）ナニ其樣な名譽のある怪我でハない僕の鑑定でハ夜中に人の家の窓を破り中へ這入うとした所を内の者が目を覺し棍棒で擲るやら短銃を放つやらした爲に野郎驚いて窓から往來へ背後樣に落たのだ（長）シテ見ると彼等泥坊でもする積であつたのだな（淡）サア盜坊か何だか分らぬが軌れにしても紳士の仕業でない恥知らずの所業をした結果と見える」長々ハ一層の力を

得「ソレ其樣な奴だもの僕が龜子の婿に仕度くあいと云ふのゝ當然だらう（淡）あるほど當然だ充分に通たまへ僕も及ばずながら加勢しやう（長）是非願ふよ僕が老人に茶谷ゝ是々だと云ッた所が一口に讒訴だと叱り中々取合ぬから塲合に依れば君にも充分口を聞て貰はねばならぬだが併し君ゝ其後も茶谷に逢た事ゝあるだらうネ（淡）イヤお鞠にゝ併國から歸ッて後も逢たけれど茶谷にゝ更に逢ぬ夫でも其顏ゝ今以て歷々覺えて居る若し折があれば出し拔に僕を茶谷に逢せて見給へ僕ゝ一目で是が其人だと指て遣るから（長）何しろ併し此樣な事と云ふ者ゝ少しも失念のない樣に念の上にも念を推て掛らねばならぬから第一に君が其茶谷に向ひ愈々彼奴が其の時のお鞠の情夫に違ひないと云ふ事を見認けて置くが肝腎だネ（淡）夫は爾だ何うかして見屆けようものだ（長）ハテな三峯老人に問へば彼奴の住居が分るけれど夫でゝ却て老人の疑ひを起すから面白くなし老

人の家の細工塲に据ッて居れば毎日彼奴が玄關まで來るさうだから其顏を見られるけれど今ゝ細工も罷めて居るから夫も怪まれる元だらう何うした者かア、畫工筆齋に賴み倶樂部で彼奴の住居を聞て貰ひ其上で然るべき口實を設けて彼奴の許まで尋ねて行うか筆齋と彼奴とゝ同じ倶樂部に入て居るから」と云ふに此時淡堂ゝ戸外を眺め「何だ筆齋彼れあらばソレ今丁度乘合馬車に乘うとして此家の前にマゴ〳〵して居るが（長）ヱ筆齋は鐵道馬車に夫ゝ不思議だ彼奴も僕と同じく足の達者なるが自慢で馬車よりゝ歩くのを好む方だが」と云ひながら長々ゝ窓より首を出し見るに成るほど彼の筆齋が今しも通り行きたる馬車に乘り後れ不愉快ある顏附にて此方へ歩み來る所ろなれば長々は聲を掛け「筆齋君〳〵少し話がある茲へ立寄つて呉れ給へ丁度ドッル淡堂も一緒だから」と云ふに筆齋ゝ機嫌を直して入來り「ア、馬鹿を見た馬車の中に素的な尤物が乘て居るから合

乘を仕やうとて呼留たら馭者が滿員になッて居るとて其儘行て仕舞た」と
咎きながら席に就く（長）アノ美人ハ君も知て居る春野耕次郎の妹鶴子と
云ふ者だが（筆）何だ彼れが春野氏の妹か失でハ馭者に斷られて好い事を
した浮雲く君から決鬪を言込れる所サ」と打笑ひ更に淡堂先生にも淡白に
拶挨す長々ハ打附に「實ハ君を呼だハ外でもあい茶谷立夫の住家を聞く爲
に（筆）フム住家を聞て又一勝負儲ける積か今度ハ爾ハ了ないよ（長）ナニ
其樣な事でハあい若し君が知ねバ倶樂部で問合せて貰ひたいのだ（筆）夫
ハ易い事だが僕に聞くより君の師匠の三鑒老人に問ふ方が早いさやない
か（長）イヤ夫が了ぬと云ふ者ハ其所に色々譯があるのだ」とて包み隱さず
我目的と今迄の骨折を詳しく話し今淡堂に聞きたる茶谷が怪我の話まで
打明るに筆齋ハ暫し考へ「夫ハ不思議な事も有る者だが其淡堂君が茶谷
を療治したと云ふは何時頃の事だつた（淡）今より六年前だ（筆）フム六年

前の春か夏か（淡）僕が伊國へ行く少し前だから冬の事だ十一月の末であ
つた」筆齋は何事か碩と手を打ち「是ハ益々面白い僕も夫と一對の事實を知
て居るよ丁度年月が同じ事だから一個の事だらうが」とて是より筆齋ハ如
何なる事を語り出んとするや

第五十五回

畫工筆齋が何事を言出すならんと長々も淡堂も耳を澄すよ筆齋は語を繼
ぎて「丁度六年前の十一月の末であッさが僕の知人に長谷川と云ふ建築師
が有ッてー（長）夫は僕も知て居るワテチル街に住で居る肥太た男だらう
（筆）爾々其長谷川サ所が其頃長谷川が自分の持て居る貸家を賣り大金を
受取た所ろ何所かで其事を聞知たと見え其夜の十二時過る頃表の窓の硝
子を破り何者か推入る物音が聞えた故長谷川は細君と共に寢室から飛で

降り自分は大きなステッキを手に取り細君は護身の短銃を引携て共に其所へ行て見ると一人の曲者が早や窓の横木に上り片足を室の中へ入て居た長谷川は出し抜に其頭を目掛け碎ける程に擲り附れば細君も短銃を放したから曲者は驚いて外へ落たが此時夫婦とも寐巻の儘ゆへ追て出る事は出來ず窓から首を出し盗坊〳〵と叫んだけれど通り合す人はなし窓の下には一人の相棒が待て居て今落た曲者を擔ぎ上げ其儘逃去たと云ふ事だが後で細君が其曲者の事を貴族の樣な好い男であつたと云たので長谷川が氣を廻し和女の所へ忍で來た男ではなかつたかと云ふと細君は忍んで來る男に何で短銃を向ませうと言開き終に一場の笑で事は濟だが是は最う長谷川の友達が皆知て居る事實だから僕の外に證人ゝ幾等もある何うだ淡堂君君の話と能く似て居るじやないか（淡）似て居るばかりでない全く一個だ傷を受た時刻と云ひ樣子と云ひ殊に曲者が好い男であつたと

云ひ全く符節を合す如しだ夫に茶谷の腕にあつたゝ確かに女持の短銃の傷だから是が何より明白な證據だ」長々ゝ嬉げに「君方が其樣な大切な事件を知て居るとゝ實に思ひも寄なんだ是で最う大概ゝ分つて仕舞う第一茶谷ゝ其樣な惡事を知られて居るから其後あるべくお鞠に隱れて居た所ろ終に見附つて約束通り夫婦にして呉れとか何とか云はれたから夫でゝ今夜アルッ街の家で逢ふと云ひお鞠を誘き入て置て松お坊と二人で殺したのだお鞠の情夫を松お坊が盗んだ爲めお鞠が常に松お坊を怨んで居たと云ふ事ゝ先達て筆齋君が話したから（筆）爾々夫ゝ最う僕が直接にお鞠から聞たのだから確かだよ（淡）シテ見ると松お坊の爲にも茶谷の爲にもお鞠ゝ活して置れぬ奴サね二人で殺すのゝ當然だ併し爾すれば茶谷と松お坊ゝお鞠を殺した後で夫婦になり相な者だのに夫婦にならぬのみか茶谷ゝ別に亀子嬢を妻にせんと云ひ松お坊も夫を手傷ひ今まで三畳老人の機

嫌を取て居たのゝ何う云ふ者だらう（長）夫も分つて居るサ茶谷ゝ龜子の身代に目を附け之を奪ふとして居る所へ昔の色女松あ坊が露國から歸れから之を説附け愈々婚禮の上ゝ龜子の持參金を山分にし其上龜子を振り捨てるとか何とか云ふ約束を結び夫れで松あ坊にも手傳はせて居たと云ふ者」説き明かす長々の言葉を聞き淡堂ゝ「成る程」と云ひて默し筆齋ゝ驚ろきて「何だと松あ坊が露國から歸ッて來たと夫れゝ初めて聞く話したが」と訝る（長）アノ捨苗夫人の家で逢た輕根松子と云ふのが松あ坊サ（筆）其の樣な事ゝあい（長）ナニ僕ゝ確かな證據を幾個も持て居る彼奴も最う松あ坊と云ふ本性を見現はされたから長く此國に居る事ゝ出來まひ（筆）夫は實に驚いた成る程爾云へバアノ晩も何だか茶谷と馴々しい樣な所が見えたが君アノ松子夫人ゝ最う此國にゝ居ないのだぜ（長）何だと（筆）イヱサ僕ゝ昨夜も捨苗夫人の許を問ふたが其時夫人の話に輕根松子ゝ英國から招かれて同國見物旁々出發したと云た長々は腹の中よて「フム己と老人を恐れて逃たのだナ」と呟き更に聲を發して「夫は少しも搆はぬよ僕の相手とするのゝ松あ坊でなく茶谷だから（筆）でも松あ坊が居なければ君が幾等茶谷を松あ坊の情夫だと云た所で茶谷が爾でないと言切れバ夫れまでだらう（長）ナニ僕ゝ猶だ外にも確な證據品を持て居る（淡筆）證據品とい（長）茶谷の家紋の附た指環だ是ゝ茶谷が困ッた時に外の品と共にお鞠に渡して質に置せ夫を今度松あ坊が受出して歸道で落して仕舞ひ僕に捨はれたと云ふ一件だから質屋の帳面を調べれば其手續が分るのだ殊よ此頃の新聞紙にお婆婆の名前で廣告が出て居るだらう（筆）アヽ出て居る拾ひ主へゝ千五百法の褒美を遣ると（長）アノ廣告が松あ坊から出て居るのだ（筆）君は一廉の探偵だナ（長）爾でもあいが兎に角斯まで分れば僕ゝ直に茶谷と戰爭を初めるよ（筆）何うして（長）是から淡堂君と共に茶谷の許を

問ひ彼れに逢て其のお鞠との關係及びお鞠を殺した事や其外の事が露顯し悉く化の皮が剝たから龜子と婚禮の事を取例し再び西山三郎の家へ足踏をするあと談し附て遣る彼も爾る者も爾る彼是云ひ張るだらうから其時淡堂君に彼の療治の時の事を言出して貰ひ僕ハ件の指環を見せグーの音も出ぬ樣に推詰る」と長々が熱心に說立れバ筆齋も思はず勵立ち「夫ハ面白い僕も一緒に行き次第に由れば長谷川へ這入た盜坊の事を言ッて遣らう（長）夫ハ益々難有いだから君に茶谷を住居を知せて呉れと云たのサ（筆）茶谷の住家は知ぬけれど今から行けバ彼奴必ず倶樂部に居る若し居あけれバ倶樂部で彼奴の住居を聞くとしやうぢやあいか（淡）夫が好らう（長）爾しやう」と是にて相談一決したれば三人茲に一隊となり愈々茶谷ま談判を開かんとす是にて先づ此家の勘定を濟せ勇み進んで三人とも倶樂部を指して立出しが果して彼の茶谷立夫をグーの音も出ぬ程に遣込め得るや

如何に

第五十六回

愈々茶谷に大談判を開かんため三人は倶樂部を指して出立しが道々も長々は筆齋に打向ひて「君アノ後倶樂部で茶谷に逢たのか（筆）逢た事は逢たが彼奴餘程財政困難と見え歌牌には手も出さず宛で亡者の樣にあづて居る（淡）夫は必ず松ァ坊が資本を注込なく成さためだらう（筆）爾サ夫だから猶ほ龜子嬢との婚禮を急いで居るのだ（長）シテ見ると彼奴の金を一万法餘り勝て遣たのは好い氣味だつたナ（筆）殊に一万法の金があれば當分餓死ぬ氣遣はなく夫に君は鶴子嬢と世帶を持つ時の資本に成るからチエ（長）所が夫に了ないのだ鶴子は博徒あどで勝た金ハ汚はしいと云ふから僕は是から彫刻で以て新ま資本を作る積だ（淡）夫は極々容易の事サ三郎

老人が彫刻を罷めれば今まで老人の得意は總て君に呉るだらう（筆）夫に鶴子と云ふ附物があれば夫が張合になつて益々稼がれるッ何でも鶴子嬢の兄の耕次郎と云ふのも中々頼もし相な男だよ彼れも龜子嬢よりは氣があると云ふ事だが（長）爾サ僕の積りでは茶谷を罷めて耕次郎を老人の婚にしたいと思ふ（淡）長々君中々旨く遣るぜ石一個で鳥を二羽打つと云ふのは君の事で兄を歡ばせ妹を妻にしやうと云うのだネ（筆）違ひない何しろ併し悪事でないから友達の好意に吾々も充分手傳つて遣らう（淡）爾とも だが差當り夫より急務は茶谷との戰畧だが全体誰が先鋒にある（長）夫は僕サ僕が第一に口を切り松ゐ坊と關係の事よりお鞠を殺した嫌疑の次第まで述て行くから其時淡堂君が彼の療治の一條を持出して呉れゞ夫で彼奴を取占めるから其上で彼奴に二度と三畧老人の家へゝ足蹈を致しますまいと云ふ約束をさせ夫も口だけでゝ了ぬから書面に認めさせて取て置く（淡）イヤ書面と云ても其樣な書面を出すのゝ詰り自分の犯罪を白狀すると同じ事だから彼れ中々承知すまい（筆）爾とも夫よりゝ一層一週間の中に外國へ出奔して仕舞へ八日目にゝ已れの悪事を警察へ訴へるぞと斯う一つ責附るが好らう（淡）爾だ〳〵何時でも彼奴が外國から歸ッて來れゞ直に警察の手に捕まるから當分此國へ歸る事ゝ出來ぬと云ふ者（長）ある程爾だ爾しやう無難に外國へ逃て行くか但しゝ此國で捕まるか二つに一つを撰ばせて（筆）だけれど彼奴も中々の知れ者だから大激戰を遣る積でおけれゞ了ぬよ僕の考へでゝ彼奴心ず吾々の中の誰かに決闘を吹掛るだらうと思ふ事に由れゞ三人よ皆吹掛るかも知れぬ（長）夫ゝ此方の望む所サ彼奴をない者にするにゝ決闘ほど好い者ゝない（筆）だが彼奴劔術にゝ名を得た達人で今まで人に勝た事が幾等もある（長）ナニ僕も今まで栗川巡査あゞと久しく撃劍の稽古をして滿更覺えがないでもないから（淡）

夫とも若し短銃と來れば僕が相手だ短銃に掛けて誰にも負は取らぬ積だ」と且語り且歩みて漸く倶樂部の入口に達すれば此時宛も内よりして幹事何某が出來れば筆齋の直ちに進み寄り茶谷立夫の番地を問ふに（幹）ナニ茶谷から今此倶樂部へ來て居るから直々に逢て聞給へ彼奴最う餘ほど困究して給仕の大糟にも借を拵へ僕にも貸て呉れと云ふけれど斷ッてあるが夫が爲め歌牌に手を出す事ハ出來ず何でも球突を遣て居る樣だ」と云捨て幹事ハ立去たり長々ハ筆齋に向ひ球突場ゑ居るのじや面白くあいヲ外の人も居るだらうから（筆）ナニ晝間のハ會員も餘り來ぬから何の室でも空て居るよ彼奴の家と違ひ面會を謝絶すると云ふ樣な事はないから結句便利だらう（淡）爾サ何處へでも空た室へ連て行て談判すれば好い」と尤もなる言分に長々も實にもと感じ其儘内へと歩み入れば就れよりか筆齋の顏を目認めて馳寄り來るハ彼の男爵ロスチャイルドの綽名ある給仕大

糟にて彼れ丁寧に頭を垂れ「失禮ながら貴方ハ美術家だけに同じ美術家の事ハ能く御存じでせうからパチノール街に住む西山三峯老人と云ふ彫刻師の事を伺ひ度いものですが」と異樣の言葉に筆齋ハ怪みながら「夫れが何だ」と問返す（大）イヤ其人ハ餘程の身代ですか（筆）詳しくは知ぬが先づ金滿家だ五十万以上の身代だらう（大）爾ですか夫で茶谷伯爵が近々其家の令孃と婚禮すると聞ましたが事實でせうか（筆）サア其樣な風説だお前ハ茶谷に貸でもあるのか（大）イエナニ僅ですから茶谷伯が其家の婿にでもなるとあら先づ安心です」流石は失念なきロスチャールド男爵の掛引かなと三人は顏見合せしが猶も筆齋の後に從ひ奥深く進み入れば筆齋ハ但ある一室の戸を開き自ら先づ進み入る淡長も續いて入見れば茲は即ち球突場にして茶谷は一人の相手と輸贏を爭ひ外被まで脱捨つ肉衿一枚にて棒を取り今しも最六かしき位置の玉を突んとする所ありしも長々の顏を見

てギクリとせし爲か首尾能く其球を突損じたり相手ゐ痛く喜ぶ体にて「アヽ到頭僕の勝になつたサア最う一突勝負しやう」と云ふ茶谷ゐ不興げに「イヤ僕ゐ是から行く所がある君ゐ新手の相手を撰びたまへ」と云ひ斜に筆齋の方を眺めたれば筆齋ゐ早や彼れが逃仕度なるを見隙さず聲を掛け「伯爵今日ゐ」と云へば彼れも「今日は」と冷淡に挨拶す相手は一同を知らざればに「イヤ君が止すなら僕も止さう何だか歌牌室に初つて居る樣だから其方が面白い」と茶谷より先に立去りたれば殘るゐ唯だ茶谷一人三人ゐ言合さねど今こそは好き機會なれト殘らず茶谷が方に向く彼れ三人の來意を見て取たるや否匆々に立去んとする景色の見えるにぞ何とか引留めんと思ひふうち淡堂先生ゐ先づ進み「アヽ貴方ゐ私しの顏をお見忘れあさつたと見えますね」茶谷ゐ聞きて打驚き「一向覺えませんが」と云ふ（淡）左樣サお目に掛ッたのゐ餘程久しい前ですけれど其場所が異ゐ所であつた爲め私しゐ中々忘れません（茶）イヤ夫ゐ貴方の思ひ違ひでせう私しゐ更にお目に掛ッた覺えゐありません」と立派に云切る口振にて察すれば彼れ全く淡堂の顏を忘れしあらん左ゐ云へ心に數々の惡事を蓄ふる人の常として油斷すべき事にゐ非じと思ひし如く何所となく不安心の樣子見ゆ淡堂ゐ急がず騷がず「左樣サ一度頭に怪我をすると誰しも記憶が失せますから（茶）エ何と仰しやる私しにゐ少しも分りませんが（淡）ハヽァ爾すると貴方はアルッ街の路次の角ゐ在る小さい家もお忘れにあつたと見えますね」と一言深く灸所を衝く

第五十七回

アルッ街の家を忘れしかとの問に茶谷立夫は最靜に「アルッ街の家とは何の家です」と問返せり扨は彼れ全く彼の家を忘れしあるりと淡堂は怪む程

あれど傍に見る長々が眼には茶谷が顔の俄に青くありし事まで分りたり（淡）夫を貴方が忘れるとは不思議です私しは婬者ですから其家に住で居た女に招れ穢苦しい二階へ上ッた所ろ丁度貴方が頭には重い傷を受け右の手の腕先には短銃の丸を受けて其女の罪惡に罪て居ました（茶）夫は貴方の思ひ違ひでいもありませう其患者が私しに似て居たかも知れぬが私しではありません（淡）イヱ客貌の似て居さ爲に爾云ふではありません全く貴方であつたから貴方だと云ふのです殊に其の女が貴方の名までも私しに告げ伯爵茶谷立夫と云ふはアノ人だと云ひました（茶）夫は貴方が欺されたのでせう其女が何うかして私しの姓名を聞知て居て口から出任せに言たのを直に眞事と思ふのは餘り迂濶ではありませんか（淡）イヤ其女には僞りは有ません僞があるなら貴方に在るのです」と是までは淡堂も唯初對面の紳士に對する如く平穩の調子にて逃來りして茲に至りて樣子を

變へ突然茶谷の右の手を確と取り「論より證據サア貴方の腕にある此傷が物を言ひます」と彼れが飾肉衿の袖を捲り上れば茶谷も同じく樣子を變へ急に淡堂の手を推退けて「是は怪しからん此上貴方の囈言を聞く耳ゝ持ません全体私しに喧嘩を買ふ目的ですか」と最も鋭く言放つ此時筆齋ゝ進み出で「イヤ喧嘩あど買ふでいなく吾々は唯貴方の言開きを聞に來たのです茶谷ゝ悖と驚きて「何と仰有る貴方までも此人の囈言に加擔するのですか（筆）ハイ加擔するのみならず其上の證據を持出します貴方が醫師淡堂先生に治療を受た其前夜テチル街ゑ住む建築師長谷川と云ふ者の窓を破り推入うとした賊があります此賊ゝ長谷川と其細君の爲に頭には重ひ傷を受け腕にゝ短銃を射込れて逃ました其傷までも殘ッて居るのに貴方が變えぬとは云はれますまひ」茶谷ゝ佶と怒りし如く下唇の片端を嚙みながら「益々奇怪な事を仰有る私しを其賊だと云ふのですか（筆）勿論（茶）宜しい

其樣お失敬な言分に對して辨解おぞしたとありては却ッて私しの名に障ります勝手に夫を誰の前でゝもお多舌りなさい私しが無言で居ても誰も私しを其賊とは思ひません其代り貴方がたの失禮い懲す方法を盡して懲します貴方がたも夫を否とは云ひますまい」ア、彼れ三人が孫じめ思ひし如く早く決闘を吹き掛けんとす彼れが懲すの方法とは決闘の謂ひなる事素より疑ふべくもあらず（筆）承知です、決闘の相手にもなりませう貴方が望む通りの滿足も與へませう併し貴方が第一に今云ふ賊でないといふ事を明白に言開き第二には彼の西山三峰老人よアレ程迄の迷惑を掛けたアルッ街の人殺事件に關係せぬと云ふ事を確かに證據立つゝ上でおければ決闘の滿足は與へられません（茶）何んだ私しを賊と云ふだけで未だ足らず今度は人殺しと云ふのですか貴方は全たく狂人です（筆）狂人か狂人でないか先づお聞あさい貴方を介抱した女と云ふい貴方の前の情婦で村越

お鞠と云ふものです醫師淡堂を迎へたのも此の女アルッ街の家を借りて居たのも此の女です此の女いアルッ街の其の家で縊り殺されて居ました が其曲者の一人い浮雲く警察の手に捕るゝ所を屋根から落て死ました三峰老人が目を燒拔れたるも此犯罪の引續きです則ち毒藥を持た恐しい曲者が此家に隱れて居たのです是等の事い私しが話さずとも貴方い疾より御存じでせう三峰老人の娘龜子と婚禮せんと計で居る程ですから」と一言い一言より痛く責寄るに龜子の名を聞くと齊しく茶谷い忽ち嘲りの色を浮め「ア、分りました貴方が根もない事を並べ頻りに私しを傷けるのい私しを追拂ッて自分が龜子嬢の婿夫にありたいと云ふのですな心の底が分りました發狂でいなく嫉妬でした」と毒々しく言排ぞくる筆齋も別に騷が「夫い貴方の推量ですから何とでも勝手に仰有い吾々の中にい妬嫉など云ふ賤い魂性で彼是云ふ者い一人もなく全く目の見えぬ三翠老人を憐む

爲です貴方の樣な者を婿にするゝ老人の後々の不爲ですから夫で貴方に婚禮の念を斷せやうと思ふのです若し龜子鶴を思ひ捨ねゞ吾々ゝ貴方の性質を三峯老人に知せます（茶）あるほど夫が威かしですが今思へゞ先夜貴方が長々君と此倶樂部へ遣て來たのも此威しの下地でしたな私しと談判するのが貴方の役目で三峰老人へ言告るのが長々君の受持でせう」と彼れが言葉ゝ愈々〳〵出て愈々〳〵傲慢無禮あり今まで默然として控へ居たる長々も今や我が順番の來りしと見て進み出で「イヤ伯爵三峰老人ゝ既に貴方の性質を知て居ます既に我が目を燒潰した女までも知ましたが唯だ其女と貴方の間よ深い關係があると云ふ丈を未だ知ぬのです尤も是も私しが充分の證據を擧げ近々〳〵話して聞せますから遠からず知るでせう」と斷然たる言葉を聞てゝ茶谷も恐ろしからぬにあらぬも我敵が何程まで我惡事を知れるやと氣遣ふゝ惡人の常あれば彼れ其深さを探らんとする如く却て嘲

笑ふ色を浮べて「フム證據立られる者あらドレ證據立て御覽なさい」と云ふ

第五十八回

證據立よと云ふを聞き長々は茲ぞと思ひ「素より私しの望む所です最も手近い證據と云ふゝコレ此指環が第一です」と乘て隱し待つ彼の指環を堅く我指に差込みて茶谷の目の前に突着ける茶谷ゝ愕と驚きて我知らず「エ此指環は（長）サア此指環ゝ確に貴方の物でせう彫附てあるゝ伯爵の冠物と車を用ひず馬を用ひず唯我が腕を用ふと云ふ貴方の家の金言ですから今更ら辭む事ゝ出來ますまい（茶）素より私しの指環としても貴方に贈つた譯ではなし夫を貴方が持て居るゝ必ず貴方が（長）盜んだに相違ないと云ふのですか決して盜んたのでゝありません貴方の知て居る某夫人が之を質屋から受取して歸る途中で落したのを偶然私しが拾ひました（茶）拾ひ

物を返さぬのゝ盗んだも同じ事です（長）返さぬ事ゝありません私しは返す爲に故々其夫人の家までも訪ひましたが夫人は秘密の洩るを恐れてか受取らうと云ません其癖夫人ゝ此指環を取戻し度い爲に新聞に廣告など出してあります（茶）夫ゞ何の證據です（長）何の證據か仕まいまで聞く中よ分ります其落した夫人と云ふは外でもなく貴方が捨苗夫人の家で一緒に謠た事のある方で其廣告を頼まれたのゝ私しの知るお婆婆と云ふ者です（茶）フム左すれば輕根松子夫人の事と見えますお外に私しが一緒に謠た夫人ゝありませんから（長）勿論其松子夫人です貴方が松子夫人と關係のある事は今更ら隱しても無益です第一に其お婆婆が松子夫人の邸を訪ふた時貴方が夫人の室から出て擯逐ひながら立去た事ゝお婆婆が私しの爲めに證人になると云ひます（茶）ナニ其樣な事にゝ證人も何も要ません成程私しゝ松子夫人の家を訪ひました夫人と知合の紳士ゝ誰でも其家を

訪ひませう訪ふのが何故怪いのです（長）お婆婆ゝ松子夫人が未だ露國へ行かぬ前に情夫が有たのを覺えて居ます其情夫が慥に貴方だと申します（茶）エ何だと私しを松子夫人のー（長）イエ松子夫人の情夫と云ず松お坊の情夫だと云ました」と勢ひ込で推詰るに茶谷ゝ顏色を失はんとして漸く取留め更に必死の勇を絞り却て愚弄せんとする如く「ハヽア貴君の小説ゝ仲々趣向が面白い私しが主人公だと見えますな（長）小説か實説か心に問へゞ分りませう夫のみでゝありません松お坊の松子夫人ゝ村越お鞠を縊殺た一人で三墨老人の目を潰たも松お坊です是にも確な證據がありますも貴方ゝ松お坊が逃げ去るとき其の着物を引裂た事も其切が警察の手に這入り殘る全体の着物が今三墨老人の手に入つて居る事も必らず松お坊から直々に聞て知つて居ませう松お坊が此の度再び外國へ逃た前に夫れだけの事を貴方に話たでせう」茶谷ゝ微に笑を含みて「ヘヽェ松子夫人

い再び外國へ行きましたか」と問ふ其の口振にて察すれば彼れ長々が松子夫人の居所を知ぬを見て笑ふに似たり（長）左樣サ外國へ行つたか行ぬか夫れも確かに知りませんが唯確かなのは貴方が松お坊と野合した爲め夫で村越お鞠を捨てお鞠が夫を怨んで多年貴方と松お坊を探して居た一條ですが茶谷が何の返事をもせぬ前に筆齋も加勢して「其の證人は私しですお鞠が乞食をして居る頃私しの施した恩に感じ幾度も其の事を私しへ話しました」と言葉を添ゆれば淡堂も同じく加勢し其の前貴方がお鞠の家に寐て居た事は私しが證人です私しの外に猶ほ貴方の腕にある創痕も證據です」長々は益々力を得サ此の通り證據が上れば後は言ずとも分ッて居ます貴方が此頃龜子嬢を迷はして婚禮する運びにあつた所へ松子夫人が歸ッて來たから貴方は持參金を分て取る約束で其事を承知させたが生憎又お鞠にも見附られ彼れは返ッて邪魔になるから松お坊に殺させたのです此樣な

詳しい事は未三峯老人には知せませんが若し老人が之を知ば貴方を婿夫にすると言ませうか貴方は是でも老人の婿になれますか」茶谷は聞くに從ひ追々に度胸を定めしと見え今は落着きたる口調よい「フム貴方の言ふのは夫だけですか（長）ハイ此上に貴方を訴へると云ふ事をヤせば夫で濟ます（茶）訴へるとは老人に（長）イエ目の見えぬ老人に其樣な事を知せ悲しませるでもありませんから直ち警察へ訴へます警察では松お坊の手下に働く鼻竹が死でから貴方の犯罪は分らぬ者と思ッて居ますが訴へれば直に吟味を初ます（茶）では今まで何故訴へずに待て居ました（長）貴方に逢て決心を聞た上と思ひまして（茶）ナニ私しの決心を（長）爾ですとも私しは今より八日目に訴へますだから夫までよ貴方が外國へ逃れば好し逃ければ容赦しませんサ貴方は一週間内に外國へ逃ますか夫とも警察の手に掛りますか其返事を聞きませう」と唯一言の所まで詰寄せたり茶谷は初

めにハ驚きて中程にハ最痛く恐るゝ体なりしも今ハ悪人の本性として充分に落着拂ひ「私しの返事は外さありません唯是だけです即ち貴方がさのゝ云ふ事ハ皆間違て居て私しが言開くハ最易いけれど茲で言開いても詰る所ハ水掛論です依て今より一週間の中に貴方がたに合點の行く充分なる証據を集め身の潔白を表しますから其時に後悔なさるな（長）其様な餘計の事ハ聞に及びませんサア一週間の中に外國へ逃ますか逃ませぬか（茶）其返事ハ茲でするに及びませんに逃るか逃ぬか一週間見て居れば分りませう私しも紳士ですから此通り辱められ默つてハ居ませんから追て貴方がた三人に決闘を言込むまで此儘に分れませう」と云ひ優々と此室を出去る様横着ども大膽とも評し様なし三人ハ彼れの振舞に呆れ果て顔を見合すのみなりしが（筆）實に大膽な奴じやないか（淡）幾等大膽でも仕方がない一腕の痕まで見られたから（長）何でも此上ハ一週間彼れの擧動を見て居やう（筆）爾サ其間に彼奴死物狂ひになり何の様な事をして龜子を欺しに來るかも知れぬから夫を能く用心して（淡）爾だ長々君が能く老人の家を守れば一週間待ても矣策ハあるまい」と云ひ是にて三人も戸外に出れば此時茶谷ハ待せありし馬車に乘り立去らんとする所なり淡堂ハ目早くも「アノ馬車の中にハ女が居るぜ（筆）松お坊だらう（長）爾だ迎へに來て居のだ」と云ひ三人ハ茲にて立分れしが此戰爭ハ遂に如何にか終らんとするや

第五十九回

一週間の内に身の潔白なる證據を集め三人に向ひて決闘を言込んとハ茶谷立夫の返事なりしが三人は別れに臨みて此後の運動を相談し長々と淡堂とハ老人を説き龜子を護り筆齋ハ是より茶谷の振舞を見張るべしと云ふに定めぬ斯くて筆齋ハ先づ茶谷の身代より詮議せんとて其公證人を尋

ね行き茶谷が龜子との婚禮よ其財産と定めしゝ何なりしやと問たるに銀行手形にて數万法露國の新公債證書にて十餘万法總て公證人が書留しとの事なる故扨は彼れ我思ひしに違はず松子夫人の財産を借り一時公證人を胡麻化して婚禮の約束を濟せしと見えたり左すれゞ松子夫人と二人に追てい龜子の持參金を分取りにすると約束を結びある事も最早や疑ふ所あし長々の言し如く婚禮後直ちに龜子と老人をスミルナへ連行くと云ふも實は他國にて二人を亡き者よする計みあらんと筆齋は殆ど身震する程に驚き恐れ更よ茶谷の住居を問ふにハスマン街との事あるにぞ直に夫を尋ね行きしに茶谷の住居は諸道具財産と共に三日前より借金の方に差押へとなり茶谷自身は孰れに宿泊れるや住居へとてい歸り來らずとの事なれば左もあるべとし思ひしも何樣之にて彼が居所を突留る手段い切れより依て再び倶樂部へと取て返し樣々に詮索しれれど何人も知る者あく

唯だ綫に手掛とも云ふべきは給仕の中に茶谷が先程乘去りたる借り馬車の番號が五十五番なりしを認たりと云ふ者あるより筆齋は其時の事を考ふるに醫師淡堂が馬車の中に夫人の乘るを認たりと云ひしも手掛の一つあり其夫人とは必定松あ坊よして茶谷は彼れの隱れ家へ連行かれしに相違あし左すれば是より五十五番の馬車を尋ね其驅者に問ふ外あしと此日は是だけにて止みたるが翌日は更に中央馬車局よ行き件の番號と驅者とを尋ねしに何の苦もあく分りしも爲其驅者に金など與へ色々と問ひたるに昨日は町靈れなるヂリーの正方より濃き覆面を垂たる夫人を載せ其差圖に從ひて倶樂部へ行き入口にて暫く待つうちに一人の紳士出來り夫人の傍へ坐を占めて更にラベー街まで行き其婦人一人降て右手の下宿屋に入たるも聞もあく出來りて再び乘り今度は又初めよ載せたるヂリーの此方まで驅行きつ茲にて二人を降したりと事細かに語りたり是にて見れば